721-Mu48ウ
1200500751556
21
48

本朝畫人傳 卷二

狩松村風著

雪月花書房版

始

721
Mu48
(2)

帝國圖書館藏

村松梢風著

朝畫人傳 卷二

雪月花書房版

国立国会図書館
昭 26.7.24 検 入

本朝畫人傳　卷二

林家獸風著

國立圖書館
昭和 23.7.24
購入

目次

葛飾北齋　一
谷文晁　四七
渡邊崋山　一二一
田能村竹田　二三三

裝幀　近藤浩一路

葛

飾

北

齋

帝國圖書館藏

浮世繪師

北齋より其の頃はまだ勝川春章の門人で、勝川春朗と名乗つてゐた。彼が春章の門人になつたのは安永末年頃の時だつた。其の前は、彼は彫刻を習つて洒落本の挿繪の板下などを彫つてゐたが、考へて見ると板下彫りくらゐ世の中に莫迦氣た職業は無い。他人の描いた圖を其のまんま板に寫すばかりで、少しも己れの意匠を加へることは許されない。それで上手に彫り上げて見ても、賞められるのは畫工ばかりだ。拙く彫つた時にだけ、彫師が下手だと言はれる、恁んな割りの合はない仕事は無い。どの道苦勞するなら、繪を習つて畫工になるに限る——と彼は考へたので、手蔓を求めて春章の門に入つて、畫で身を立てる決心をしたのだつた。それから數年間彼は一意專心畫の修業に沒頭して來た。熱心といへば彼ほど熱心な男も稀れだつた。酒も飲まず、煙草も吸はず、若い身だが女を買ひに行くでなし、只明けても暮れても繪筆を握つてゐた。だから技倆はメキ〳〵上達した。師匠の仕事を手傳はされても何時も賞められた。其の時分彼は内弟子として師匠の家に住み込んでゐた。

師匠の勝川春章は、浮世繪では當時並ぶ者の無い大家だつた。春章の賣り出しは明和五年五月の中村座の當り狂言『操歌舞伎扇』の浪花五人男の似顔繪を描いた時からだつた。其の頃迄彼の繪は一向

世間から認められなかつたので、衣食にも窮する處から、人形町の林屋といふ書肆に居候をしてゐた。彼は印すらも持つてゐなかつた。で、五人男の錦繪に林屋の仕切判の壹形に林といふ字の彫つてある印を捺して遣つた。するとそれが大いに賣れて、一時に春章の名前が擧つたが、壹形の印が評判で世間では彼に壹屋といふ異名を與へてしまつた。春章はさういふ人で、腕もあつたが、苦勞をした人だから他人に對する思ひ遣りも深くて、非常な好人物だつた。弟子に向つて小言を言ふやうなことも殆んど無かつた。處が、よくしたもので彼の妻はそれと正反對に非常な喧ましい屋だつた。一家の事は何も彼も女房が取り仕切つてやつてゐた。彼女の權力は夫よりも遙かに強かつた。好人物の春章は女房のいふがまゝになつてゐた。だから門人達は、師匠のめがねにかなふよりも、先づ其の細君に氣に入られなければいけなかつた。然るに春朗は、其の點に於て全く落第だつた。師匠の細君は甚だしく春朗を嫌つてゐた。嫌はれる理由は幾つもあつたが、第一無愛想で、强情でつむじ曲りで、それから恐ろしい無精者だ。どの點から言つても女に好かれる性ではなかつた。就中、彼の無精さ加減に至つては、師匠の細君のみならず誰にしても顰蹙せずには居られなかつた。春朗は、湯に這入ることが嫌ひだつた。湯錢を持たせて出してやると、其の錢で蕎麥を食つて、湯には入らず、體には依然として垢を溜めてゐた。着物は汚れても破れても、繕つたり洗濯をしたりすることはなく、一枚の着物を汚れて擦り切れてしまふまでは着通すのが常だつた。だから年中其の體からは虱が落ちてゐた。そんな男でも、せめてまめ〳〵しく働きでもすればまだしもだが、用事を言ひ付けても何一つ埒が明いたことはない。人が呼んでも氣が向かないと返事をしない。それで時々、思ひの外の、骨を刺すやうな毒口を叩くのである。

「あんな憎らしい男はないよ」

師匠の妻はよくさう言ひ〳〵した。

春章は澤山の門人を持つてゐた。内弟子も常に五六人位は居た。門下から出て既に名を成してゐる者もあつた。其の中でも一番有名なのは勝川春英だつた。これは既に獨立して一家を成してゐた。春英は濃艶な美人を描いて哥麿春章をも凌ぐと言はれる程だつた。春英は畫も上手だが氣風の面白い人だつた。彼は淨瑠璃が好きで其の藝は堂に入つてゐた。三味線をよく彈いた。そんな風だから兎角身が持てなかつた。放蕩をしてゐて家へ歸らないやうなことが屢々あつた。或る時も久しく家をあけて戻つて來なかつた。家では女房が借金取りの言ひ譯をしながら淋しく暮してゐた。すると或る日のこと表で、

「勝川春英の家は此處ですか」

と訪ふ者があるので、女房が急いで出て行つて見ると、何んの事だ、それは自分の夫である。

「自分の家を尋ねる人もないものだ」と女房が言ふと、

「何さ、餘り永くあけたから、留守の間にお前が家も何も賣つてしまつたかと思つてな、浮つかり他人の家へ飛び込むと失禮だから念の爲めに開いて見たのだ」

と春英は答へた。女房は、つい可笑しくなつて笑ひ出してしまつた。夫が歸つて來たら、あゝも言つて遣らうかうも言つて遣らうと考へ溜めて置いた事もみんな忘れてしまつた。

春英はさういふ淡白な人だつたから、若い者に對しても極く親切だつた。春朗などもよく目を掛けて引き立てゝ貰つた。

「師匠の家に大勢若い者も居るが、後來畏るべき奴は春朗一人だ」

と春英はよく人に向つて言つた。

春英に續く高弟は勝川春好だつた。春好も漸く其の頃一家を成し掛けてゐた。彼は師匠の眞似をして壺形の印を用ひてゐたので、小壺といふ異名を取つた。春好も腕は達者だつた。併し、春好は、春英と違つて非常に神經質の人間だつた。相手に依つて愛憎の差別が激しかつた。さういふ人だが一面如才ないから師匠の細君には氣に入られてゐた。師匠の春章も信用して、門人の稽古などは大概春好に任せてゐた。處が春好は春朗が大嫌ひだつた。其の點に於て彼は全く師匠の細君と一致してゐた。それは主として春朗が强情で、兄弟子である春好を重んじないことに原因してゐた。仕事の上でも春好が「それは斯う〳〵すればいゝ」と言つて世話を燒くと、春朗は其の場だけ默つて聞いてゐて、後で殊更に反對のやり方をするといつた風だつた。だから春好は春朗を眼の敵にして、弟分で頭が上らないのを幸にして、事につけては意地悪くいぢめ付けるのだつた。それにも拘はらず春朗の技倆がずん〳〵上達して行くので、春好は益ゝ癪に障つて堪らなかつた。恁んな風だから、春朗の境涯は餘り愉快なものではなかつた。

或る時春朗は人形町の菱川といふ繪双紙屋から招牌の繪の揮毫を依頼された。招牌だらうが何んだらうが人から依頼されて描くといふ事は滅多にないので、春朗は大喜びで註文通りの武者繪の招牌を描いて持つて行つた。菱川の主人は其の繪を見て「大層よく出來た」と言つて賞めてくれた。そしてまさに其の招牌を揭げようとしてゐる處へ、偶然兄弟子の春好が其處へ來合はせた。春好はそれを見ると、

「これは誰が描いたんです」と言つた。

「春朗さんが描いたのです。どうです、よく出來てるでせう」と主人は答へた。

すると春好は苦々しい表情をして、傍に立つてゐた春朗の顏を睨め乍ら、

「春朗、お前は誰に相談して此の繪を描いたんだ」

「……」

「たとひ招牌だらうが何んだらうが、世間へ出す物を、師匠に相談なしに描くといふことは穩當であるまい。お前はまだ年期の明けない體ぢやあないか。――それに此の繪は何んだ。甲冑なぞは出鱈目だ。恁んな繪を描いて招牌に掲げられちや勝川一派の恥曝しだ。己れの眼に留つたからは掲げさせることはできねえから、恁して遣る。言ひ分があるなら言つて見ろ」

春好はさう言ふが否やズタ〳〵に繪を破つてしまつた。

菱川の主人は感情を害した。

「春好さん、ひどい事をするぢやありませんか。成る程貴下の眼から見たら拙い繪でせうが、これでも春朗さんは一生懸命描いたのです。高が招牌のことだから、私は何も名のある先生に賴まなくてもと思つて、春朗さんに描いて貰つたのです。それがお氣に入らないにした處で、何も破つて捨てなくもいゝでせう」

「御主人、私のした事が氣に障つたら勘辨してお呉んなさい。だが、勝川には勝川だけの家法がありません。此の男の事は、師匠に代つて私が自由にするんだから、破つて捨てようと何うしようと私の勝手です。どうか默つてゐて貰ひ度い」

かう言はれると菱川も爭ふことが出來なかつた。稼業が繪双紙屋だ。流行つ兒の畫工に向つては餘り強いことも言はれない。勝川一門で幅を利かせてゐる春好と恁んな事から喧嘩をして後日の商賣に障りがあつては詰まらないと思ふので、春朗には氣の毒だが默つてしまつた。

春朗は到頭一言も言はなかつた。彼は蒼ざめた顏をして菱川の店を出た。彼は恁んな口惜しい事はなかつた。繪を破られた時には、一時に頭へ血が上つた。「兄弟子も糞もあるものか」といふ氣になつた。が、考へて見ると、彼は自身の畫に對して全く自信がなかつた。春好の罵倒に對して反抗する勇氣が失せてしまつた。畫以外の爭ひでは匹夫野人の喧嘩になる。それでは彼は潔くなかつた。結局彼は沈默して居るよりほかはなかつたのである。

「畜生、いまに見ろ、己れが日本一の繪かきになつて、あいつの面を見返して遣るから」

相手が居ないので彼は空に向つてさう言つた。

破門、からし賣り

彼は、其の頃の浮世繪畫家の大部分が、他派の畫を研究しようとはしないで、只々濃艶華麗を旨として俗眼を喜ばせる事にのみ汲々として、畫法筆力の如きは大して問題にしてゐないのを常に不滿に感じてゐた。浮世繪師と雖も、人物ばかりでなく花鳥山水をも研究して十分筆力を養はなければ駄目だと感

じた。で彼は英一蝶の草畫を手本にして研究したりしてゐたが、それだけでは滿足出來なくなつて、狩野派を學んで見度く思つた。すると或る處で偶然狩野某といふ可成り有名な畫家と近付きになつたので、其の時、

「私は勝川春章の門人で浮世繪を學んで居りますが、狩野派の畫を些かでも學び度いと存じます。先生の御教授を受け度い望みで御座いますがお許し下さいませうか」

と賴んで見た。すると其の人は、

「他人の門人に教授をするといふ譯にも參らんが、併し畫を學ぶ者は一派に留まつて居ては上達しない。お望みならば折り〳〵私の處へ遊びにおいでなされ、お話しだけは致さう」

と言つて呉れたので、春朗は大いに喜んで、折り〳〵其の人を訪ねて、畫を見て貰つたり、狩野派の畫法を尋ねたりしてゐた。すると其の事が誰から知れたのか、勝川一門の耳に這入つてしまつた。早速それを問題にして騷ぎ立てたのが例の春好だつた。師匠の細君も其の事を知ると烈火の如く怒つた。

「勝川の門人で師匠の家の飯を食つて居乍ら、狩野派の畫家の門を潛るとは怪しからん男だ。勝川の名折れだ」

と言つて春朗は嚴しく攻撃された。囂々たる非難が起つた。けれども春朗は、自身の行爲がそれ程惡い事だとは思へなかつた。師匠の用事の間を缺いて他流の稽古に行つたわけではなし、ましてや狩野へ弟子入りしたといふのではない。たゞ人の遊ぶ時間を利用して狩野派を研究して見ようと思つたまでのことだ。さうした事が師の名を辱しめることだとも思はれなかつた。だから彼は謝罪らなかつた。それで猶更物議をかもした。

「春朗のやうな忘恩の徒は速かに破門するのが至當である」

彼を攻撃する人々はさう言つて師匠に迫つた。

春章は溫厚な人だけに他から動かされることも多かつた。彼は春朗の熱心と畫才を認めてゐたので惜しくは思つたけれども、彼一人の爲めに一門の不和を引き起しても困るので、到頭春朗を破門してしまつた。

春朗は着のみ着のまで師匠の家を追ひ出された。すると彼はもう行く處がなかつた。

彼の生れた處は本所割下水で、父は中島伊勢といつて、幕府御用達の鏡師であつた。母は吉良上野介義央の家臣小林平八郎の孫だつた。元祿十五年、赤穗の義士が復讐の夜、平八郎は防戰して斃れた。其の時平八郎には八歲になる女の兒があつた。吉良家が滅亡の後其の兒は親戚へ引き取られて成長して、他家へ嫁して一女を生んだ。それが中島伊勢の妻で、北齋の母であつた。さういふ家柄で、彼の生家は

江戸でも人に知られた町人だつた。彼は其の家の二男に生れた。が彼が幼少の時分から家道は衰退して兩親共に早く歿し、長男が其の家を相續したが不幸續きでさしもの大家も沒落して家藏も人手に渡る始末となつた。それは彼が十一二歳の頃だつた。彼は貸本屋の丁稚になつた。二三年の間貸本を背負つてあちこち廻つて歩いた。さうしてゐる間に稗史や草双紙の類を讀み覺えたり、挿繪を手本にして繪を描くことを覺えたりした。が何時迄もそんなことをしてゐても詰まらないので、多少繪心があるといふ處から、或る人の世話で板木彫りの彫刻家の弟子になつたのだつた。其の彫刻といふ職業も詰まらなくなつて畫工を志してから最早六七年になる。そしてどうにかかうにか道があきかけたと思へば又今度の仕末である。彼は自身の不運を嘆息せずには居られなかつた。

差し當りの問題はどうして生活するかといふことだ。といつて見た處で繪を描くより外に何も知らないのである。賣れても賣れなくても、繪を描いてゐるよりほかに仕方はない。親戚はあるけれども、彼の性格として人に頭を下げて庇護を仰ぎに行くなどといふことは絶對にできなかつた。

「餓死するまでも繪筆を捨てずにやつて見よう」

と彼は決心した。それでもどうやら九尺二間の裏店を借りて住まつた。併し、春章から破門されて見れば勝川を名乘るわけにはいかないので、叢春朗と號した。繪は一向賣れなかつた。彼の畫才を認めて呉れる版元があつたにしても、勝川を憚つて畫かせて呉れなかつた。無名の彼に對しては肉筆の畫を依頼して來る者は勿論無かつた。そこで春朗はいろ〳〵考へた結果、自作自畫の戯作を書いて見た。彼は頗る文才もあつた。そして自分の名も是和齋、魚佛などといふ變名を用ひた。其の草稿を持つて或る書肆へ行つて相談して見ると、「これは面白い」と言つて書肆で引き受けて呉れた。『有難通一字』『鎌倉通臣傳』の二冊がそれであつた。しかし其の戯作も賣れはしなかつた。春朗は愈々窮した。

天明五年春、春朗は名を改めて群馬亭と稱した。彼は二十七歳だつた。彼は折り〳〵戯作の挿繪を畫いたり、初午燈籠や團扇の繪を描いたりして辛うじて生きてゐた。其の頃彼は俵屋宗理の畫風に私淑してゐた。宗理は俵屋宗達の流をくむ者で、明和安永の人、後に光琳風の畫を描いた。光琳の畫風を會得して、百琳とも號したが、世間では往々光琳と間違へたくらゐであつた。彼は宗理を慕ふの餘り、遂に其の遺跡を繼承して二世菱川宗理と稱へた。

其の頃は小傳馬町に住んでゐて、專ら狂歌の摺物を描いてゐた。當時は摺物といふものが非常に流行した。摺物の繪は錦繪と異つて別に畫法があつた。大體風趣の賤しからざることが重んじられた。宗理の描く摺物は意匠が清新であるといはれて、諸方から依頼があつた。とはいつても、畫料が安いので、其れを專業にして生活することは覺束なかつた。それに、其の時分彼は妻を持つたのだつた。そして長

女が生れた。獨り暮しの時はどんなに窮迫してもどうにか切り拔けて來た。愈ゝ最後となれば居候といふ便法もある。が、女房子持ちになつてからはさう手輕には行かない。妻子に飢じい思ひをさせるのは不憐である。收入は以前より多少殖えた理窟であるが、貧乏の程度に至つては、些かも變りはなかつた。摺物の註文が少し杜絶えると忽ち米が買へなくなつた。到底繪筆だけでは生活が出來ないから何か內職をしたいと彼は考へてゐた。で元手入らずの商賣はと考へた結果七色唐がらしを賣りに出て見ることにした。材料を買つて來て、自分で調合して、市中へ賣りに出た。土用の盛りだつた。燒けつくやうな日中を「七色唐がらし」と呼んで歩くのだが、素人の悲しさに賣り聲が出なかつた。二日續けて賣りに出たが一袋も賣れなくて、お負けに暑氣中りで霍亂を起して止めてしまつた。其の年の暮になると一層困つて來た。すると或る人がいふのに、

「それでは伊勢の杜曆でも賣つて見たらどうです。あれなれば一軒々々寄つて歩くので、呼び聲は要らない。曆の方は私が心配して上げよう」

と言つて呉れたので、早速其の事にきめてやつて見た。師走の街を彼は哀れな風體をして曆を賣つて歩いた。此の方は少しは賣れた。同じ乞食じみた商賣なら、幾らかでも錢になるだけ七色唐がらしよりは增しだつた。彼は吹きさらしの街を毎日さうして賣つて歩いた。或る日のこと、藏前通りを例の風體で曆を賣つて歩いてゐると、往來でバツタリと勝川春章夫婦に出會つてしまつた。

「春朗ぢやないか。久しく會はなかつたが、其の有樣はどうしたのだ」

と元の師匠は言つた。

「師匠で御座いますか、御不沙汰を致しました。お變りなくてお目出度う存じます」

「お前は繪を廢めてしまつたのか」

「否え、左うでは御座いません」

「何んだそれは」

宗理は赤面した。

「お恥かしい次第ですが、相變らず貧乏で困りますので、內職に杜曆を賣つてゐる始末で御座います」

「春朗さん、お前さんは勝川を見限つて、狩野派とやらを習ひに行つたさうだが、それでも矢つ張り繪でお飯は戴けないのかねえ。だがお前さんは、繪かきになるよりは曆を賣つて歩く方がどうやらお似合ひだよ。ほゝゝゝゝ。丁度家でも曆が要るから、馴染甲斐に一冊頂いて置かうかねえ」

師匠の妻はいまだに宗理を憎んでゐた。

「師匠、では又お目に掛ります」

宗理はさう言ひ捨てゝ、春章が何か言ひ掛けたのを耳にも入れずサツサと立ち去つてしまつた。

「一言詫びをすればいゝのに、相變らず强情な男だ」

と春章は其の後姿を見送つてつぶやいた。

年は明けたけれども、宗理は依然として貧窮から脱する事が出來なかつた。畫はさつぱり賣れなかつた。粥もすゝれないことが屢々あつた。

「已れももう三十を越してゐるのだ」

三十を越して一人前であるべき身が、妻子も養へないとは餘りに腑甲斐ないわけだ。自分の畫名が上らないといふのも畢竟するに自分に畫才が乏しいからだ。畫才の無い者が何時迄も繪に嚙り付いてゐるよりは、いつそ今のうちに轉業してしまつた方がいゝかも知れない——とまで考へて彼は悲觀してしまつた。或る日も筆を投じて思案に暮れてゐると、

「菱川宗理先生のお宅はこちらですか」

と尋ねて來た客があつた。

「菱川宗理は手前で御座います」

「私は大傳馬町の相模屋藤兵衛と申す者ですが、當年は私の初めての男の子の初の節句で御座います。で一つ先生に五月幟の繪を描いて戴き度いと思つて參りましたのですが、御承知下さるでせうか」

と客は言つた。相模屋藤兵衛と云へば有名な金物問屋だつた。

「承知致しました」

と宗理は喜んで答へた。

相模屋は小僧に背負はせて來た白絹の大幟を家の中へ持ち込んだ。宗理は直ぐ樣墨を摺り朱を溶いて其の幟へ鍾馗の圖を描いた。實に見事な筆力だつた。相模屋は大喜びで、其の場で小判二枚を奉書に包み、水引を掛けて、畫料として宗理に贈つた。

宗理は生れて初めて恁んな莫大な畫料を貰つたのだつた。捨てる神あれば助ける神もある。彼は全く嬉しかつた。これこそ彼に取つては天の助けだつた。彼は繪を廢さうなどと考へた先刻迄の自身の心持を恥ぢた。

「賣れないのは繪が拙いからだ。修業が足りないからだ。どんな畫才の乏しい者でも、身命を投げ出して修業をすれば立派な繪かきになれない道理はない——」

彼は生涯畫工で立つ決心をした。彼は平常妙見を信仰してゐたので、其の日は直ぐ樣柳島の妙見樣に詣でゝ自分の志の變るまいことを誓つた。其の後彼は朝は暗いうちから起き、夜更けて人が寢靜まる

頃迄畫筆を握り續けた。其の後で讀書をした。腕はしびれ、眼が疲れてしまつてから漸う止めた。夜更けて空腹になつてゐるので、蕎麥を二椀宛食つて床へ這入つた。それを一日も怠らなかつた。それがために寢に就く前に必らず蕎麥を食ふのが一生の習慣になつてしまつた。

狩野融川

出世

宗理の畫は追ひ〳〵世間から認められて來た。彼は其の頃、通笑、京傳、馬琴等の戲作の挿繪を描いて評判を取つた。其の關係から別して馬琴とは懇意になつた。馬琴は宗理より八つ年下だつた。

寛政五年の事だつた。日光神廟の再修について、狩野融川が畫の御用を仰せつかつた。そこで融川は門人の外に町繪師數名を隨へて日光へ出張した。選拔された町繪師の中に宗理も加はつてゐた。融川は名は寛信、常信の後裔で、其の前年宗家を繼いだばかりだつた。彼はまだ齡は若かつたが狩野家屈指の畫き手と云はれてゐた。

一行は宇都宮へ着いた。すると旅館の主人が融川に揮毫を依賴した。融川は承諾して、一人の童子が竹竿を持つて柿を落さうとしてゐる處の圖を描いた。宗理は側で見てゐたが、別室へ退いてから他の者に向つて恁う言つて融川の畫を批評した。

堤等琳

「融川先生は畫は上手だが、理に疎いやうだ。何故かといへば、あの繪を見るのに、竿の端が既に柿の所を過ぎてゐる。然るに童子はまだ足をつまだてゝゐる。どういふ意味だか私には分らない」

するとそれを融川に告げた者があつた。融川は非常に怒つた。

「それしきの理が分らぬ融川ではない。が、此の圖は、元來童子の無邪氣なあどけない所を現はす爲めに描いたものだ。だから態とあゝ描いたのだ。それも分らずに、みだりに他人の畫を誹るとは怪しからん奴だ」

さう言つて融川は激怒して、其の場から宗理を追ひ返してしまつた。宗理は平氣な顏をして獨り江戸へ還つて來た。

宗理はあらゆる畫を研究した。堤等琳の畫風を學んだり、又住吉内記廣行に就いて土佐風を學んだりした。或る時は司馬江漢に就いて西洋畫を學んだ。或ひは又明人の畫法を研究した。それは西洋畫の影響を受けたのであつたが、人物を描くには人體の骨格を知らなければならないといつて、千住の接骨家名倉彌次兵衞の門に入つて接骨の術を學び、筋骨の究理にも通じるやうになつた。其の頃になると門人も附いて來た。

寛政十年、宗理は其の名を門人宗二に讓つて、已れは北齋辰政と號した。それは妙見を信仰するとと

ろから付けた名だつた。妙見は北斗星、卽ち北辰星の象徵である。彼の妙見信仰は甚だ厚かつた。

或る夏のこと、北齋は例に依つて柳島の妙見へ參詣した。田圃道を戻つて來ると俄かに雷が起つた。彼は急いでやつてきた。すると電光一閃、すさまじい音響と共に落雷した。北齋は、堤の上から田圃の中へ轉がり陷ちた。が、身に怪我はなかつた。彼は泥まみれの姿で這ひ上つて來た。雷は鎭まつて空は晴れてゐた。彼は家へ歸つて來ると其の話をして、

「これも妙見樣の御利益で己れの雷名があがるといふ前兆だらう」

と言つて喜んで、雷斗といふ名を自から付けた。

果して其の頃から北齋の名聲は隆々として擧がつて來た。其の頃から彼は錦繪は畫かなくなつた。主に狂歌の摺物を描き、又時々自作自畫の戲作を發表した。就中有名なのは、寛政十二年蔦屋重三郎板元で刊行した『竈將軍勘略の卷』であつた。此の書は大いに賣れた。

或る年北齋は、江戸へ來た和蘭陀の加比丹から、我が國の人の一生涯を、出產から始めて年々成長の體、筆算學問の稽古、或ひは年たけて遊里へ通ふ有樣、又は年老いて死去し葬禮を行ふ體といふ風に、風俗畫として、男子女子一卷づゝ二卷に畫くことを依頼された。北齋は承諾して、畫料は百五十金といふことで約定した。すると加比丹に隨行して來た醫師の某も同じ物を依頼した。北齋は永い時日を費して其の畫を描き上げて旅館へ持つて行つた。すると加比丹は約束通り百五十金を出して二卷を受取つた。そこで今度は醫師の所へ行くと、醫師がいふのには「自分は加比丹と違つて薄給の身であるから同等の謝禮をすることは困難であるから、半額卽ち七十五金に負けて貰ひたい」と言ふのだつた。北齋は少し立腹して、

「それならば何故最初に其の事を明かして下さらないのですか。畫は同じでも彩色其の他を略したならば七十五金でも描かないことはなかつたのでした。もう描いてしまつた上はどうすることも出來ません。又これを七十五金で差上げる時は、加比丹に對して餘り高價に貪つたやうになつて心苦しい次第です」

と言つた。

すると醫師は、

「それでは二卷の中男子の圖一卷を七十五金で分けて貰ひ度い」と言ふのだつた。

それでも北齋は承諾しなかつた。「約束が違ふ」と言つて北齋は二卷の圖を持つて歸つてしまつた。家に歸ると、彼の妻は其の事を聞いて、

「それは半値でも賣つてしまふ方がいゝでせう。貴郎としては永い間苦勞して畫いた繪ですから殘念でせうが、此の繪は今和蘭陀の醫師に賣らなかつたら、いつになつても賣れる時はありませんでせう」と

云つた。

「それは已れも知らんではない。が、外國人が約束に背いたのを其の儘にして置くと、自分の損はのがれるにしても、日本の人は相手によつて掛値を言ふと言はれるに違ひない。それでは自分一人の事から日本の恥になると思つたので、已れは持つて歸つたのだ」

と言つて北齋は斷じて承かなかつた。後に其の事が加比丹の耳にはひつた。加比丹は感心して、更に百五十金を出して其の二卷をも引き取つて本國へ持ち歸つた。

北齋の畫は外國人の間で有名になつた。其の後年々北齋は外國からの註文を受けた。彼は日本の風俗畫を描いては長崎へ送つてゐた。が後に英米の異國船が渡來するやうになつて、幕府の對外政策が嚴しくなつたため、風俗畫の輸出は國内の祕事を漏す恐れがあるといふので北齋の繪も禁止されてしまつた。

文化六年、江戸音羽の護國寺に於て、觀世音の開帳があつた。五月十三日のことだつた。其の時北齋は講社から頼まれて護國寺で大畫を畫いた。其の日はそれが評判で見物人が雲のやうに集まつた。先づ庭前一面に籾殻を敷き、疊數百二十疊敷きの大厚紙を其の上に展げた。墨汁は四斗樽に入れて傍らに置いた。北齋は、藁帚を筆にして、丁度木の葉を掃くやうに紙の上を駈け廻つた。異形の山水のやうな物が出來上つた。暫くの間に出來てしまつたが、周圍の見物人には、何を描いたのかさつぱり分らなかつた。が、さて本堂の上に登つて見るとそれは半身の大達磨だつた。其の達磨の大きさは、口を馬が通ることが出來て、眼玉の上に人が坐つてもまだ餘分があつた。

其の後北齋は本所合羽干場で同じ大きさの紙に馬を畫いた。又兩國回向院では布袋の大畫を描いた。文化十四年には、尾州名古屋西掛所境内で、矢張り百二十疊敷きの紙に達磨の大畫を描いた。此の達磨には彩色を施した。

古淵

昔京都淨福寺の僧に古淵といふ者があつて大畫を作るに妙を得てゐた。併し其の古淵と雖も北齋程の大畫は描かなかつた。さうかと思ふと北齋は極く小さな繪を描くことにも妙を得てゐた。回向院で布袋の大畫を描いた時、直ぐ其のあとで米一粒へ雀二羽を描いて人々を驚かせた。

鍬形蕙齋

其の頃鍬形蕙齋といふ畫家があつた。蕙齋は細圖が得意だつたので、江戸一覽圖といふ物を刊行して世人を驚かせた。それは江戸八百八町を一紙の中に纏めたものだつた。それが大評判になつたので、北齋は竊かに可笑しく思つて、自分は、武藏、相模、伊豆、安房、上總、下總を一紙に縮圖して房總一覽圖と名付けて刊行した。其の精密巧妙なること遙かに蕙齋の上に出てゐた。

北齋は畫道の上ならば何んな藝でも出來ない事はなかつた。切子燈籠の繪のやうな物でも、鳥羽繪のやうな物でも皆非凡だつた。或ひは逆樣に描いたり、横に描いたり、或ひは指先で描き、或ひは鷄卵、

桝、德利のやうなものを筆に代へて縱横自由に描いた。

切子燈籠のやうな物は、所謂割物といふ畫で、幾何の術を知らなくては描けない物だ。が北齋は此の割り出しに長じてゐた。或る人が一世豐國の處へ行つて絹地へ切子燈籠を畫いて貰ひ度いと言つて賴むと、豐國は承諾して、直ぐに畫き始めたが、暫く經つて筆を投げて、

「これは手易さうに見えるが、なか〳〵さうでない。到底急の間には合はない」と言つて、斷つてしまつた。

其處で止むを得ず今度は北齋の處へ行つて賴むと、譯なく引受けて直ぐに畫いて呉れた。

後で豐國は其の話を聞いて「北齋にはとても敵はない」と言つて嘆息した。

馬琴と北齋

或る年將軍家齊が放鷹の途次、寫山樓文晁及び葛飾北齋を召して、席上畫を台覽あるべき旨前以て內命が下つた。北齋は當日文晁と共に淺草傳法院へ伺候した。其の時北齋は鷄を籠へ入れて持つて行つた。先づ文晁が描いた。其のあとで北齋が出て、初めは尋常の花鳥山水を描いた。其の健筆に感じない者はなかつた。すると今度は、長く繼いだ唐紙を横に置いて、刷毛で長く藍を引いた。それから携へて來た

鷄を籠の中から取り出して、其の趾にたつぷり朱肉をつけて紙の上に放つた。鷄は走つた。藍の上に朱い趾痕が點々としるされた。

「これは立田川の圖で御座いまする」

かう言つて北齋は拜をして退いた。人々は其の奇巧に駭かされた。

席上畫台覽の內命が下つた時、家主は七八日も前から北齋の體を預かつて濫りに外出することを許さなかつた。それは北齋といふ男は非常に放縱な人間だから、浮つかり外出させると何處へ行つてしまふか分らない。萬一の事があると家主が御咎めを受けるといふので、嚴重に監督してゐるのだつた。後で北齋は、

「御前揮毫もいゝが、どうも家主が嚴ましいので窮屈で弱つた」と人に話した。

北齋の畫名は四方に噪がしくなつた。揮毫を依賴して來る者や、笈を負うて畫を學び度いと言つて來るものが日增しに多くなつた。

其の頃になつても北齋の貧乏は依然として舊の儘だつた。當時、通常畫工の畫料は、繪本類一丁金二朱以上には出なかつたが、板元でも特に北齋にだけは一丁金一分を拂つてゐた。つまり倍である。だから彼の收入は他の畫工に比べると餘程多いわけだつた。其の上彼は酒も飲まず、煙草も吸はず、美食も

しない。只好きなのは菓子だがこれも大福餅位を喜んで食つてゐたから、生活費といふものは殆んど掛らない。普通なら金が殘るべき處だがそれ處か、彼は年中貧乏して食ふ物さへ無いことがあつた。寒中でも薄着で慄へてゐたりした。

彼は全然金錢を貯へるといふことを知らない人間だつた。締りがなくて、有ればあるだけの物を出してしまふので、幾らはひつて來ても結局同じことである。畫料を受取ると中味を改めても見ずに机の邊りに投げ出して置いた。そして弟子の中で貧しい者が來ると包みの儘遣つてしまつた。米屋や薪屋が勘定を取りに來ても矢張りさうだつた。丁度畫料の貰つたのがあると其の儘投り出して、

「これを持つてつて下さい」と言つた。

商人は、時に法外な金が包みの中から出ることがあるので、内々北齋を上顧客としてゐた。

北齋は幽靈の繪を畫くことに妙を得てゐた。すると其の頃、尾上梅幸（三世菊五郎）の技藝が世に名高かつたが、殊に幽靈に扮することが上手だつた。そこで梅幸は、北齋に幽靈を畫かせて見て、其の圖が果して眞に逼つてゐるならば、それにならつて扮裝をして舞臺へ出ようと思つて、或る時北齋を自分の宅へ招いたが、北齋はやつて來なかつた。仕方がないので梅幸は自分の方から駕籠へ乘つて北齋の家を訪ねて行つた。併し行つて見て梅幸は驚いた。其の家には何一つ道具と云つてはなく、室内は荒れ果て丶、一度も掃除をしたことがないと見えて塵埃が堆く積んでゐて、其の不潔なことは譬へやうがなかつた。人一倍潔癖な梅幸は到底上へあがれなかつた。彼はもう一度外へ出て駕籠屋を呼んで、駕籠の中の毛氈を持つて來させて室内へ敷かせ、さて室内へ通つて、一禮を述べようとした。

併し、北齋は梅幸の無禮な態度を憤つてゐたので、机に凭り掛つた儘見向きもしなかつた。

梅幸も憤然として、到頭一語も交へずに歸つてしまつた。

處が、其の後或る機會で梅幸は北齋に會つたので、嘗ての自身の不敬を詫びた。北齋はもとより淡泊な人だからそれ以來親しく交際した。或る年梅幸は一世一代の狂言東海道五十三次を上演した。其の時梅幸は是非北齋に看に來て貰ひ度いと言つて度び〳〵使を遣つた。併し北齋は相變らずの貧乏で錢が一文も無かつた。芝居は只で看せて貰ふにしても、場所柄だけに一錢も持たずには行かれない。けれども梅幸の好意に背くのも惡いと思つたので、丁度夏のことで蚊帳を質に入れると二朱の金が出來た。それを袂へ入れて芝居見物に出掛けた。梅幸は喜んで上等の桟敷へ案内させて芝居を見せた。北齋は見物した後で、例の二朱を紙に包んで祝儀に出して、本所石原の我家へ歸つて來た。が、其の晩から蚊に攻められて弱つた。本所は名代の蚊の多い土地である。北齋は蚊帳がないので夜になつても寢ることが出來なかつた。さうかといつて蚊いぶしの煙は、これがまた大嫌ひだつた。仕方がないので晝間寢て夜は徹

夜し、蚊に食はれ乍ら繪を描いてゐた。餘程經つてから或る人が蚊帳を買つて呉れたので助かつた。

文化四年、麹町の書肆角丸屋甚助板元で『繪本新編水滸傳』を刊行した。馬琴の飜譯で、北齋の挿繪であつた。處が端なくも此の挿繪の事から、馬琴と北齋との間に論爭が生じてしまつた。それは北齋の繪が餘りに日本化してゐるといふ馬琴の小言が出たからだつた。處が北齋は「未だ嘗て見た事もないものが書けるものか、なまじ淺墓に支那の故實に拘泥した物を書くよりも、其の場の筋を通す事に重きを置いて畫く方が、讀む人が日本人だから解りがいゝ」

と言つて馬琴の主張を容れなかつた。馬琴は非常に不服で、北齋が挿繪を書くならば自分は後篇の飜譯はしないと言ひ出した。すると北齋も、馬琴の飜譯ならば自分は挿繪を書かないと言ひ出した。間へ狭まつて板元は大いに弱つた。いろ〳〵手を盡して和解させようとしたけれども、强情な兩人は互ひに一歩も退かなかつた。そこで書肆としては、馬琴か北齋かどちらかを立てなければならない場合になつたが、兩方とも同じやうな大家のことであるから、何れに從つて何れを捨てるといふことも出來ない。兎に角此の問題は出版業者の間に一箇の新例を作る重大な事柄だからといふので、同業者の意見を徵することになつた。其處で江戸中の書肆が會合して評議をした。其の結果、當時馬琴の作と北齋の畫は並び行はれて、何れも優劣はない。が、此の書物が既に繪本といふ題號がある以上は、畫工の意見に從ふのが至當であらうといふことに一決した。其處で馬琴は手を引いて、第二編からは高井蘭山が代つて飜譯することになつて、編を追つて出版した。

併し、蘭山の飜譯は馬琴に比べると格段に劣つてゐた。後篇を閲讀しながら北齋は、

「矢つ張り馬琴は傑いなあ」と言つて嘆息した。

當時馬琴は四十歳を越したばかりで、京傳と競爭して頗る多作をした。名聲既に京傳を凌がうとしてゐる時だつた。北齋と馬琴とは、仕事の上では論爭をしたけれども、私交上では更に變りなく親密に交際つてゐた。彼等兩人の交りは隨分古かつた。北齋は一頃は馬琴の家に居候をしてゐたことがあつた。或る時北齋の母の年回があつたので、馬琴は香奠若干金を紙に包んで贈つた。其の後間もなく北齋は遊びに來た馬琴と談笑しながら、袂から紙を出して、チンと鼻をかんで投げ出した。馬琴がそれを見ると先日自分が贈つた香奠の包み紙だつた。

「貴公は怪しからん男だ。これは過日貴公に遣つた香奠の包み紙ぢやないか。此の紙で鼻をかむ處を見ると、定めて中味の金も佛事に使はないで、他の事に費消つたらう。實に許し難い不孝な男だ」

と馬琴は大層腹を立てゝ罵つた。北齋はにこ〳〵笑つて、

「いかにも仰つしやる通り、頂戴した金は全部私の腹中へ入れてしまつた。併し、精進物を佛前へ供へ

たり坊主を伴れて來て經を讀ませたりする事は、俗人の虚禮である。そんな詰まらない事に金を費消よりも、美味い物を食つて、父母の遺體である此の一身を養つて百歳の壽を保つ事が、何よりも父母に對する孝行だと私は思ふ」

馬琴は沈默してしまつた。二人の交際は最初はさういふ具合だつた。

處が、翌年又もや二人は衝突してしまつた。それは、須原屋市兵衛板元『三七全傳南柯夢』の挿繪のことからだつた。これは三勝半七の心中物で、七冊續きだつたが、最後の段の三勝半七が情死に赴く所で、北齋の挿繪を見ると、野狐が食を漁る體を畫いて、寒夜の景物としてあつた。馬琴は其の板下を見ると、

「何んだ此の狐は、恁んな蛇足を添へてある爲めに、まるで情死の男女は狐に誑惑されて居るやうだ。早速此の狐だけ削つて貰ひ度い」

と言つて板下を返して寄越した。

北齋は憤つた。此の狐を添へた事は、彼としては非常な趣向のつもりだつた。戀愛の爲めに命を捨てる人間もあれば、そんな事には無關心で餌を漁つてゐる狐もあるといふ處に、彼の寓意が存してゐるのだつた。大體情死といふ事が、男女の痴狂から起る事で、深く考へると、丁度狐に誑惑されるやうなものだ。さういふ意味からでも、其の場面に野狐を添へる事は、大いに見る人をして感じさせるに違ひないと北齋は考へたのだつた。

「馬琴が分りもしないくせに生意氣な事を言ふ。彼の著作の意の足らない處を、己れの挿繪で補つて遣つてゐるのぢやないか」

と北齋は云つて、斷然馬琴の申し出を拒絶した。そして、飽く迄も馬琴が野狐を削れと言ふならば、前回から畫いた挿繪を全部返還して貰ひ度い。其の上、今後馬琴の著作には挿繪を畫かないと言ひ出した。板元は大いに困つて、百方奔走した結果、挿繪は其の儘といふことで、どうにかかうにか兩人を和解させることが出來た。

かうして二人は折り〳〵衝突したが、文化八年に至つて、又々喧嘩をしてしまつた。それは、南柯夢が大いに賣れた處から、書肆木蘭堂が板元で『南柯後記』を出版することになつたが其の挿繪の事から馬琴北齋の間に確執が生じたのだつた。今度は喧嘩が大きくなり過ぎて兩人は到頭絶交してしまつた。

引越し

北齋は若い時から妙な病があつた。それは引つ越しをすることだつた。彼は少しも一つの家にとゞま

つてゐられなかつた。引つ越しをしたかと思ふと、直ぐに次ぎへと引つ越して行くのだつた。

「これは有難い、實にいゝ家だ」

さう言つて喜んでゐるかと思ふと、もう三日も經つと其の家に飽きてしまつて、

「何處かにいゝ家は無いだらうか」などと言つてゐた。

彼は江戸中を轉々として引つ越して歩いた。引つ越しをするといつても、家財が無いので樂だつた。机、蒲團、鍋釜位の物だつた。其の机や鍋釜すら無いことがあつた。机の代りに何かの空箱を据ゑ、鍋釜が無ければ近所から何か取つて食べてゐた。

本所石原片町に住んでゐた時は、隣家が煮賣りの居酒屋だつたので便利だつた。北齋は三度々々の食事を其の酒屋から運ばせてゐた。彼の家には食器といふ物は一つも無く、只土瓶と茶碗が二三箇あるばかりだつた。それで客が來ると、隣家の小奴を呼んで、土瓶を出し、

「お茶を頼むよ」

と言つて、茶を入れさせて客にすゝめた。

彼は、一日に三回引つ越しをしたことがあつた。

或る人が北齋に向つて、

清少納言圖

葛飾北齋筆

「昔から引つ越し三百といふ諺があつて、どんな貧乏人でも三百位の錢は消えるといふことです。あなたのやうに轉居をしては、たとひどんな金持でも終ひには其の費用に追はれて貧乏にならずには居りません。少し轉居をお止めになつたら如何です」といつた。

すると北齋は微笑しながら、

「私は引つ越しをするのが道樂だから仕方が無いよ。幕府の表坊主に、寺町百庵といふ人があるが、此の人は生涯に百回轉居をすると言つて、百庵と號してゐるのだが、もう既に九十何回越したさうだ。私も百庵にならつて百回轉居をして、死所を卜する積りだ」と言つた。

しかし、もう一つの原因は、彼が懶惰だからであつた。彼は決して自分で居室を掃除しなかつたばかりでなく人にもそれをさせなかつた。何時でも垢だらけの着物を着て、あたりには竹の皮だの、炭俵だのが散らばつてゐて、塵埃は堆く積り、丁度物置きと掃き溜めと一緒にしたやうな有樣だつた。さうしていよ〳〵汚なくなつて堪へられなくなると、引つ越しをするのだつた。

幕府の用達鶴屋某が、一日藥種商の千葉某と共に北齋の家を訪ねて、畫帖の揮毫を依頼した。すると其の時北齋は、南向きの縁側に坐つて、しきりに虱をつぶしてゐたが、二人の者の依頼の言葉を聞くと、

「生憎、私は今差し掛つた急用があつて、お需めに應じ難い。どうもお氣の毒樣です」

と言つて、着物の縫ひ目を返しては、虱を拾つて潰してゐる。二人は大いに顰蹙したけれども、折角來たことだから頻りに懇望した。そこで漸う虱を捕るのを中止して、畫帖へ揮毫した。何しろ不潔で堪まらないので、二人は繪の出來上るのを待つてそこ〳〵に暇を告げて其の家を出ると、

「もし〳〵御兩人」と北齋は表へ出た二人を呼び留めて、「人が若し私の住居の事を尋ねたら、大層きれいで立派な家だと言つて下さいよ」

北齋は、虛禮が大嫌ひだつた。何でも無造作だつた。人に會つても頭を下げるといふことはなく、ただ「今日は」とか「イヤ」とか言ふだけで、勿論時候の挨拶だの、體の安否を尋ねるなどといふことはなかつた。餘所から食物を買つて來たり、或ひは人から貰つたりした時でも、それを他の器へ移すといふことはしなかつた。竹の皮でも、重箱でも、自分の前へ置いて、箸を使はずに、手づかみで、ムシヤムシヤと食つた。食つてしまへば、重箱も竹の皮も其の儘にして置いた。

北齋の家を尋ねる人は、先づ門口で、「百姓八右衞門」と書いてある名札が目に付いた。それから主人の居室へ這入ると、

「おじぎ無用」「みやげ無用」

と書いた紙が壁に貼つてあるのを見るのだつた。

老年になつてからの彼は、九月下旬から四月上旬迄は火燵へ這入り切りだつた。つまり一年の半分以上は火燵の中で暮した。どんな人に面會する時でも火燵を離れるといふことはなかつた。繪を描くのにも其の中で描いた。飽くと、傍の枕を取つて睡つた。睡りから醒めると、又筆を執つて描いた。「夜着の袖といふ物は無駄な物だ」と言つて、附けなかつた。夜晝さうして火燵を離れないから炭火では逆上せると言つていつでも炭團を使つてゐた。かういふ風だから、虱が湧くのも無理はなかつた。

外出する時の風體は餘程變つてゐた。手織の紺絹などの木綿の着物の上に、柿色の袖なし袢天を着て、六尺有餘の天秤棒を杖の代りに持つて、草鞋か又は麻裏草履をはいて歩いた。宛然たる百姓だつた。彼自身もまた田舍者と見られることが內心得意で、自分から葛飾の百姓と稱してゐた。彼が葛飾を名乘るのは、本所で生れたからだつた。

さうして、彼は法華信者で、何時でも法華經普賢品の呪文阿檀地を唱へてゐたが、途を歩く時でもやめなかつた。

「此の呪文を唱へて歩いてゐると、途で知つた人に遇つても眼に入らないから不思議だ。どうも奇妙なものだ」

と彼は獨りで感心してゐた。しかしそれは、彼が呪文の方にばかり氣を奪られてゐるので、人が來ても氣が付かないのだつた。

應爲

柳川重信
南澤等明

北齋の妻に關する事はよく知られてゐない。が、とにかく彼は二度妻を持つた。そして、最初の妻は一男二女を生んだ。二度目の妻も一男一女を生んだ。そして彼は五十歳前後の頃からは全く獨身で暮したのだつた。

長男は富之助といつたが、放蕩無賴の人間になつて、家には居らなかつた。次男は多吉郎といつて、これは御家人加瀬某の養子となつて、御小人目付から、御小人頭に轉じ、進んで御天守番にまで出世した。多吉郎は俳諧を好んで、椿岳庵木峨と號し、本郷丸山鎮坂に住んでゐた。長女は門人柳川重信に嫁したが、仲が睦まじくなくつて家に歸つて間もなく死んだ。次女は夭死した。三女はお榮といつた。お榮は、堤等琳の門人南澤等明に嫁したのだつたが、これも夫婦仲が惡るくて離緣になつて家へ歸つて來た。彼女は父に學んで頗る善く畫を描いた。等明の妻になつたけれど、等明よりも繪は遙かに上手だつた。そして性質も父にそつくりだつた。夫が畫を描いてゐるのを見て、

「なんです、其の繪は」

と言つて笑ふのだつた。そんな風だから自然夫婦仲が圓滑にいかなかつた。

お榮は家に歸つて、其の後は獨身で暮して、畫作をしながら父の世話をしてゐた。彼女は應爲と號した。應爲といふ名は、父が彼女を呼ぶ時名前を云はずに、「オーイ」といふので附けた名だつた。

お榮は、美人畫に長じてゐた。それでは父よりも筆意が勝つてゐる處があつた。高井蘭山作の『女重寶記』の挿畫の如きは彼女の傑作の一つであつた。北齋自身も或る時人に向つて、

「美人畫では己れはお榮に敵はない。あいつのは、妙な描き方をするが、それで不思議に畫法に適つてゐる」と言つて讃めた。

お榮は父の性質を受けついで、物事に一向頓着しない女だつた。むしろ男のやうだつた。彼女は頗る任俠の風があつて、困窮してゐる者があると救つて遣つて喜んでゐた。貧乏を少しも氣にしないで、惡衣惡食も平氣だつたし、父ほど懶惰ではなかつたけれど、父が室内の清掃をきらふので、父の意に從つて決して掃除などはしなかつた。或る人が北齋を訪ねた時、北齋は机によりかゝつて筆でもつて室の一隅を指しながら、

「お榮や、昨日の夕方まで、此處に蜘蛛の巣がかゝつてゐたが、どうして失くなつたのだらう。お前拂

つて落しはしないか」

と心配さうに尋ねた。

お榮は首を傾けて、すかして見ながら、

「妾は一向揶つたおぼえはありませんが、不思議な事ですね」

と父と同じやうに心配さうな顏をして熱心に蜘蛛の在所を搜してゐた。

彼女の父と異る處は、少し酒を飲む事と、煙草を吸ふ事だつた。或る時お榮は、父が描いた絹本の畫の上に煙草の吸殼を落して燒穴を明けてしまつた。其の時はひどく後悔して、

「もう決して煙管は手に持たない」

と言つたけれども、二三日經つと忘れたやうに平氣な顏してスパ〳〵と吸つてゐた。

彼女は容貌は頗る醜くかつた。顎が出つぱつてゐて、一見醜婦であつた。北齋は娘に向つて「アゴ、アゴ」と呼んでゐた。とにかく、彼女は非常に親孝行の女だつた。

文化十四年、北齋は尾州名古屋へ行つて、門人牧墨遷の家に足をとゞめた。そして、十月五日に、同所の西掛所境內で半身達磨の大畫を描いた。彼は墨遷の家に居る間に、『北齋漫畫』の初編を描いたのだつた。北齋漫畫は、彼の代表作で名古屋の書肆永樂屋東四郎が板元で、文化十五年頃から編を追つて發

行した。北齋は名古屋に半歲滯在した。

それから彼は伊勢、紀州に赴き、大阪、京都を歷遊して、江戸へ歸つた。

天保二三年の頃、北齋は信州に遊んで、門人なる高井郡小布施村の高井三九郎の家に寓して、一年間とゞまつてゐた。彼は其處でも澤山繪を畫いた。三九郎は、鴻山と號して、畫をよくした。土地の富豪で酒造家であつたが、畫が好きだつたので、嘗て京都に遊んで岸駒に就いて學んだ。或る日岸駒は門人を集めて「當時京阪に畫工多しと雖も我が右に出でる者はない。只恐るべきは江戸の葛飾北齋である」と言つた。三九郎はそれを聞いて、岸駒の門を去つて江戸へ來て、改めて北齋に就いて畫法を學んだのだつた。

北齋は、其處を發足する時、門出に、

八の字のふんばり强し夏の富士

と、一句を口ずさんだ。

天保五年六月に、『富嶽百景』を著した。之も一代の傑作である。これは三冊物で馬喰町西村與八の出版だつた。天保七年には『和漢繪本魁』『繪本武藏鐙』『葛飾新雜形』等を續々出版して、老來益ゝ旺んの意氣を示した。彼は七十七歲だつた。葛飾新雜形は所謂割物の圖樣で、其の精密さに至つては看る

人として驚嘆しない者はなかつた。

彼は、百歳迄は生きなければならないと言つてゐた。

「私は、六歳の時から物の形狀を寫す癖があつて、其の後久しい間繪筆を持つて居るが、七十年來畫いたところの物には、全く取るに足る物はない。七十歳の時、私は稍、禽獸蟲魚の骨格、或ひは草木の出産を悟ることが出來た。だから八十になればます〳〵進み、九十にして奥意を究め、百歳で神に入るだらう、と思つてゐる。若し百十歳まで生きることができたならば、一點一畫生けるが如くになるに違ひない、と思つてゐる」

と、彼は其の頃人に向つて言つた。

露木孔彰は其の頃至つて若年で、北齋の門に入つて畫を學んでゐた。彼は或る日お榮に向つて、嘆息して、

「私はどう描いて見ても、筆が思ふやうに運べない。私は繪かきになり度いと思つても、生れつき不器用で駄目でせうか」と言つた。

するとお榮は笑つて、

「妾の父は幼年から始めて八十歳の今日まで、たゞの一日も筆を採らない日はありません。處が、先達つての事でした、筆を投げ出して腕を拱いて『己れは本當に猫一匹描くことが出來ない』と言つて涙を流して嘆いて居りました。すべて繪ばかりではありません、何事でも、自分の力が及ばないと思つて棄てようと思ふ時が、其の道の上達する時です」と言つて諭した。

北齋は、富嶽百景の初編を書いた時から、卍と名乘つた。其の後は落款にはかならず、畫狂老人卍、或ひは前北齋卍と書いた。

當時北齋といへば、兒童走卒も其の名を知らない者はなかつたが。處が卍では通りが悪かつた。で恁んな話しがあつた。北齋は前々から川柳が好きで、名を百姓といつて、葛飾連の棟梁だつた。或る時中橋の小川といふ茶店で川柳點の開卷があつて、北齋も出掛けて行つたが、其の歸りがけのこと、人々と一緒に遣つてくると日が暮れたので、日本橋の雨具店で小田原提灯を買はうとすると生憎無かつた。只油も引かない白提灯があるだけだつた。でそれを一つ買つたが、葬式のやうでまさか白張りの儘では持つて歩けないので、何か印しを書いたらよからうといふので、其の時連中の一人の夢助といふ男が、北齋に向つて、

「卍さん、一寸何か書いて下さいな」と言つた。

「よし、よし」

北齋は提灯を店の者に持たせ、左の手で一寸底の方を持ち乍ら、達筆に、のしを三つ並べて畫いた。

すると側で見てゐた夢助が、

「お前さんはなか〳〵繪心がありますね」

と言つたので、みんなどツと笑ひ出してしまつた。

其の年の冬、北齋は或る事情の爲めに江戸に居られなくなつて、相州浦賀へ遁げて行つて、暫く潜れてゐた。其の事情といふのは、北齋には一人のやくざ者の孫があつた。それは彼の長女が柳川重信に嫁して生んだ子だつた。其の孫は成長すると放蕩無頼の若者になつて度び〳〵祖父の北齋を苦しめた。が今度も其の放埒な孫の事から、北齋までが掛り合ひになつて罪を着るかも知れないやうな羽目になつたので、彼は其の難を遁れる爲めに、縁者をたよつて浦賀へ行つて身を潜したのだつた。

北齋が、此の孫を恐れることは非常なものだつた。本所の鎧馬場に住んでゐた頃、彼は毎朝、小さな紙に獅子を描いて、まるめて家の外に捨てた。或る人が偶然それを拾つて披いて見ると、獅子の繪で、運筆輕妙で何んとも云ひ難い面白味がある。そこで北齋に贊をして貰ひ度いといふと、北齋は即座に筆を採つて、

年の暮さてもいそかしさはかし〻

と書いて渡した。其の人は更に北齋に向つて、

「どういふわけで毎朝獅子を畫いてお捨てになるのですか」

と尋ねて見た。すると北齋は憂鬱な表情をして

「これは、私の孫といふ惡魔を拂ふ禁呪です」と言つた。

後には其の事が評判になつて人々は毎朝北齋の家の前へ行つて、爭つて其の繪を拾つた。

終焉

天保十年、北齋は八十一歳だつた。其の年の冬、彼は本所石原片町からつい近くの達磨横丁に轉居した。すると或る晩近所から出火があつた。北齋はまだ起きてゐて繪を描いてゐたが、火事だと聞くが否や駭いて、筆を持つた儘表へ飛び出して跡をも見ずにずん〳〵遠くの方へ遁げて行つてしまつた。お榮も續いて飛び出して、父の跡を追つて遁げて行つた。風が強かつたので、北齋の家も類燒した。

荷物を出せば出す暇は十分あつたのだが、恁んな風で何一つ持ち出さなかつたので、父子の者は全くの丸燒で乞食同然になつてしまつた。北齋は、他に惜しい物は無かつたけれど、若くて畫道に志した頃から始めて今日に至る迄、和漢古今を論ぜず、西洋の繪畫に至るまで、苟くも見るに足りる物があれ

ば必ず縮寫して藏つて置いた。それが今では一車位あつたのを、火事の爲めに燒いてしまつた。北齋はがつかりしてしまつた。彼は、自分の苦しんで歩いて來た一生涯の足跡を拭き消されてしまつたかのやうな氣持がして、寂しかつた。

其の前に、彼が七十五歳の時、それまでに轉居した數が凡そ五十六回になるけれども、未だ嘗て火災に罹つたことがないといふので、自慢して、他人に鎭火のお札を書いて遣つたりしたことがあつた。其の彼の自信も今度は裏切られてしまつた。

燒け出された北齋親子の有樣は實に慘めだつた。或る人から畫の依賴を受けた處が、筆だけはあるが硯も何も無かつた。そこで彼は有り合せた德利を碎いて、底の方を筆洗にし、碎片を繪具皿にして、畫いて與へた。

併し、貧乏に慣れてゐる北齋父子は、そんな中でも平氣で暮してゐた。

弘化年間の事だつた。三世豐國が兩國の萬八樓で書畫會を開いた。すると、ちやうど其の日は大雨になつた。出席を約してあつた人達も、其の爲めに見合せてしまふやうな有樣で、思ひの外淋しかつた。處が會が始まると間もない頃、北齋が簑笠鞋ばきで遣つて來て、

「葛飾の百姓が參りました」

と云つてはひつて來たので、會主豐國は大いに感激したのだつた。其の日北齋は終日筆を揮つて、數十枚の席畫を畫いた。

嘉永元年、北齋は本所から淺草聖天町へ轉居した。其の年彼は八十九歳で九十三回目の轉居だつた。其の家は遍照院といふ寺の境内にある狹い長屋だつた。北齋は豫て、生涯葛飾の里に住んで死ぬ積りだと言つてゐたが、どうかした氣紛れで淺草へ引つ越して來たのだつた。其の時或る人が次ぎのやうな狂歌をよんで北齋に贈つた。

百越すもおろか千里の馬道へまんねんちかくきたの翁は

きたの翁は勿論北齋のことで、まんねんちかくとは、其の頃馬道に萬年屋といふ菓子屋があつて大層流行つた。下戸の北齋に取つては萬年屋も近くて結構であるといふ意味を通はせたのだつた。

翌二年の春北齋は病に罹つた。醫藥のきゝめが更に見えなかつた。或る日醫者はお榮に向つて、老病であるから到底恢復しないと言つた。門人や知友が集まつて來て日々看病をした。が、病は重るばかりだつた。

いよ〳〵臨終といふ少し前に、北齋はパツチリ眼を開いて、かすかに溜息をついた。

「天が若し已れに、もう十年の壽命呉れるなら…」と言つた。それから、稍暫くしてから、「天が若

し已れをもう五年生かして置いて呉れたら、本統の繪をかくのだが……」

終ひの方は言葉が吃つてよく聞き取れなかつた。さう言つて彼は永久に眼を瞑つたのであつた。それは嘉永二年四月十八日であつた。

遺骸は淺草の誓教寺に葬られた。葬禮は門人や舊友が各々醵金して執り行つた。見送りの中には、槍挾箱などを持たせた武士が數名交つてゐた。古來裏店から槍や挾箱を持つて見送られた葬式は例しがないと言つて、其の頃專ら話の種に上つた。

谷文晁

難波の宿

木村巽齋（蕭葭堂）

谷文晁が、長崎漫遊を思ひ立ち、江戸を發つて大阪へ着くと、江戸の先輩の紹介狀を持つて蕭葭堂木村巽齋を訪問したのは、天明八年の秋のことであつた。

蕭葭堂の家は船場の呉服町といふ處にあつた。其の家には、巽齋の本妻と妾とが一所に住んでゐた。が、どちらももういゝ齡をした婦人だつた。それに本妻の子の娘が一人、四人家内で下婢一人使つて暮して居たが、何しろ來客の絶え間がないので何時でも忙しかつた。併し、主の巽齋は名代の客好きで、初對面の文晁を快くもてなして呉れたので、文晁も草鞋を脱いで心置きなく厄介になることが出來た。

巽齋は五十五六といふ年配、文晁のはうは二十六歳である。二人の間は、齡が違つてゐるばかりでなく、地位からいつてもまるで比較にならないほど懸隔があつた。文晁はまだ殆んど無名の畫工である。だから文晁が蕭葭堂を訪問したといつても、それは師弟の禮を執つて教へを受けに來たのだ。處が蕭葭堂のはうでも文晁の將來畏るべき人物であることを見拔いたと見えて粗略には扱はなかつた。

蕭葭堂は堀江の酒造家の家に生まれた。或る時庭に井戸を掘ると古い蘆の根が出て來た。即ち難波の蘆である。そこで堂號を蕭葭堂と稱へたのだつた。彼は五六歳の頃から畫を學んだ。初めは父が郡山の

柳里恭と友達で、柳里恭が折り〳〵其の家へ來て泊つたりするほどの間柄だつたので、洪園に手本を畫いて貰つて習つたが、後に京都へ行つて大雅堂に就いて山水を學んだ。繪畫のほかに、京都の津島恒之進といふ人の門に入つて物産本草の學問をした。蒹葭堂の繪は、名聲の高いわりに、それほどうまいわけではなかつた。併し彼は資産のあるにまかせ、和漢の書畫典籍をはじめ、山海の名種、蠻夷の物産金石の類に至るまでありとあらゆる奇物珍物を蒐めて所藏してゐた。從つて其の該博精通は驚くべきものだつた。或る人が黄檗の大成禪師に向つて支那の風俗を尋ねると、禪師は丁度側に居合せた蒹葭堂を指して「支那のことならわしよりも此の人のはうがよく知つてゐるからお聞きなさい」と言つた。大成禪師はもと支那の人で、投化して黄檗に住した人であつた。それは當時著名な笑話であつた。それ位蒹葭堂と云へば博識家として知られてゐた。同時に彼の客好きなこともまた有名であつた。客があれば朝から晩まで談話を續けて一向飽く氣色はなかつた。相手によつて文學を論ずることもあり、武藝を談ずることもあり、或ひは神佛經典の事でも、物産故事の類でも、雅でも俗でも各その言ふところに答へないといふことはなく、連日連夜話し續けても話題の盡きるといふことはないといふ物識りである。人物は頗る溫厚篤實で、殊に後進の誘掖については至らざるなく親切である。さういふ風で、全國の文人墨客と交際を結び、誰でも大阪へ來れば先づ第一に蒹葭堂を訪ねるといふ有樣であつた。

文晁も數日足を停めてゐた。毘齋は、文晁の爲めに、自己の祕藏する「名公畫譜」を出して見せて呉れたりした。家内のものもみんな親切にして呉れた。すると或る日のこと新らしい客が蒹葭堂へやつて來た。主人は文晁に其の客を紹介した。客は釧雲泉であつた。雲泉は、肥前島原の人で、其の家は武士であつた。彼は子供の時から父に從つて長崎へ出て支那人に就いて學問をしたので、頗るよく華音に通じてゐた。長じてから繪畫を善くし、元人の趣きを研究して、風韻雅致に富んだ畫を描いた。父が歿すると彼は飄然として故郷を捨てゝ漂泊の旅に出た。文晁が初めて會つたのは、雲泉がまだ三十を越したばかりであつたが、彼は既に、交遊天下に普ねく、夙くも一家を爲してゐた。文晁は欣んで、雲泉から南宗の畫法を敎はつた。

雲泉は旅をするのに何時でも小さな笈を二箇、振り分けに肩へ掛けて歩いてゐた。其の一つには繪の道具がはひつてゐた。が、もう一つの方には何がはひつてゐるのかしら、と文晁は思つた。或る日文晁がそれを尋ねると、雲泉は笑ひながら笈を開いて見せた。すると其の中には魚釣道具が一杯はひつてゐた。つなぎ竿の太いのや細いのや、針、絲、餌入れ、たも、さういつた道具が、實に完全にと〻のつてゐた。

「先生は餘程釣りがお好きと見えますね」

「私は旅行してゐても、一日畫作をすれば、一日は釣りをすることにしてゐます。尤も釣りのはうなら毎日でも飽きはしない。處が當家へ來てからは一度も釣りに行かないので少し心持が變になりました。如何です文晁先生、あなたも釣りはお好きですか」

文晁は釣りなどは餘りやつたことはないが、相手の前で嫌ひだとも云へないので「好きだ」と答へた。すると雲泉は大變喜んで「では今日は釣りに出掛けよう」と言つた。二人は餌の支度をして河口の方へ釣りに行つた。雲泉は澤山釣つたけれど、文晁の針には一尾もかゝらなかつた。

雲泉は釣りのほかに酒と茶が好きであつた。酒のはうなら文晁も敢て雲泉に負けないので、ふたりは朝から飲んだ。處が、主の蘗葭堂は、賣茶翁と親友で茶は非常に好きだが、酒は一向不得手である。で二人は主人をそつち除けにして旺んに飲んで氣焰を吐いた。

雲泉のはうが先きに其の家を辭去した。が、これが緣になつて、後年雲泉は江戸へ來れば必ず文晁の宅を訪問した。其の後も久しく雲泉は放浪の旅を續けてゐた。例の二箇の笈は依然として彼の肩に掛つてゐた。彼は或る年奥州白河を過ぎて、一士人の家に宿つた。士人が禮を厚くして遇するので、數日滯留したが、彼は毎日釣りにばかり出てゐて一向繪筆を把らなかつた。すると士人が雲泉に向つて「私が先生をお泊めしてゐるのは、先生に繪を畫いて戴かうと思ふからです。どういふわけでさう毎日釣りば

かりなさるのですか」と言つた。「あゝ左樣ですか」と雲泉は答へた。翌日彼は衣を拂つて其の家を去つた。中山道の本庄驛に假寓してゐたことがあつた。其處は利根川を距ること十丁餘りの地だつた。すると雲泉は毎朝利根川へ行つて顏を洗つて、歸りに其處から茶の水を汲んで來るのだつた。それを一日も懈らなかつた。晩年雲泉は越後の新潟へ行つて落ちついた。其の時分から益々畫名が高くなつた。北越に南畫を普及させたのは雲泉の功である。そして、文化八年出雲崎で病を得て歿した。

途上の奇遇

文晁は、九月七日の朝、蘗葭堂一家の者に暇を告げた。其の朝は殊に美しい秋晴れだつた。親切にして呉れた此の家の人々に對する別離の哀愁をおぼえると同時に、又もや未知の土地へ旅立つ心に勇み立つた。別れに臨んで文晁は一詩を賦して主人に示した。

一時畫談蘆荻前　負笈素秋向海天
爲是丹青情未盡　遠隨異客問雲烟

大阪渡海場兵庫屋から乘船した。船は順風に帆を上げて走つた。八日の朝八時頃には兵庫湊に安着した。人々は其處で船を降りた。其の日は須磨明石等の名所を見物して、夜は播州加古川で泊つた。九日

の朝、冷たい秋雨のそぼ降る中を加古川を出て、姫路を經て三石まで行つて宿を取つた。すると旅芝居がかゝつてゐたので、夕飯を食べてから其の小屋掛けの芝居を見に行つた。奥州秀衡の狂言をやつてゐて、大變面白かつた。

十二日の午後には岡山へ着いた。此の土地の豪家である浦上兵右衛門といふ人が、文晁の父の谷麓谷の友人だつたので、彼は其の家を訪ねて行つた。浦上は非常に喜んで文晁を迎へた。妻子も座敷へ呼んで文晁に引き合はせた。文晁は久しぶりで心から打ち寛ろいだ氣持になつた。主人は客への御馳走に娘に琴を彈かせたりした。其の娘は妙齡で頗る美人だつた。文晁は其の琴で旅情を慰められた代りに、青春の身で一人旅をしてゐる淋しさをも同時に味はゝなければならなかつた。

十三日には、浦上に伴れられて同じ土地の備中屋安之助といふ豪家へ行つて揮毫をした。其の晩は名月だつた。備中屋では良夜の宴を催して文晁を款待した。

浦上は、文晁に緩りと遊んで行けと言つたが、何となく先きに心が急がれるので歸途の再訪を約して十四日の朝岡山を立つた。吉備津宮に參拜して、それから備前備中の境の三軒茶屋で休息し、矢掛に泊つた。十五日は矢掛を立つて、晝時頃にかんなべといふ驛に着いた。小さな町だつた。文晁は何處かで中食をしようと思ひながら歩いて行くと、

「もし〳〵、あなたは文晁さんぢやないか」

と呼び留める者があつた。

文晁が振り返つて見ると、それは江戸の司馬江漢であつた。文晁は餘りの意外に驚いてしまつた。

「江漢先生でしたか、どうも不思議な所でお目に掛りましたね」

「私もね、人違ひだらうと思つたが、餘りよく似てゐるから聲を掛けて見たんです。あなたが旅に出たといふことはちつとも知らなかつたが、これこそ神の引合せといふのでせうね」

「ほんたうにうまい具合にぶつかつたもんですね。時に江漢先生、あなたは何處迄行くんです」

「何處と云つて、はつきり極めて來たわけでもないが、とにかく西の方へ行つて見る積りでね」

「それはいゝ、私は長崎が目的なんだから、同じ方向です。是非御一緒にお願申します」

「それは私も望むところです。私も長崎が目的ですが、私は方々寄つて行くつもりだから、何處でお別れするか分らないが」

二人は江戸に居た時は、畫家仲間の交際で席で顔を合はせる位のことで、格別親しくしたわけでもなかつたが、かうして遠國の旅先でゆくりなくも邂逅して見ると、兄弟にでも逢つたやうに、懐かしく感じるのだつた。

二人は一緒に晝飯を食べ、それから駕を雇つて先に進んだ。大渡り川といふ川があつたが、二十間ばかりの流れの上に一枚板の橋が架つてゐた。其處は駕を降りて渡つた。山手といふ所からは彼方に福山城が見えた。備中と備後の國境あたりの海邊に松永といふ湊があつた。漁師の家が並んでゐたが、其の日は祭禮で大變賑はつてゐた。二人は駕を返して、鎭守の社の奉納角力を見物したりして呑氣に歩いた。日暮れ前に備後の今津へ着いて、藤屋源助といふ旅籠屋へ泊つた。

平賀鳩溪（源内）

司馬江漢は文晁より十六上の四十二歳で、彼は其の頃全く獨技の西洋の油繪を描いて世間の評判になつてゐた。司馬江漢といふ名は、若い時漢學を修めたので支那の風に倣つたのだつた。通稱は安藤吉次郎、不言道人、春波樓等の號があつた。最初畫を狩野尙信に學び、更に宋紫石に就いて漢畫の法を問ひ、後に浮世繪に轉じて鈴木春信の門人となつた。江漢は非常な好學の人で、天文曆數等にも深い興味を有つてゐたので西洋の學風を慕ひ、平賀源内の教へを受けて早くから油繪をかき、西洋の銅版術を研究して、銅版畫を作つたりして世間を驚かしたりしたが、長崎へはまだ行つたことがなかつた。それで今年（天明八年）の四月に江戸を發つて、これから長崎へ行かうとする途中であつた。彼は翌寛政元年三月江戸へ歸つた。

文晁は、其の人を知つてはゐたが、江漢と膝を交へて親しく物語るのは今日が初めてゞある。江漢は頻りに西洋の畫の特色を說いてきかせた。何物でも求めてやまない文晁の心は、江漢の說明する西洋畫の理論をも直ちに理解することが出來た。江漢は頻りに眞を寫すといふことを言つた。

「例へば富士山の繪だが、土佐でも、狩野でも、また唐畫の畑の人でも、一人として眞の富士を描いた人は無い。探幽の富士と云つた處で、あれも只筆意筆勢を見せるだけの物で、富士山の實景とは大違ひだ。唐畫も矢張りそんな物で、彼等は見たこともない支那の風景を筆にまかせて只好い加減に描くだけで、それが何の山とも何の川とも分らない。これぢやまるで夢を描くやうなものだ。見る人は勿論のことだが、描く當人だつて一向わけが分つてゐない。そこへいくと西洋の繪は……」

といつた調子で江漢は氣焰を上げた。文晁は直ちに其の說に贊成して仕舞ふことはできなかつたが、そこにも確かに一箇の眞理が存在してゐることだけは認めないわけにいかなかつた。併し、畫の生命は何にあるかといふことを彼は考へた。それが果して江漢の言ふやうに、ありの儘に物の象を寫すことにのみあるものだらうか。彼にはさうは思へなかつた。自己の創意になる畫圖の中にも、人間が天然の山水を見て感じるやうな幽遠な精神が漂つてゐる。むしろそれが畫の生命ではないかと考へた。

二人は床へ這入つてからも、まだ繪畫の議論をたゝかはしてゐた。

翌日二人は今津を出て、ほうし山を越え、藝州へはひつた。それから尾の道へ出て船に乘つた。船は

九ッ頃出帆した。尾の道から廣島へ行く迄の海上は、小島大島が次ぎ〳〵に現はれ、島には松が生えてゐて、何とも云へない眺めだつた。文晁も江漢も畫帖を出して寫生をした。島の山の腹に處々穴があつた。「何んの穴か」と船頭に尋ねて見ると、「盜人が棲んでゐる穴だ」と船頭は答へた。風が出たので船は宇島といふ處へ掛つた。

十七日の朝早く廣島へ着いた。船はねこや橋の下迄行つた。其處で船を下りた。二人は城下を見物して歩いた。何處へ行つても繁華で綺麗な町だつた。それからいの口から再び船に乘つて宮島へ渡つた。ちやうど日暮時分に嚴島へ着いた。二人は先づ明神へ參拜した。文晁は紙合羽を着てゐたので鹿が側へ寄つて來てそれを食はうとした。

其の夜は折よく廻廊燈明があつた。その眺めは誠に日本無双であつた。

「何んといふ絶景だらう」

さう言ひ合つて、文晁も江漢も全く感激してしまつた。其の夜は宮島の伊勢屋久兵衛といふ旅籠屋へ泊つた。

翌十八日は朝から雨が降つてゐた。江漢は宮島の風景を寫すと云つて後へ殘ることになつた。

「それでは又江戸でお目に掛りませう」

文晁が發つ時、江漢は宿の傘をさして船の乘場迄送つて來て別れ際にさう言つた。文晁は船の上から島の方を見た。秋雨が降つてゐて、鹿が一疋浪打際で遊んでゐた。

其の日から文晁は又もや獨り旅を續けた。そして天明八年九月二十八日の暮れ方に長崎へ到着した。

世に出るまで

文晁は、寶曆十三年に下谷二長町で生れた。父は、谷文十郎といふ田安家の士だつた。文十郎は麓谷と號し、漢學の素養が深く、詩文を善くし、山本北山などと親交があつて、當時多少知られた詩人だつた。文晁は通稱文五郎と云つた。彼は幼少の時から繪畫に天禀の才を有つてゐたので、父の麓谷は近邊に住んでゐた加藤文麗の許へ悴を入門させて繪を習はせた。文麗は狩野派の畫家だが、生れは大洲加藤家の末子で、畫工とは云へ元來大名藝で繪は餘り上手ではなかつた。文五郎は其の弟子になつて初めは文朝と名乘つたが、二十歳過ぎ頃から文晁と改めた。文晁は專心繪畫の修業に沒頭してゐたが、熱心な彼はいつ迄も師匠文麗の杓子定規に甘んじてはゐられなかつたので、世間の評判を聞いたり、自分が見て信ずることの出來る畫家の所へは、何處でも構はず出掛けて行つて、いろ〳〵の畫論を聞き、また門人同樣になつて指導をも受けた。

鈴木芙蓉

鈴木芙蓉に就いて山水を學ぶやうになつてから彼の技倆はメキ〳〵上達した。芙蓉は信濃の人で、江戸に住み、阿波侯に事へた。山水人物に長じ、當時名聲が高かつた。門人もなか〳〵多かつた。會日には門人がめい〳〵習作を持つて來て師匠に直して貰ふのが例になつてゐたが、大抵の門人が一枚の繪を畫いて持つて來るのが漸らである。處が文晁はいつでも三枚も五枚も一度に畫いて持つて行くので、師の芙蓉も彼の勉强振りには常に驚いてゐた。

彼は毎朝未明に起きて仕事を始めた。それでも時によると寢過すことがあつた。すると彼の家の附近へ能樂の笛を吹く人が越して來たが、其の人は越して來た翌朝から必ず未明に起きて笛を吹き澄ますのだつた。一日でもそれを懈るといふことはなかつた。文晁は其の人の熱心さに感心して、それから自分も必ず笛の音の聞えぬうちに床を出て勉强した。

櫻井雪館

其の頃櫻井雪館といふ雪舟派の畫家があつた。元來水戸の人だが、江戸へ出て、汎く雪舟の圖跡及び古名畫を蒐めて臨模して、粉本が筐笥に充つるに至つた。つひに一家を成して、名聲都下に噴〳〵として喧傳された。其の門下からは月僊や恢應の如き名手を出した。

月僊　恢應

雪館は餘程變り者だつた。大家になつた後、江戸橋際にお堂のやうなものを建てゝ、そこで繪畫に關する講釋をした。天氣さへよければ毎日自宅から出掛けて來た。假令自分の門人でなくとも、誰でも來て討論したいと思ふ者は討論するがよい、また揮毫をするならば批評もして遣らうといふ風であつた。

櫻井秋山

彼は一段高い處に居を構へ、紫の道服を着け、袴のやうな腰衣を穿いて、講釋をするのであつた。雪館に一人の娘があつた。其の娘を秋山と云つた。秋山は名代の醜婦だつたけれども、父に學んで畫を能くし、山水人物に長じ、殊に大作を得意として筆力遒勁、男子をしのぐ氣概があつた。秋山も常にかいどり姿で講堂へ現はれた。氣位の高い女だつたので、或る時も集會の席で、

「日本中にわたしの夫にするやうな男はありませんよ」と秋山は言つた。

すると誰か後の方で、

「心配するな、お前のやうなお多福を貰ふ男は日本には居ないから」

と言つたのでみんなどつと笑つた。流石の秋山も二の句がつげず眞紅になつた。彼女は學問もあつたので、父の畫談を筆記して出版したりした。雪館の門人は一時江戸中で二百人近くもあつた。

文晁も雪館の處へ、其の說を聽きに行つた。其の時半折に竹を畫いて持つて行つて、批評を乞ふと、雪館はそれを壁に掛けて熟々視て、

「どうも寔に感服です。どうしても梅道人とか東坡とか、其の邊の法を習つて畫かれたものと見える。まだ貴君はお歳も若いことだから、撓まず修業をしたら立派な畫家になれませう」

と言つて大變喪めた。

すると側に居た娘の秋山が、

「此處へおいでになる方であなたのやうに喪められた方は御座いませぬ。定にどうも御名譽なことで御座います」

と言つて丁寧に挨拶をした。

文晁はあらゆる流派の畫を研究した。土佐繪は狩野光定に就いて、古法の傳を受けた。また英一蝶をも模した。

長崎では、清人張秋谷の門に入つて、主として、蘭竹花鳥を學んだのだつた。

文晁は、あらゆる流派の特徴を拾つてそれを自己の物としなければやまなかつた。彼は、宋元明の諸家を參酌し、南北を混じ、和漢を統一して、別に一大旗幟を建てることを以て抱負としてゐた。

彼はすでに十分一家を成すに足る技倆を持つてゐたが、併し世間はまだそれを認めなかつた。當時畫壇の覇權は依然として狩野家の掌中にあつて、武家正式の用には其の派以外の者は斥けられて顧みられなかつた。併し、積年の因習でこり固まつてゐる其の派からは、眞の名手は現はれさうもなかつた。京都では、四條派の吳春に次いで岸駒が賣り出してゐた。文人畫も到る處に擡頭しつゝあつた。さうして世人の嗜好は著しく繪畫に傾いて來た。此の群雄割據の時勢に於て、畫壇全部を統一するやうな巨匠の出現を世人は久しく渴望してゐた。文晁は、自分こそ其の覇者たるべく大志に燃えてゐるのだつた。

文晁に一人の知己があつた。それは松平定信であつた。二人の間には、父祖の代から續いてゐる深い緣故があつた。

文晁の祖父は、谷傳右衞門といつて、江州大津の代官手代といふ役を勤めてゐた。傳右衞門はさういふ低い役柄ではあつたが學問があつて、殊に民政の事に通じてゐたので、畿內地方の代官に任命されて行く人は先づ大津へ行つて傳右衞門の處を訪問して、其の說を聽いて參考にするといふ有樣だつた。彼には「田園類說」「聽訟須知」「地方一樣記」等の著述があつた。それらの著書は、當時郡代屋敷でも悉く謄寫して備へて置くほど有益の書として知られてゐた。

其の頃、三卿の一家田安家の財政が逼迫して非常に困難に陷つてゐた。幕府では評議の結果、谷傳右衞門を田安家に附けて財政の整理をさせることになつた。傳右衞門は俸米百俵を貰つて田安家の人となつた。彼は就任匆々內政を整理し、また領地を巡回して年貢其の他種々の弊習を改め、耕作の實績を擧げさせる工夫をした。其の經營宜しきを得て、田安家の財政は年々回復し數年ならずして勝手方の富裕なること三卿のうち第一と云はれる程になつた。傳右衞門の悴が籠谷であつた。上野の麓下谷に住んで

ゐるといふところから麓谷と號したのだつた。麓谷は父とは正反對の性格で、全然詩人肌の人物で理財の道は頗る不得手だつたので、殆んど不勤も同樣で過ごした。

文晁は天明八年四月、父の跡目を相續して、部屋住みから勤めに出た。最初奥詰め見習ひを命ぜられて高五人扶持を貰つた。さういふ關係で文晁は田安家とは主從の間柄である。殊に定信は文晁の畫才を愛した。定信は、奥州白河松平定邦の養子となつて其の封を繼いだので、田安家では文晁を附き人として松平家へ遣つた。天明六年將軍家治が薨じて、家齊が一橋家から入つて大統を繼いだ。翌七年六月、松平定信は老中に任ぜられた。定信は年三十歳だつた。彼は老中上座として幼少の將軍を補佐し、宛として副將軍の觀があつた。

定信は、田沼の弊政を改革して、奢侈を禁じ、文弱を戒め、政令の振肅に專ら力を盡したのであつたけれど、彼は元來好學の人で、殊に考古趣味を有してゐたので、文藝美術の如きはむしろ奬勵した。彼は頗る博學多聞で、書道に達し、畫は十二三歳の頃から狩野を學び、後に沈南蘋の筆法をも學んで一種の風格を有つてゐた。文學美術の徒で定信の庇護を受けた者は少なくなかつた。柴野栗山を拔擢して幕府の儒官となしたのも彼であつた。賴山陽が、拮据二十餘年、心血を灑いで成つた日本外史を刊行することが出來たのも、定信の後援があつたからであつた。

定信は、海防の事について、房總地方を巡檢する時、文晁を從へて行つて海岸の見取圖を描かせた。それが『公餘探勝』となつて現はれた。築地に下屋敷があつた。其處には汐入りの池があつて、庭園の風致が頗るよかつた。定信はみづから記文を書いて、庭の景色を文晁に寫させた。それから奥州白河へ下る時なども文晁を伴れて行つて、名所々々を寫させたりした。

併し、美術に對する定信の一番大きな功績は、江州石山寺の什物になつてゐる『石山寺緣起』といふ繪卷が一卷缺けてゐたのを、文晁に命じて補缺させた事と、『集古十種』の編纂をさせた事とであつた。『石山寺緣起』は全部で七卷にわかれ、隆光、光信、光持等の古土佐の名匠が數人で筆を執つたと傳へられてゐるが、其のうち一卷缺けてゐたのを元祿の頃飛鳥井雅章が詞書だけ書いて、畫は成らずにゐたものであつた。文晁は石山寺へ行つて逗留して畫いた。夏から籠つて畫いてゐたが秋になつてもまだ出來なかつた。定信は「追ひ〳〵寒くなるから」と言つて文晁の處へ夜具蒲團を拵らへて送つて遣つたりした。畫が完成すると定信が卷末へ跋文を書いた。其の繪卷は文晁の傑作の一つとなつた。古土佐の筆法を用ひて畫いたのだけれど、あくまでも文晁自家の特色を失はず、それで古代の名匠に伍して些かも遜色がなかつた。

集古十種は、定信の考古趣味の結晶とも云ふべきものだつた。それは天下の古器古畫の類を悉く網

羅してこれを模寫して一纒めにしたものである。全部で八十五冊になつた。定信は此の仕事を主として文晁に命じてやらせた。文晁の外に、白雲上人と巨野文遷とが、矢張り定信の命によつて其の蒐集に力を盡した。

白雲上人は、逸譽と號した。生地は詳かでないが、後に白河へ行つて松平家の菩提寺東林寺の住職となつた。彼は非常に樂翁公の信任を得て、屢々政治上の樞機にも與かつてゐた。畫は勿論餘技であるが、筆法が正確で、特に寫生に長けてゐた。

集古十種は寛政十二年に刊行されたのである。

寫山樓

定信は、或る時文晁に向つて、

「お前の名前を一度に江戸中に弘める工夫があるがどうだ」

と言つた。

「さういふ工夫がありますならば、是非共御傳授に預り度う存じます」

すると定信は笑ひながら其の方法を文晁に授けた。其の年の暮れに文晁は千本ほどの白扇を買ひ集めて、それへ得意の富士の圖を一筆書きにして、大きく文晁と落款を入れた。大晦日の夜半過ぎに、人を雇つて其の千本の扇を江戸の街々へ捨てさせた。明くれば元日の朝、年始の廻禮に出た人々は、門先きや往來の角々で新らしい扇を拾つた。開いて見ると美事な筆勢で富士が畫いてあつて、文晁といふ名がはひつてゐる。「元日早々富士山の扇を拾ふとは緣起がいゝ」と拾つた人々は大層喜んだ。それで文晁の名前は一度に江戸中へ弘まつた。――といふ話が傳はつてゐる。

遂に文晁は一代の大家となつた。下谷二長町に一大墨場を建てゝ住んだ。彼は好んで富士を描いて、寫山樓と號した。それは主君の松平定信から付けて貰つた號であつた。最も得意の畫題は人物で、山水花鳥がそれについだ。が、彼の靑綠山水の密畫に至つては殆んど獨特の技で、和漢古今を通じて追隨するものが見出されないのであつた。彼は探幽以來の大畫宗となつた。

文晁も若い頃は貧乏であつた。酒が好きだが買へないので水に些か酒を和して飲んだりした。或る時は年始の發會をするのに費用がないので伯母の處から借金をして來て漸う間に合はせたりしたこともあつた位だが、大名を成して後は畫の依賴者が門前に市をなす有樣なので、收入も莫大に上つた。年收千兩以上と稱された。彼は豪奢な生活をした。其の生活は一萬石の大名に匹敵すると云はれた。二長町の其の家はもとは小さかつたのを改築して、長屋門總二階の立派な家に建て直した。二階の畫室は二十疊

敷だつた。詩會はいつも下座敷で開いた。門人は江戸中で三百人に餘る程あつた。二七の日が面會日になつてゐて、其の日は澤山の來客に一人々々酒食の饗應をするのが例だつた。畫の依頼に來る者は、王侯貴人から、田夫野人、俳優、妓樓の主人と常に千差萬別で殆んど應接に遑が無かつた。平常家に料理人が置いてあつて、其の臺所はちやうど料理屋のやうであつた。魚は直接魚河岸から運ばせた。酒は文蝶と銘をうつて、自分の口に合ふやうな酒を醸造させた。吉原の藝者が年中出入りをしてゐて、絃歌の聲が戸外まで聞えた。門前には屋臺店が出て、文晁の家へ來る客の供の者などを相手にしてそれで渡世になつてゐた。文晁は出仕から歸つて來ると直ちに客に接して、倦まず屈せず、酒を被つては虹のやうな氣を吐いた。興がのつて來ると彼は墨をすらせて、筆にまかせて揮毫した。

文晁の家から一軒置いて隣りに中島一鳳といふ畫家が住んでゐた。中島も元は武家の出で、伊勢の小藤堂の家臣の次男だつた。相應の腕はあつたけれど、世間に知られる程の畫家ではなかつた。だから其の門前は常に雀羅を張つてゐた。直ぐ側なので、文晁の家の景氣のよいのが手に取るやうに知れた。一鳳の細君は、自分の家が何時でも寂しく暮らしも貧乏なのに引きかへて、文晁の家の豪勢な有樣を朝夕見てゐるにつけて女心にうらやましく思つた。

「ねえ貴郎、どうしてお隣りはあんなにお客があるんでせう。たまにお客が切れたかと思へば、先生が何處かのお邸へ呼ばれて外へお出掛けになるんです。歸つていらつしやればまた多勢のお客樣でせう。ほんたうに御盛んですわ。文晁先生はそんなに繪がお上手なんでせうか。それだのに貴郎、宅へは何時が日だつて繪を頼みに來る人などはないでせう。そのうちに貴郎は田舍へお出掛けになるし、さうすると門を出這入りする者は妾だけなんぢやありませんか。ほんとに心細いつてありませんわ。おなじ繪かきでもかうまで違ふものかと思ふと情なくなりますわ」

と、或る時細君は夫に向つて愚痴を言つた。女房にかう言はれると、一鳳も少し癪に障つた。

「馬鹿なことを云ふな。俺だつて文晁だつて腕前はさう違やしない。あれは只一時のから人氣なんだ。生きてるうちにあんなに莫迦に盛る者に限つて、死んで見ろ、火が消えたやうになるから。あゝいふ有象無象の客共といふものは、其の實繪を賞玩するのでも何でもない、直きに忘れてしまふものだ。すべて此の繪といふものは、死んで見なければ本當の價値は分るものぢやない。生きてるうちにどんなに盛んだつて、死後に廢るやうでは何にもならぬ。人間は死んだ後が大切だ。俺の繪などは死後に益ゝ高くなる。お前も繪かきの女房なら、それ位の事は心得て置け」

すると細君は一寸考へてゐたが、

「では、貴郎は何時お亡なりになりますの」と言つた。

或る日文晁の處へ一人の田舍者らしい人物がやつて來て、「是非先生の繪を一枚頂き度い」と言つた。紹介も何も無いので、門人は執り次ぐことは執り次いだが、好い加減なあしらひをして置いた。文晁も面倒臭いので、そこらに放つてあつた鷄を畫いた半折を渡してやつた。すると客は喜んで、繪を貰つて、目錄包をさし置いて歸つて行つた。後で開封して見ると金五兩あつた。五兩といふ金は當時畫料としては莫大なものであつた。文晁も驚いて後から人を遣つて尋ねて見ると、それは伊勢の四日市の富豪で、大傳馬町へ出店を持つてゐる紙問屋の主であることが判明つた。そこで文晁は改めて絹本へ密畫を畫いて其の人に贈つた。それはまだよかつたけれども、其の後のこと、或る時矢張り田舍者の客が玄關へやつて來た。襤褸着物を纏つて草鞋ばきで、平身低頭して、

「私には七十になる老父が御座いますが、老父が申しますには、老後の思ひ出に是非共文晁先生に畫を一枚描いて頂いて、神佛の御符にも代へ度いとかう申しまする。何卒、先生のお筆なれば、どんな紙切れでも墨さへ付いてゐれば宜しう御座いますから、是非共頂けまするやう、近頃御面倒の事乍ら、何分宜しくお取り次ぎのほどをお願ひ仕ります」

と式臺に手を突いて言ふのだつた。門人は、圖々しい田舍者が繪を强請りにやつて來やがつたと、さう考へた。

「折角だが、今日は御來客で、先生は御多忙だから、お取り次ぎをすることはなりません」

「左樣でも御座いませうが、そこを何卒お取り次ぎを——」

「いや成りません。全體うちの先生は、紹介が無くては揮毫をなさらぬことになつてゐるのです」

「それも承はつて居りますが、生憎知り會ひに紹介して貰ふやうな人も御座いませんので、ぶしつけにお願ひに上りましたのです。是非ともお取り次ぎを——」

「成らんと云つたら成りません。早くお歸りなさい」

それでも田舍者はなか〳〵歸らなかつた。やかましく言ひあらそふ聲が、畫室に居る文晁の耳に這入つた。

「これ〳〵、玄關で何を騷いでゐるのだ」

一人の門人がやつて來てかく〳〵の次第だと言つた。

「うむ、それほどに欲しがるなら何か與れて遣れよ。これではどうだ」

と文晁は、側にあつた左り馬の下圖を取り出して言つた。

「結構で御座います。ではこれをやつて追ひ返すことに致しませう」

門人は下へ降りて來て、

「只今先生に申し上げた處が、お前さんの熱心に免じて此の畫を下さるといふことです。有難く心得て戴いてお歸んなさい」

田舍者は其の畫を展げて見て、

「是れは美事な御作で御座ります。突然お願ひに上つて斯樣な畫を頂戴致しまして何んとも御禮の申し上げやうも御座いません」と幾度びも押し戴いて「とてもの序でに落款をお願ひ致し度う御座ります。ついては、これは甚だ輕少で失禮では御座いますが、御禮のしるしに差し上げます」

と言つて、門人の見て居る前で、小判十兩を取り出して紙に包んで差し出した。門人は吃驚して早速其の由を文晁に傳へた。文晁も驚いて之れは必ず身分ある人であらうと思つたので、自身で玄關へ出て來た。

「これは〳〵何れのお方か存じませんが、只今は門人共が失禮を致しました。其のやうに多額の畫料を申し受けるほどなれば、また畫の畫き樣もあります。只今直ぐと申されても困るが、今晩中には必ず畫いて進上致しますから、今夜は一晩私の家へ御逗留になつては如何です」

すると其の田舍者は屹と立ち上つて、

「これは近頃奇怪な事を承はるものです。謝儀の爲めに畫いて呉れるやうな繪なれば、神佛の護符は愚か、鼻紙にもならぬから、その樣なものは欲しう御座らん。これは甚だ失禮致した」

と言つて、落款も無い左り馬の下圖だけを持つてサツサと立ち歸つてしまつた。文晁は呆氣にとられてしまつた。

それから五年後のことだつた。或る時文晁は仙臺侯の邸へ招かれて行つたが、其の日のお客は名だゝる大名ばかりで、文晁は其の前で仙臺侯の需めに依つて得意の左り馬の圖を揮毫した。すると、其の繪を描き了つた時、

「成る程これは下圖よりもよい。十兩の値打は充分ある」

と言つた人があつた。文晁は驚いて其の人の顏を見ると、それは先年自分の家の玄關へ來た田舍者であつた。剛氣な文晁も其の時は少し色を失つた。

さういふ事が幾度びかあつた。

文晁は、謝儀の厚薄に依つて畫を上下すると言つて一部の人から批難された。それに對して、文晁は「人が自分の畫を信ずるのに厚薄がある以上は、酬ゆる處も同じ樣にはいかないのだ」と言つてゐた。

文晁の名聲は隆々として昇つて狩野家も爲めに壓倒されてしまつた。江戸市中の酒屋は、「文蝶」を置かなければ恥のやうに考へて、何處へ行つても其の酒を賣つてゐるやうになつた。處が其の頃のこと、

ある通客が吉原の青樓へ行つて遊ぶと、床の間に鶴の畫幅が掛つてゐた。

「實に此の文晁はよく出來てゐる。」と客は言つた。

すると側に居た藝者が笑つて、

「旦那、これは文鳥ではありません。鶴ですよ」

と言つたので、さすがの通客も索然としてしまつた。其の後客は他の樓へ遊びに行つて、酒宴なかばに偶々此の話しが出た。

「あんな藝者は吉原の恥だ。いまどき文晁を知らないなんて馬鹿にも程がある」

と言つて客は罵倒した。すると其の席に一人の老妓が居たが、其の話しを聞き、得々として、かう言つた。

「まあ何といふ馬鹿な妓でせう。文鳥は小鳥ぢやありませんか。大體鶴とは羽色だつて違つてるのに」

通客は茫然として言葉が出なかつた。

白拍子の舞

或る時文晁の處へ、年齢四十ばかりの比丘尼が一人、黒羽二重の小袖の下へ白無垢を着て、僕を召しつれて訪れて來て、文晁に繪を畫いて貰ひ度いと言つた。文晁は丁度外出しようとしてゐた處であつたし、殊に一面識もないのに何處の者とも名乘らずに只賴むのだから、面倒臭く思つて、

「畫の御依賴でしたら、悴の文一にお賴み下さい。當節は大抵の事は悴に委せてありますから」

と言つてことわつた。すると尼は、

「わたくしは先生の雷名を慕つてかうして態々參りましたのです。他の繪なれば欲しうございません。何故さうまで情なくなさるので御座いますか」

と言つて頻りに望んでやまないので、

「では一體どういふ繪をお望みなのですか」と文晁は尋ねた。

「白拍子の舞を畫いて戴き度う存じます」と尼は答へた。

「はゝ成る程、では靜御前が鎌倉八幡の廻廊で舞ふ處でも畫くのですな」

「いゝえ左樣では御座いません。わたくしは、むかしから此の舞が大層好きで自分も些か舞つたことが御座いますから、わたくしの舞つてゐる處を描いて戴き度いので御座います」

と尼は眞面目な顏をして言ふ。

「はゝア、これは氣ちがひだな」

と文晁は氣が付いた。見れば頭をまるめて齡こそ取つてゐるけれど、むかしが偲ばれるやうな樣樣である。けれどもいま時白拍子の舞をまふ者などがあるわけはない。

門人達や家内の者も、餘り變つた客なので隙き見をしてゐたけれど、此の主人との應答を聞いて矢張り狂人に違ひないと思つた。でみんな面白がつて益ゝ覗きに行つた。それでも尼はちつとも臆した風はなく、泰然としてゐた。其の樣子が猶更をかしいので、愈ゝ以て狂人ときめてしまつた。

文晁はからかひ半分、

「あなたが舞をおやりになると言はれても、其の舞ふ處を見なければ繪に描くことは出來ません。然らば爰で一曲お舞ひになりますか」

と言ふと、尼は、

「では、舞ふことに致しませう。が、久しくやりませぬゆゑ、どうでお目に掛ける程のことは出來ませぬが、舞はねば望みが叶はず――したが比丘尼の圓い頭でもをかしう御座いますから、手拭で包むことに致しませう。それから、扇を一本お貸し下さりませ」

と言つて直ぐ樣身仕度をして、頭を手拭で包み、扇を借りて、床の間の正面に居直つて、扇をば右の脇に置いた。新らしい扇を出してやつたが、扇の方は見もせず衣紋をかいつくろひ、身がためをするやら、其の仰山な樣子を見て人々は袖を口に當てゝ笑ひを堪へてゐた。やがて尼は一曲の唄をうたひ出した。處が其の聲は何んともいはれぬ妙音だつたので、人々は意外に感じて驚いた。「これあ氣違ひぢやあないかもしれん」と、一同は耳をそば立て、固唾を呑んで見物してゐた。

程なく尼は扇を取つてすつくと立ち、颯と開いた。扇は十分にひらけた。ことに颯と鳴つた其の扇の音は、普通の人が、いかに上手に開いたところで、到底及ばないものであつた。一同は感心してしまつた。さて立上つて、唄ひながら舞ひ始めた。扇の手と云ひ聲といひ、節といひ舞といひ、素晴らしく美事だつた。しばらくして舞ひ終つた。文晁はほと〳〵感服してしまつた。彼は卽座に筆を取つて尼の顏を若くしたゞけの白拍子の舞の圖を描いて與へた。すると尼は非常に喜んで、白銀數枚を謝禮に置いて住所や名前はいくら訊いても明かさず、厚く禮を述べて歸つて仕舞つた。

「一體どういふ人だらう」

と後で人々は噂をし合つたが、それ、九州四國邊には近く迄白拍子が殘つてゐたといふから、多分西國の諸侯の妾などの齡を取つた人であらうといふ人もあつた。いづれにしても、白拍子の舞の樣子を初めて見たと言つて人々は喜んだ。

門人の稽古日は五の日と十の日であつた。其の日になると、文晁は座敷の中央に坐して畫を作つた。

いつでも百人二百人の門人が師匠の周りを取り圍んで、首を伸ばしてそれを熟視してゐた。其の有樣は實に壯觀と云ふより外はなかつた。文晁はさうして弟子の前で畫を作つて見せる時は、必ず古人の粉本を見て描いた。彼は非常に澤山の粉本を藏してゐた。其の粉本は、南部行李の中に入れて一々番號を附け、畫室の棚の上に列べてあつた。其の中から取り出して、一輪の花、一羽の鳥を寫すにも必ず粉本を眺めてから筆を下した。或る人がそれについて尋ねた。

「先生ほどになられたら、既に胸中に幾多の粉本があること、思ひます。それだのに一々古人の粉本に依られるのはどういふわけですか」

文晁は答へた。

「いかにも私は粉本はなくても畫を作ることは出來る。然しながら、今の若い者は、やゝともすると師とすべきものを離れ、自分の氣持にまかせて勝手に描かうとする風がある。此の師とすべきものを離れて、自己の氣持にまかせて描く者は、つひに師に及ぶことは出來ない。師とすべき物は飽くまでもこれを視て、そしてよく心に入れて筆を把る者は、遂に師に勝ることがある。私が畫を作る時一々粉本を出して見るのは、門人等に此の理を示さうと思ふからです。私としては、必ずしも粉本が必要なわけではない。私の畫の方が粉本よりもよく出來ることも度び〳〵ある」

或る時彼は大小二個の的を畫いて、それを門人等に見せながらかう言つて敎へた。

「大小の的がある場合には、先づ大きな的を射て、後に小さな的を射るのが弓術家の秘訣である。畫を學ぶ者も同じ理窟である。先づ理在生きて居る人を模し、後に古人を模し、漸く進んで、漢人を學ぶのである。私が今日の力を得たのも其の順序に隨つて研究したからだ。若しこれを逆に始めたならば、ねらひも定まらぬうちに手が亂れてしまふ。滿足な畫は畫ける道理はない」

稽古日には雜鬧が劇しいので、門人達は上等の履き物を履いて來ると忽ち人に替へられてしまふので雪駄などは懷ろへ入れて座敷へ上つた。座敷の中も混雜してゐるので、中には自分の描いた畫を持つて來て、隅の方で、勝手に師匠の印を盜んで捺してゐる者などもあつた。文晁はさういふ事には一向無頓着だつた。もつとひどい奴は自作の畫を持つて來て圖々しく文晁に落款を入れて貰ひ度いと言ふ。

「諸」

と言つて文晁は碌に其の繪も見ずに文晁と署名して遣るのである。時にはさういふ畫を書畫屋が持つて來て、「これは先生の御自身の筆ですかどうです」と尋ねたりすることがあつた。

すると文晁は畫を展げて見て、

「私が畫いたかどうかはつきりは記憶しないが、文晁と落款がしてあるところを見ると、多分私が畫い

たのでせう」と答へた。

自分の畫ばかりではなく、古畫の鑑定を乞はれた場合でも矢張りさうだつた。探幽と落款があれば、「これは探幽でせう」と答へるし、一蝶としてあれば「これは一蝶でせう」と言つた。そこで畫の善し惡しを尋ねると「先づ善い方でせう」と答へた。

或る人がそれに就いて文晁の眞意をたゞすと、

「畫の値打ちは落款にあるわけではない。誰の描いた畫でも、善く描けてゐれば値打があるし、どんな名手の名がはひつてゐようと、不出來な繪は値打がない。畫だけの値打が後世に殘るのだから、たとひ千萬の僞せ文晁が出來た處で、本物の私の價値が下るわけはない。況んや、其の中に傑れた作があつて文晁として賞玩された處で一向差しつかへはない」と言つた。

文晁の處へは到頭鑑定を乞ふものが來なくなつた。

或る時、淺草藏前の札差某が文晁を招待して畫をかいて貰ひたいと云つた。文晁は承諾して當時門生中の錚々たる喜多武清、佐竹永海の二人を從へ、又、高木と云ふ箍屋の子供が遊びに來てゐたのを墨を研する役に連れて、札差の家へ行つた。

やがて其の家へ着くと番頭が迎へて座敷へ通し、絹地の小障子に、金五兩を添へて文晁の前へ置いて「どうかこれにお畫きを願ひたい」と言つた。文晁は大いに不快であつた。苟くも田安家の士たる我を招待しながら主自らは出でもせず家僕をして應對せしめるとは甚だ無禮であると心中憤りを發したが、速座に其の五兩で喜多佐竹の兩名を走らせて金泥を購ひ來るやうに命じ、一方高木の小童に大きな硯へ水漫々と湛へて墨を研らせた。やがて墨が研れた頃ほひ喜多佐竹が還つて來て五兩の金泥を師匠に渡した。其の時分五兩の金泥と云へば下手な畫工は一二年も使用する程の分量があるから、札差の家の者は「一體こんなに澤山の金泥を何に使ふのだらう」と不思議に思つてゐると、文晁はそれを手に取る遲しと一度に硯の中へ投げ込んで仕舞つたから座中一同駭いた。文晁は心靜かに金泥を濃い墨に研り混ぜ、すつかり混和したところで、例の剛健無類の腕力を振つて一氣に墨竹を畫いたのであつた。それは平素より幾層の傑作であつた。

文晁は畫き了つて歸らうとすると、主が驚いて出て來て引き留めて饗應しようとしたが、文晁は袂を拂つて立ち去つた。此の繪は幕府瓦解の頃迄其の家に傳はつてゐた。

白河藩に、常磐彥右衞門といふ人があつて、年來文晁と親交があつた。文晁が曾て富士越えの龍を描いて彥右衞門に贈つたが、筆力雄健、躍然生けるが如く眞に古今の絶筆であつた。彥右衞門は珍愛措かなかつた。彥右衞門が歿して其の子の彥之助が相續した。彥之助は一日文晁を訪ねて、

「もう一幅富士の繪を欲しいから、父に畫いて下すつたやうな富士の繪を私の爲めに揮毫して戴きたい」と頼んだ。

「宜ろしい、承知した」と文晁は答へた。

それから久しく經つたけれど、約束の畫が出來なかつた。翌年の元日彦之助は再び文晁を訪ねて、是非早く畫いて貰ひ度いと言つて頼んだ。元日のことだから年始の客が多數詰め掛けてゐて、酒宴の眞最中だつた。

「では、今直ぐ畫いて上げよう」

文晁は直ぐ樣門人に墨をすらせて、絹を展べて八面玲瓏の富士を畫いた。すると彦之助は何だか餘り悅ばない樣子で、

「先生、此の富士も結構ですが、私は成る可くなら、父に畫いて下すつたやうなあゝいふ壯絶な富士の圖を畫いて戴き度いのです」

すると文晁は俄かに氣色を變へて、刷毛を把つて其の繪を塗り潰してしまはうとしたので、彦之助も駭いて押し止めた。

「そんな心掛けでは駄目だぞ。お前と彦右衛門殿とは境遇が異つてゐる。お前の父は創業の人だから、

龍の富士を越えるやうな氣勢がなくてはいけなかつた。が、お前は守成の人だ。八面玲瓏の富士のやうな心を持たなければいけないから私は此の富士を畫いたのだ」

「恐れ入りました。よく解りました」

「解ればそれでいゝ」

文晁は愼獨の二字を其の畫幅に書いて與へた。

渡邊華山の甥の某なる者が文晁の揮毫を請はんと欲して、華山に伴はれて下谷の寫山樓に赴き、先づ謝金として金三兩を差出すと、文晁は直ちに門生を呼んで其の謝金の內から金三分を取出して「これで酒肴を調へよ」と命じ次に二分を取出して「これは菓子を買ふべし」と云つて塾生中に與へ、やがて取り揃へたる酒肴を饗し自己も滿醉した頃に徐ろに依頼された絹を展べ腕に任せて縱橫の揮毫を始めた。すると偶々其の時下男が大きな蘿蔔を其處へ持つて來ると、暫く筆を擱いてこれを手に取上げて甚だこれを賞美してゐたが、遂に其の蘿蔔を寫して其の繪は下男に與へ、さて其の後で初めの畫を畫き終つたといふのである。

或る時文晁が某侯に招かれて行つて揮毫した。すると侯が言ふのに、

「富士越えの龍は珍らしくない。先生富士越えの虎を描いて貰ひたい」

文晁は畏まつて、童子が虎の字を書いた凧を揚げてゐる圖を畫いて、中間へ富岳を遠く添へて描いた。

其の時代

文化九年四月、松平定信は病に託して隱居した。致仕の後は樂翁と號して專ら風月を友として過ごした。定信が隱居した後は、文晁は從前通り田安家へ戻されて、奥の番頭といふ役柄で、百五十俵の扶持を貰つてゐた。

定信の隱退後は將軍家齊が親政を行つた。さうして所謂文化文政の爛熟時代が來た。文化文政は江戸の最も華やかな時代であつた。將軍家齊は太政大臣に任官し、世子家慶を從一位內大臣に陞せ、位人臣を極めて奢侈逸樂を旨としたので、政道は頓みに弛緩して、有司は互に權力を爭ひ、賄賂公行して人心は頗る頽廢して來た。併し乍ら、江戸の繁昌は空前であつた。將軍家齊には五十一人の子があつた。それらの子女を緣付ける支度だけでも、幕府の用達町人は目の廻る程忙がしかつた。將軍家と緣組をする諸侯は、無上の光榮に醉ひ互ひに華美驕奢を競ふので、それが爲めに江戸の市中に散ずる黃金は莫大なものだつた。上下を通じて所謂錢廻りがよく、江戸の市民は只々泰平を謳歌するに餘念はなかつた。

何れの國に於ても、文藝美術の類は、さうした爛熟時代に遇つて始めて百花撩爛の態を現出するのである。化政時代に至つて、我が國の美術翫賞の嗜好は社會一般に廣く行きわたつて來た。今迄は狩野、住吉の外に繪畫の趣味を求めようとはしなかつた上流社會の人々が、文人畫や町繪の範圍迄嗜好の手を擴めて來ると共に、一方では浮世繪ばかりを喜んでゐた中流以下の趣味が向上して、上下が融通し、好尙が進歩して、益ゝ美術の發展を促がすやうになつた。諸侯の家では、客のある時は必ず高名の畫家を聘して席上揮毫を命ずるのが當時の習慣であつた。さういふ風潮であつたから、大名の中からも畫畫を善くする人が現はれた。

伊勢長島の領主增山雪齋、備後福山の領主阿部棕軒の如きは、いづれも玄人の域に達してゐた。就中增山雪齋は大名畫家中の第一人者で、風流拔群の人だつた。雪齋は名は正賢、從五位下河內守に任じ、文學に長じ、書畫ともに巧みで、好んで沈南蘋の風を描いた。其の邸には常に文雅風流の士が集つた。雪齋は長島に文裡書院といふ學校を建て、十時梅厓を其の學長とした。梅厓と雪齋との間には恁んな話がある。

增山雪齋
阿部棕軒
十時梅厓

或る年、雪齋が參觀交代で東海道を下る時、家老の某の駕をかついでゐた雲助が餘程變り者で、途家老に向つて、

「あなたの殿樣は大層文學がお好きだといふことを承はつて居りますが、どうか私に拜謁を許して戴

けませんでせうか」

と言つて頻りに賴んだ。

家老も「變な男だ」と思つたので、

「よし〳〵、本陣へ御到着になつたらさう申し上げて見よう」と答へた。

旅館へ着いてから家老は主君の御前へ出た序でに笑ひ乍ら其の話をすると、雪齋も興味をもつて「どんな奴だか伴れて來て見ろ」と命じた。家老は早速彼の雲助を御前へ召し連れて來た。そこで雪齋が種〻種問ひ尋ねて見ると、中々學問があつて、見識もなみ〳〵ではなかつた。雪齋は其の儘此の男を江戸の邸へ連れて來て、祿を與へて召し抱へた。

其の雲助が十時梅厓であつた。梅厓は大阪の人で、經義を伊藤東所に受け、書法を趙陶齋に學び、また皆川淇園、池大雅等と交はつて文人畫を描き、篆刻も工みだつた。併し生れつき磊落粗狂の性質だつたので、放蕩に身を持ち崩して祇園の妓樓の幇間となり、更に落魄して、東海道の雲助の仲間に伍してゐたのであつた。

大名ばかりでなく、町人社會でも、俳優、妓樓の主までが風流文事を口にするやうになつた。文人畫客は極度に社會から持て囃された。かゝる時代は從つて各方面の大家を輩出せしめた。漢學者に細田鵬齋、大窪詩佛、菊池五山、書家に市河米庵、國學者に加藤千蔭、村田春海、清水濱臣、狂歌に四方赤良、手柄岡持、宿屋飯盛、戲作に山東京傳、十返舍一九、式亭三馬、瀧澤馬琴等の大家が續出した。彼等は皆一般市民とひとしく、泰平に爛醉し、酒色に耽溺して、放縱の生活を事としてゐた。其の時にあたつて、江戸の畫壇の牛耳を執り、一代の名手として風靡したのが文晁であつた。

當時文晁に次ぐ者は、酒井抱一であつた。

抱一は播州姫路城主酒井忠以の弟で小石川の邸に生れた。彼は性甚だ穎敏で、武藝に達し、併せて文事に通じてゐた。然し、豪放の資は武門の禮式の煩らはしさに堪へなかつたので、年三十七の時病と稱して髮を剃り、西本願寺文如上人の弟子となつた。そして一時京都へ上つて文如の準連枝の待遇を受け、法名を等覺院と云つて、權大僧都となつた。しかし、彼が僧侶となつたのも、もと〳〵氣隨氣儘の生活がしたかつたからであつた。抱一は間もなく江戸へ來て、根岸の里に住んで、靜寂なる草廬を營み、雨華庵と稱した。雨華庵は、以前から其處にあつたさゝやかな農家を買ひ取つたもので、其の儘改築もせず、僅かに茶室を一つ建て增したばかりだつた。彼は僧にあらず、俗にあらず、畫事風流に身を委ねて、遊興三昧の日を送つた。そして吉原の花魁を身請けして、妾として雨華庵に同棲してゐたが、花魁のほかに新造や禿まで一緒につれて來て住まはせ、廓に居る時と同じやうに廓言葉を使はせてゐた。

狩野高信
歌川豐春
宋紫石

抱一は、最初畫を狩野高信に學び、後に歌川豐春に就いて浮世繪を研究し、更に宋紫石を師として沈南蘋の法を習得した。一頃彼は文晁にも師事した。すると文晁が、

「私は、光琳の畫こそ實に崇仰すべきものだと思ふのですが、悲しいかな今其の遺法を繼ぐ者がない。私も其の復興を思はないではありませんが、尾形流の畫を描かうとするには、繪具を選んで、價を問はない人でなければ出來ぬことなので、手が出ません。あなたのやうに富貴で其の上お閑のある方がなされば、一番適任なのですが」

と言つたので、抱一は悟る處あつてそれから尾形流を學び始めた。そして遂に光琳以後の作家となつた。抱一が上等の繪の具を使つたことは名高い話だが、或る時姫路藩の家老某が抱一を訪ねて、

「私は此の度びお上の御用で京都へ參りますが、何か御用があれば調へて參ります」と言ふと、

「では某といふ店で胡粉を二兩目ばかり買つて來て貰ひ度い」と抱一が言つた。

家老は、些少のものだから別段價も聞かずに行つて、さて其の店へ行つて買はうとすると「上人のお用ひになるのは特別の製品だから直ぐは出來ません」と言はれて、數日待たされ、漸く品物が出來たので代金を拂ふ段になると、二兩目の胡粉が三十兩といふ高價だつたので、驚いてしまつた。

抱一の畫は繪具に多額の金が掛る處へもつて來て、依賴する人が、金錢で謝禮するのは失禮だと考へて多くは物品で持つて來るので、雨華庵の生活はあまり餘裕が無かつた。其の頃深川冬木町の豪商冬木某といふ人は抱一の崇拜者で、毎度畫を依囑しては物品を贈つてゐたが、或る時八ツ橋の繪を屏風に揮毫を乞うて、それとなく謝儀をどうしたら宜からうかと尋ねると、上人は微笑し乍ら、

「庵の費用も年々嵩んで不足を告げることもあるから、報酬は遠慮無く金で贈られたい」と言つた。

冬木は重荷を卸したやうな氣持がして、

「それは誠に心易い事で御座います。が、此の度の屏風は金地着色で普通の幅類とも違ひますので、差し上げる金額を何程と定めて宜しう御座いますか。尊慮の程を承はり度う存じます」と言ふと、

「左樣さな。では杜若の花一輪について大小の差別なく金百疋と定めて貰ひ度い」

「橋や杜若の葉などは如何樣に計算致しませうか」

「否々、一輪百疋で十分であるから、他の物は計算するには及ばない」

と言つて後は何も言はなかつた。日數を經て其の屏風が完成した。冬木は謝禮をするために花の數をかぞへて見ると、六曲一双の中に花が三百餘りあつたので、其の報酬は七十五兩といふ額に上つた。

けれども抱一も後にはどん〳〵畫料を取つた。畫料幾ら〳〵と言つて、それ丈持つて來なければ筆を把らなかつたので、さすがの文晁ですら「近頃根岸のお上人が慾張る」と言つたくらゐだつた。文晁と

抱一では面白い話がある。二人はよく一緒に吉原へ行つたものだが、一緒の時の會計は必ず文晁が支拂つた。文晁は遊里へ行つても決して泊らないで、い〳〵加減な時間になるとサツサと歸つてしまふが、抱一は必ず泊つて而も流連した。

大窪詩佛

或る時大窪詩佛の處へ、日頃じつこんな老畫工がやつて來て、

「どうも貧乏で困つたが、何かうまい工夫はありますまいか」と言つた。

詩佛は手を拱いて考へてゐたが、やがてにつこり笑つて、「安心し玉へ。僕が名案を思ひ付いたから」

それから詩佛は直ぐ樣文晁の處へ出掛けて行つた。

「申し兼ねるが、尊公の其の羽織を一寸拜借願ひ度い」

「どうするのです」

「いや、實は一寸餘所へ參らねばならんのだが、先達つて羽織を呑んでしまつたので、急に差し支へて困つてゐる。尊公のを借りて一時間に合はせようといふわけである」

文晁は笑ひ乍ら着てゐた羽織を脱いで貸し與へた。それは田安家から拜領の黑羽二重の紋付だつた。

詩佛は大喜びで羽織を持つて自分の家へ歸つて來た。すると老畫工が首を長くして待つてゐた。

「さあ〳〵、貴公は此の羽織を着て出掛けるんだ」

「何處へ行くのです」

「先づ上州邊へ行くかな」

「上州へ行つて何をするんです」

「そんな事は僕に委せて置き玉へ。兎に角直ぐに出掛けよう」

詩佛は呆氣に取られてゐる老畫工をうながし立て〻上州へ旅立ちをした。さて上州へ着くと、

「此の度び、谷文晁先生と大窪詩佛先生とが同道して、當地へ漫遊に來た」

と振れ込んだ。當時文晁の名聲は遠近に轟いてゐて其の畫は容易に手に入らなかつたので、上州の素封家は爭つて揮毫を賴んで來た。詩佛は彼の老畫工に例の羽織を着せて、すつかり文晁に仕立て〻繪を描かせた。人々はこれまで文晁の顏こそ知らないが、見れば立派な老畫師で殊に奚の紋の付いた羽織を着てゐるし、また有名な大窪詩佛先生が附いて來てゐることだから、誰一人疑ふ者はなかつた。かうして僞文晁は各所を廻つたので、江戸へ歸つて來た時には行李の中が重くなる程金が溜まつてゐた。

それから暫く經つてから、詩佛は此の事を文晁に語つた。

「ひどい事をしたものだね」

と言つて文晁は笑つてゐた。

詩佛は上州の知人達の許へ書面を送つて、

「先般の老畫師は實は文晁にあらず。近頃生活困難にして米鹽に窮す。僕深く之を憐む。因つて計を授け計つて文晁と稱し、姑らく人氣を引き立てゝ其の急を救ひしなり。お蔭を以て彼が家道も頗る復興せり。妄言多謝」

詩佛は文化文政の間、詩を以て江戸詩壇の牛耳を執つた人であつた。神田お玉ヶ池に棲み、其の家を詩聖堂といひ、盛んの頃は門人來客常に堂に滿つる有樣で、收入も頗る多く豪奢な生活をしたが、晩年火災に遇ひ、其の頃から家道が頓みに衰へ始めた。それとともに精神も衰弱し、中風を發して昔日の面影は更らになく、齡六十で練塀小路の陋居に於て死んだ。

蹄齋北馬

文晁は葛飾北齋の門人で浮世繪を描いてゐる蹄齋北馬の處へ使を遣つて「少々お話したいことがあるから私の宅まで來て貰ひ度い」と言つて遣つた。北馬は文晁とはまだ一回も會つたこともないので、どういふ話だらうと思つたが、兎も角直ぐやつて來た。

「さて、お前さんをお招き申したのは外のことでもない。折り入つて私からお前さんに賴み度い事があるのだが、就いては其の前にお尋ねしたいことは、今まで北齋先生の描かれた繪本、草双紙、其の他いろいろの物をよく拜見してゐるが、なか〳〵どうも、着物の模樣、景色、風俗等も行き渡つてよく描けてゐるが、聞けば其の細かな處は大概お前さんがお描きなさるといふことだが、それは、實際のことですか」

と、文晁は北馬に向つて尋ねた。

「左樣で御座います。實はもう地本や何かの事は私も大概心得て居りますから、師匠が怠けて出版の間が缺けさうな時などは私にやつてくれといふやうなこともあつて、まるつきり私が描いてしまつたこともあります。師匠はあゝいふ人で、それで宜からうと申して居りますので、其の儘で濟んで居ります。全く細かな處はみんな私が受け持つて描いて居ります」

「それはどうも感心なことだ。私はお前さんがあゝいふ精密な物をお描きになるので感服して、急にお賴み申し度い事があるのだが、何んと北馬さん、私の處へ來て、私の片腕になつて手傳つて貰ひ度いのだがどうでせう——突然恁う言つても返事は出來まいが、私の處にも門人が三百人位はある。また倅文一も一通りの仕事は出來るやうになつてゐる。が、さて多數の門人の中でもこれならば大丈夫私の助手になると思ふ者が無い。倅はまだ〳〵自分の研究の方が忙がしくて私の手傳ひをさせてゐるわけにはい

かない。そこで廣く世間を見渡したところが、緻密な仕事が出來る上に彩色も上手だといふ人では、先づお前さん位確かな腕を持つてゐる人は少ない。で是非お前さんに私の助手になつて貰ひ度いと思ふのです。北齋先生は立派な方だ。恐ろしい位の腕前を持つてゐる。あゝいふ偉い人を師匠に持つたのはお前さんの幸せだ。が、惜しいことに浮世繪といふものは中以下の社會にしか持て囃されないから、浮世繪ばかり描いてゐたのでは本當の出世は出來ない。お前さんが私の處へ來て片腕になつて呉れる氣があるなら、私の方でも其の積りで一肩入れて、お前さんの名前の擧がるやうな工夫をしてあげようと思ふのだが、何んと承知しては貰へないだらうか」

北馬は其の言葉をつく〳〵聞いてゐたが、

「誠に意外なお話で、私如き者をさうまで仰しやつて下さる御親切は、何んとも御禮の申し樣も御座いません。しかし、お話しを致さねば分りませんが、私は山の手の同心の子で、有阪五郎八といふのが本名で御座います。同心の勤めが厭ですから、早く弟に世を讓つて只今は隱居の身であります。然し乍ら弟に食はして貰ふのも殘念ですから、早く其の厄介をのがれて、幾らか弟を助けてやるやうになりたいと考へまして、それに就いて私は繪が好きで少しは習つて居りましたが、大體繪本や何かを見て寫した位のことで我流でやつて居たゞけで、何も知りませんでした。が、其の道で少しも早く錢の取れるのは浮世繪に限ると考へまして、北齋先生の處へ參りましたのです。處が、幸ひ永い年數も掛らず、師匠の見出しに預かつて懇ろに教へて戴いたお蔭で、只今ではどうやら繪も描けるやうになり、幾分かた人でして、御自分は食べる物も着る物も無くても、私にはいつも報酬を下さるのです。他から畫料を持つて來ると「これを持つて行きな」と言つて封目も切らずに私に下さるといふ風で、お蔭で私も今日弟の世話にもならず、幾らか家政を助けてゐるといふわけで御座いますが、これも一重に師匠の御恩で御座います。只今の段々のお話はまことに有難いことでは御座いますが、私が北齋先生の處へ行つたのはさういふ次第ですから、今日北齋先生を捨てゝこちらへ參るといふことはどうしても出來ません」

と言つた。文晁は益ゝ感心して、

「よく分りました。實にお前さんは見上げた人だ。しかし師匠と弟子の仲はさうなくては不可ない。では恁うしよう。私から直接北齋先生に賴んで見よう。さういふわけだつたら何も私の處へ來ながし來なくても宜しい。あちらが閑な時だけ手傳つて貰へばいゝ。其の事を詳しく云つて賴んで見ようが、それで若し北齋先生が承諾して下すつたら、お前さんも私の處へ來て呉れますか」

「それはもう、師匠が承知の上の事でしたら、私に取つてもよい修業になることですから、喜んでお手

傳ひを致します」

「ではさういふことにしよう」

と言つて其の日は別れた。

文晁は態々北齋を訪ねて、北馬を貸して貰ひたいと云つて頼んだ。北齋は快く承諾して翌日北馬を呼んで「昨日文晁が來てかういふ話だが、前に何かお前に話しがあつたのか」と訊いた。

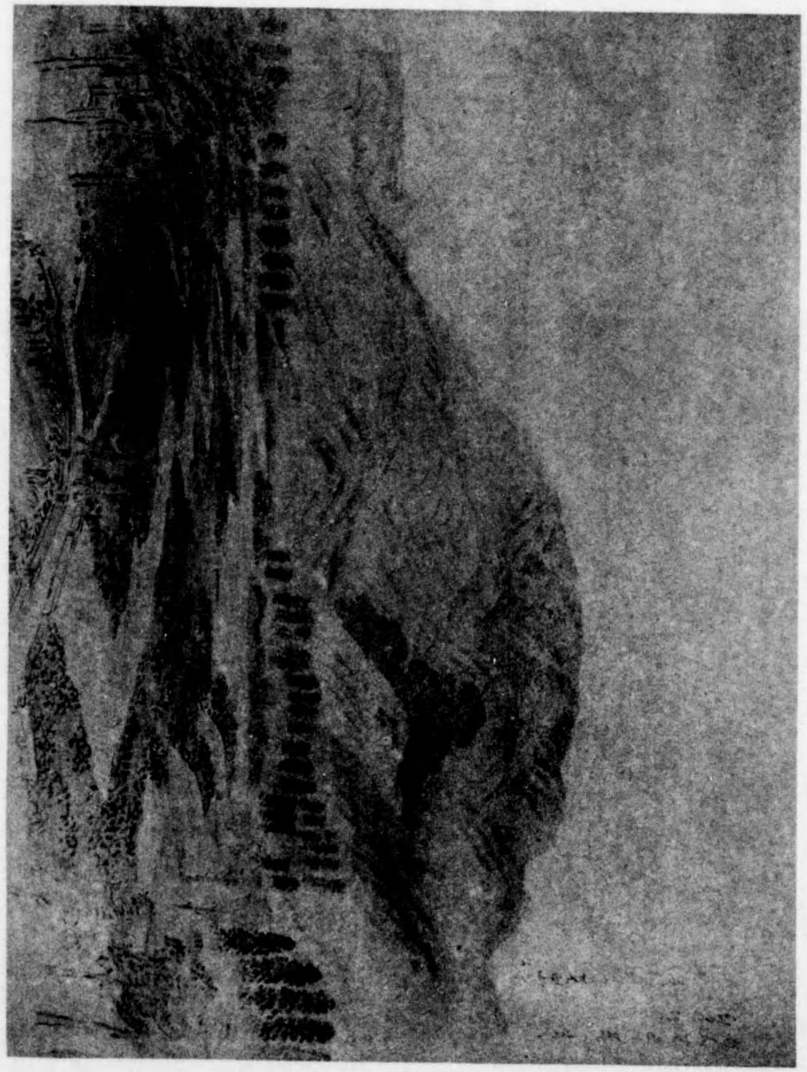
「それは御座りました。が、私は先生のお許しが無ければ行くことは出來ないと答へて置きました」

「さうか、併し俺は承知してやつた。己れの處でも一年中用があるわけではないから、こつちの閑な時は文晁の處へ行つて手傳つて遣るがいゝ。折角さう親切に言つて呉れるのだから有り難いわけだ。己れは承知したから、お前も先方へ行つたら其の積りで出來るだけ骨を折つて助けて上げるがいゝ」

「宜しう御座います。それぢや彼方へも參ることに致しませう」

それから北馬は文晁の處へも始終出入りをすることになつた。北馬の家は四谷にあつた。文晁は、「四谷から小梅迄通ふのは大變だ。第一、往復の時間が潰れて詰らないから、此の近所へ家を探して遣らう」

と言つて、同じ下谷二長町の裏家だが、小ざつぱりした家を一軒北馬の爲めに借りてやつた。臺所道



谷文晁筆の山水

具から一切萬端文晁のはうで買ひ調へ、女中一人附けて其處へ住まはせた。北馬も其の厚意に感じて一生懸命仕事をした。

丁度其の頃、文晁は、或る諸侯から婚禮道具を頼まれた。それは極めて緻密な源氏繪で、本間の大屏風に源氏五十四帖悉くを畫く非常に緻密な大作だつた。

「何しろ此の忙がしい中では遣り切れない。下圖は無論出來てゐるし、大略は私が描くが、彩色から裝束の模樣などは、私が指圖をするからお前にやつて貰ひたい。何分大物なのと、日限が迫つてゐることだから、餘程骨を折つて貰はないと間に合はない」

「宜しう御座います」

それから北馬は其の仕事に掛つた。裝束の模樣だとか几帳の模樣だとかに就いて北馬は朝に晩に聞きに來る。文晁は一々粉本を出しては「其處は恁うして、此處はあゝして」と細かに指圖をした。

或る日文晁は宗對馬守の邸へ席畫で聘ばれて行つた。宗家は同じ二長町にあつた。用事が濟んでから文晁はお邸へ暇を告げて、近い處だから迎へも呼ばず一人でブラ〳〵歩いて歸つて來た。三味線堀へ出て二長町へ曲つて來たが、ふと北馬の事を思ひ出したので、何をしてゐるか見て遣らうと考へて、だしぬけに北馬の宅へ這入り込んだ。

夏のことで、表にはすだれが掛つてゐた。しかしもう夜だから、外からは反つて家の中が透けて見えた。北馬は蠟燭をつけて大肌ぬぎでセツセと仕事をしてゐた。が、見ると北馬は左の手で繪を描いてゐるのだつた。

「大分精が出るね」

「これは、先生ですか。失禮致しました」

北馬は急いで肌をいれた。

「私は今初めて知つたが、お前は左利きなのか」

と文晁は不思議さうな顏をして言つた。

「へえ……」北馬はひどく恐縮した樣子で「突然のお出で〻御座いましたので、どうも飛んだ處を御覽に入れて何んとも相濟みませんで御座います」

「何、そんな事は構はないが、お前はほんたうに左利きなのか」

「いえ、さうでは御座いませぬ。實は恁ういふわけで御座います。先達つてもお話し致しました通り私は大變困窮の中に北齋先生の處へ參りまして、今日どうやらかうやら困らないまでになりましたのですから、この右の腕は全く北齋先生に賣つてしまつたやうなものです。師匠はあゝいふ人だから、惡い顏もせず、文晁先生の處へ行けば貴樣の身の爲めにもなることだから行つてお手傳ひをするがよいと言つて喜んで私を寄越して下さるのですが、私としては一旦師匠に捧げた此の腕を、他の人の爲めに使つたのでは心に濟みませぬ。ですから、右の腕は使へませぬが、左の腕はあいて居りますから、左を先生の御用に立てる覺悟を致しました。――實は恁ういふわけで左で畫いて居ります。これ程御親切を蒙つて居り乍ら、誠に水臭い奴と思召すかも知れませんが、どうか御勘辨なすつて下さいまし」

と北馬は兩手を突いて言つた。文晁は思はず兩眼に涙を浮かべた。

「お前は何んといふ立派な心掛けだらう。北齋先生はいゝ弟子を持つて羨ましい。私の仕事は左で澤山だ。決して右を使ふには及ばない」

「有り難う存じます。此の頃は慣れましたので、左でも格別不自由は無くなりました」

「さうだらう。筆勢といひ何といひ、私もお前が左で描いてゐようとは思はなかつた。結構々々」

文晁はそれ以來一層北馬に目を掛けてやつた。文晁の歿後は、北馬は書畫會などへ出て左畫きをやつて人を駭かせたが、文晁が生きてゐる間は決して人前で左畫きはしなかつた。彼は只左で畫くばかりでなく、左右へ紙を置き、兩方の手に筆を持つて、全く異つた繪を同時に畫いて見せた。

13979

畫龍

北齋の繪は江戸では喧ましく持て囃されたが、上方では一向名が賣れてゐなかつた。文晁は或る時北馬が來ると、二尺幅の絹と十分な謝禮を添へて、

「これを北齋先生の處へ持つて行つて、全身龍を描いて戴くやうに賴んで貰ひ度い。私が自分で掛けて樂むのだから急ぎはしない。氣の向いた時、描いて貰ひ度い。それからこれは甚だ輕微だが、これだけの御挨拶だからと宜しく申して貰ひ度い」

と言つて北馬にそれを持たせて遣つた。すると北齋から「誠に御鄭重な御挨拶で恐れ入ります。氣分の好い時に認めますから、暫時御猶豫を願ひます」といふ返事があつた。間もなく龍の畫が出來て來た。早速出入りの經師屋へやつて立派に表裝させ、箱に入れて、京都へ行く時文晁はそれを持つて出掛けた。

上方へ行つて、宿屋へ着くと、文晁は自分の部屋の床に前から掛つてゐた掛物を取り外して、持つて行つた北齋の龍の畫を掛けてさうして頻りに眺めてゐた。すると訪問客が必ず、

「これは誰の畫で御座いますか」と言つて尋ねる。

「これは江戸で今有名な葛飾北齋の筆です。一體此の先生は浮世繪が看板だから餘り肉筆の方は世間の人が知らないが、これ程の手腕といふものは容易なものではない。實に大したものです。私は特に賴んで畫いて貰つたが、今度は旅行中ゆつくり眺めて樂しまうと思つて態々持つて來たのです。あなた方もよく御覽になつて置くがよい」

と、何處へ行つても、行つたさきゝでさういふ具合にやつて行つた。そこで上方の人々は「文晁先生ともある人がそれほど感服する繪なら全く大したものに相違無い」といふやうなわけで、今迄全然知らなかつた人も、或ひは版畫でわづかに知つてゐた人達も、急に北齋を口にするやうになつて爭づて畫を依賴して來た。

文化十四年、北齋は名古屋へ漫遊して、西掛所境內で疊百二十疊敷の紙へ一杯の大達磨を描いて都下の人々を驚倒させた。更らに京都に歷遊すると、京都でも大變な人氣で到る處で引つ張り凧になつた。之も前以て文晁が下地を作つて置いたからだといふ。

文晁が上方へ行つたのは、關白近衞家から招かれて其の約を果すためであつた。京へ着いて早速參殿すると、關白はいたく悅ばれて、伊丹の酒、攝津の魚と、日夜文晁をもてなされた。文晁は幾日も幾夜も、醉うては寢ね、起きれば何處かへ出て行く。近衞家の雜掌が怪しんで人を尾けて見せにやると、今日は東山、明日は北山と神社佛閣を經廻り、景色を眺めて遊び暮し、はや一月にもなつた。そこで或る

日雜掌共から關白に、

「かの文晁と申す畫工は、毎日酒を飲み遊び暮し、繪は畫かず見物ばかり致し、御館を旅籠屋のやうに心得てゐる不埒者で厶ります。今日は是非彼に繪を畫くやうにお云ひ付けなされたが宜しう厶ります」と申し上げた。

關白殿下はお笑ひになつたが、もう宜い時分であらうと、文晁を召して「今日は繪を畫け」と仰せられた。文晁は畏まつて、其の日も朝から酒を飲み、古い奈良の香墨を卸し溜めた大盌三つ四つに、價五兩程の金粉を用意させ、さて用意が整つたと知らせると、醉ひ臥してゐた文晁は「さらば」と云つてよろめき乍ら繪を畫く場所へ出て行つた。其處は非常な大廣間で、煌々と光る金屏風一雙立てゝあり、關白殿下も繪を畫く處を御覽のためお出ましになつてゐた。文晁は金屏風を倒し、金粉を墨汁を溜めた大盌にドサと入れ、腕を卷り上げ、大きな刷毛を大盌に浸して、屏風の上へ只無茶苦茶に塗り付け、叩き付け、ボタ〳〵と零したりした。殘らず墨を振り撒いて仕舞ふと「先づこれで宜しい、あとは今夜」と言つて自分の居間へ引退つて酒を飲み始めた。

關白はじめ人々が屏風を見ると、只一面の墨で、雪でもなければ雨でもない。何の景色とも分らない。大いに驚き呆れ「何の繪であるか」と人を遣はして尋ねても文晁は只笑つてゐて答へなかつた。やがて

灯も點る頃になると、文晁は益々酒を飲んで以前の大廣間に現はれ、關白殿下に打ち向つて、

「やつがれが何を畫くか只今御覽ぜられよ」

と、今度は巨きな筆に只の墨を含ませ、此處には鱗の數々、そこには爪、あるひは頭、あるひは尾と、遠く離れ〳〵に、墨の合間々々に畫き終つて、

「今宵は夜も更けましたこと、あとは明朝御覽下さるべし」

と言つて人々を出してやり、己れはあとへ殘つて屏風を暫く打ち眺めたあとで龍の眼睛を點じて、臥所へ退つて寢て仕舞つた。

關白初め人々は、夜の明けるを待ち兼ね、朝日の射す頃大廣間へ行つて屏風を見ると、一面に振り掛けた墨は濃く淡い雲煙で、金粉はキラ〳〵に輝き、光をなしたるは雷電はためく暴雨の空で、其の中に飛龍が宛ら活けるが如く、角を振り立て、爪を研ぎ立てたる態の、凄まじさは言葉にも筆にも盡せない。人々は只「あつ」と聲を擧げ、手を叩つて讃嘆したのであつた。

此の屏風は近衛殿の文晁の龍と云つて世に名高い寶物となつた。

其の頃京都で最も名の高い畫家は岸駒であつた。岸駒は元加州金澤の上繪かきの職人岸某の子で乙次郎と云つて、二十歳過ぎ迄金澤に居たが、淨瑠璃が好きで、本職の方はそつちのけで彼方此方淨瑠璃を

語つて歩いてゐたが、或る人に勸められて、大阪へ出て修業して立派な太夫になりたいと考へ、大阪へ行つて其の道の人に尋ねると當時ならびなき上手と云へば竹本駒太夫だが、今京都四條の芝居へ行つて留守だと云はれたので、又もや京都へ行つて駒太夫の旅館を訪ね、遂々金澤から入門し度いと思つて來た由を語つた處が、駒太夫は入門を謝絶した上「淨瑠璃の太夫にならうなどといふ不量見は止して、家職の上繪を畫いて世を渡る方がよい」と頻りに意見を加へた。仕方なく「金澤へ歸りませう」と言つて其處を出たが、其の時はもう旅費が一文も無くなつてゐた。乙次郎は窮迫して幾日かを京都で過ごすうち、或る人の世話で上繪の職人に住み込み、其の後佛光寺の經師屋へ雇はれて仕込の佛畫を描いたりしてゐた。處が、其の筆意が尋常の職人とは異つてゐる處から、或る時有栖川宮家から特に指名されて佛畫を描かせられた。するとそれが御意に叶つて遂に宮家の御内人に加へられて雅樂頭と稱した。それから世間の信用も加はり、自身も日夜畫の研究に心を費したので、後には禁裏の繪師となつて越前介に任官し、遂に大名を成すに至つた。岸駒といふ名前は、初めて宮家へ召された時「畫名は何と申す」と訊かれて、畫名が無いと答へるのも殘念だと考へ、ふと思ひ出したのは竹本駒太夫の名で、其の駒を取つて自分の苗字の岸と結び付けて「岸駒」と答へたのが、到頭生涯の名前になつたといふことであつた。彼の畫は、沈南蘋の寫生から出て、後に宋人諸家の法を折衷し、別に一格を立てたものだつた。

岸駒は非常に狡智に長けてゐて、常に賣名に汲々として、俗眼を驚かす工夫ばかりしてゐるといふので、識者の間では以ての外評判が悪かつた。賴山陽が曾て恁ら言つて評した。

「岸駒は天下の人を殘らず盲目だと思つてゐる。竹洞は天下の人が皆目明きだと思つてゐる」

だから岸駒の畫はおもに田舍へばかり賣れた。彼は頗る立派な家に住み、白羽二重の衣服を着し、厚い褥の上に座して、傲然として人に接した。田舍漢が畫を賴みに來ると、一段高い處から簾をキリ〳〵と捲き上げて對面するといふやり方であつた。

或る年、東寺の食堂の天井の修覆が出來上つたので、誰かに龍を畫かせよう、と評議をしたが、兎に角京都では岸駒が一番高名なので彼に依賴することになつた。が、もと〳〵寺のことで大した報酬も出せない。それでもどうかと思つて話をすると、「外ならぬ貴寺の御依賴と云ひ、殊に天井の畫龍を揮毫するはこれが初めてゞはあり、諸國の人の眼にも觸れ自分の名前も後々に傳はることであるから、報酬の如きは論ずる處ではない」と言つて快く引き受けたので寺のはうでも大いに喜んだ。日數を經て畫が出來上つた。寺では報酬の事で評議はしたが、最初の言葉もあり、二十兩の謝儀を贈ることにして持つて行つた處が、畫稿に思ひの外の日を費したとか何んとか云つて大變不足らしい口ぶりを示したので、寺でも案に相違したけれど、今更增額することも出來ず迷惑してゐた。するとそこへ岸駒の門人がやつ

て來て「先き頃贈られた二十兩は正に受納致しました。就いては、初めから何程か畫に添へて寄附をも致す考へでありました故、改めて百兩御修覆料の内へ寄附致します。これは當座の納金で御座いますから御受納願ひ度い」といふ口上で、前日寺から贈つた儘の謝金を持つて來た。寺では即答もならず、一時其の金を預かつて置いたが、寺でも少なからず處置に弱つた。で度び〳〵交渉した結果が、二十兩は元々通り岸駒に納めさせ金百兩の空らの寄進札を寺の堂内へ掲げることにして、此の紛紜は落着した。實際は岸駒の懐中からは一文も出てゐないのだ。

寄進金壹百兩　越前介岸駒

と書いた札を見て諸國の見物人は「岸駒先生は傑いものだ」と言つて駭ろいた。すると誰かゞ落首を作つて堂の柱へ貼つた。それは、

百兩が岸か寄進か知らねども當時畫龍（畫料）の高い天井

文晁の倅の文二が、或る年京都へ行くことになると、

「京都へ行つたら一度は岸駒に會つて見るがいゝ」

と文晁は文二に向つて言つた。訪ねて行けば、自分の顔に對しても文二を粗略には扱ふまいと文晁は思つたからだつた。

京都へ着くと、文二は父の言葉もあるので岸駒の家を訪問した。すると、執事のやうな男が出て來て

「何卒此方へ」と言ふので案内されて行くと、立派な廣い座敷へ通された。正面には御簾が垂れてゐて白木造りの物々しい有樣だ。暫時それで控へてゐると、突然、

「シーッ」

と警蹕の聲が掛つたので、文二はびつくりして、思はず「はッ」と頭を下げると、

「文晁の倅文二か、よう參つた。緩る〳〵休息致せ」

と岸駒が高い處から聲を掛けた。文二が再びはッと思つて頭を上げた時には、もう御簾はスル〳〵と下つてしまつた。

江戸へ歸つて來て此の話をすると、文晁は齒嚙みをして口惜しがつた。

晩年

文晁には八人の子があつた。其のうち三人が男で、文二は長男だつた。併し文晁は、長女の於宣に養子を迎へて文一と名乘らせ、自己の後繼者たらしめんとした。文一は宮津侯の侍醫利光氏の第二子であつたが、畫を養父に學んで痴齋と號し、山水花鳥を描くに工みで、文晁も大いに望みを囑してゐたが、

生來多病で、文政元年三月齡三十二で病歿した。文晁は片腕をもがれたやうな氣がした。立派な葬式を行つて、淺草源空寺に碑を建て、碑文は龜田鵬齋が書いた。三男は早世し、二男は他家を繼ぎ、長男の文二が相續人になつた。文二は萍所と號して畫を描いたが、繪はまことに下手だつた。併し、懷ろッ子にしては大變才氣があつたので、文晁は非常に文二を可愛がつた。

文晁は、體は鶴のやうに痩せた人であつたが、それでゐて精悍强力で、屢〻遠國に杖を飛ばした。齡を取つてもよく大酒をした。殊に晩年の性格は曠達不羈に走り、寧ろ傍若無人に近かつた。杯を啣んで陶然として醉ふと、卽ち筆を把つて縱橫に畫いた。だから文晁の繪は初老以後の作には、壯年時代のやうな密畫が少なく、筆致は北宗に傾き、滿幅潑氣が漲つてゐる。鹽田士鄂は文晁とは莫逆の交りがあつた。文晁が老年に及んで畫名は益々世に噪がれてゐた頃、士鄂が畫を乞ふと、文晁は「私が二十年前に作つた畫には確かに觀る可き物があるが、今は齡も古稀に餘つて、病衰して目が昏んでしまつたから本當の畫は出來ない。已むを得ず描く畫ばかりで、到底知己の爲めに揮毫するには堪へない」と言つてどうしても應じなかつた。

壯年時代迄の文晁は非常に研究心が强く、細心綿密で、しかも極めて博採主義だつたので、目に觸れる物は何んでも取り込んだ。彼は司馬江漢の影響を受けて西洋畫も一通り研究した。或る年、和蘭の加比丹が八代將軍に西洋の花鳥畫を獻納すると、將軍はこれを嘉納して後に本所の羅漢寺に下賜された。寛政の頃、文晁はこれを見て模寫を試みた。それは長さ九尺幅四尺の絹へ、日本繪具を以て油繪の色彩を出さうとしたのであつて、ほゞ成功の域に達したのだつた。『集古十種』の編纂は、樂翁公の趣味であると同時に、文晁の旺盛な研究心の發露でもあつたのだ。

市井の一畫家で文晁ほど澤山の粉本を所藏してゐた人は古來なかつた。渡邊玄對が歿した時、文晁が十兩の香奠を贈ると、玄對の遺族の者は香奠返しをどうしたらいゝか分らぬので文晁の所へ相談に來た。すると文晁は「私の欲しい物は粉本のほかには何にもない」と答へたので、渡邊家では玄對の祕藏してゐた粉本の全部を文晁に贈つた。

文晁は、和漢のあらゆる流派を統一して別に一家を成した巨匠であつた。彼は綜合的の畫家だつた。だから、其の門下からは種々の傾向の畫家が輩出した。門人數百人のうち最も有名なのが、渡邊崋山、田能村竹田、立原杏所、高久靄崖の四人で、これを文晁門の四哲といふべく、ついで佐竹永海、鏑木雲潭、喜多武清、依田竹谷、遠坂文雍、岡田閑林、相澤石湖、江川坦庵等もそれ〴〵當時名のある畫家であつた。

天保十一年九月一日、文晁は七十七歲の壽筵を兩國の萬八で開いた。其の日の來會者は、當代の名

渡邊崋山
田能村竹田
立原杏所
高久靄崖
佐竹永海
鏑木雲潭
喜多武清
依田竹谷
遠坂文雍
渡邊玄對

岡田閑林
相澤石湖
江川坦庵

流、文人墨客の名のある者は悉く網羅されてゐたので、會場が狹隘を來し、近隣の龜清樓を借りて分會場とし、一日に五石餘の酒を傾け盡した程の盛會だつた。

それが文晁の最後の活動であつた。

其の頃文晁は中風を發して思ふやうに筆が執れなかつた。妻は數年前に世を去つてゐた。妻は阿佐子といつて、後妻だつたが、文晁に嫁いで文二を初めおほぜいの子を生んだ。阿佐子は賢婦人で、豪放磊落な文晁を助けてよく內助の功績をあげた。畫料を受け取るのは大概彼女の役だつた。文晁が揮毫をする側に附いてゐて、「それは少し丁寧に」とか「これは極くざつと」とかいふ具合に指圖をするのも彼女だつた。そんな風だつたから彼女の在世中は家政も豐かであつたが歿して後は大いに亂れてしまつた。文二は要するに不肖の子だつた。渡邊崋山は彼を評して「文二不肖探信の如し」と言つた。探信は探幽の子である。其の上、母が歿して監督者を失つた後は娘達までが放恣に陷つて兎角失行があつたりした。家道は次第に衰へて來た。其の中で文晁は老病の床についてゐた。

天保十二年十二月十四日、文晁の病勢は俄かに重つて、

ながき世を化けおほせたる古狸尾さきな見せそ山の端の月

といふ辭世を殘して永眠した。七十八歲であつた。

遺骸は淺草五台山源空寺に葬られ、法名を本立院殿法眼生譽文阿一如文晁居士とおくられた。

同じ年の十月渡邊崋山が自刄したのであつた。

文二の代になつてからは家道が全く衰ろへてしまつた。源空寺の墓地に文晁の墓は建つたけれども、それは至極さゝやかな墓で、龜田鵬齋の碑文を載せた養子の文一の立派な墓とは比ぶべくもなかつた。

文晁餘談

古來を通觀して、我國では文晁ほど大きく流行した畫家はなかつた。其の原因となるものは幾多あるが、第一は、文晁の畫は南北を統一したばかりでなく、古今の凡ゆる流派を研究して其の長を採つたもので、一流一派に偏してゐない。それが爲めに萬人の嗜好をそれ〴〵滿すところの要素を有つてゐたことを擧げなくてはなるまい。第二には其の時代がよかつた。文晁と雖も化政の黃金期に生れ合せなかつたならば傳へられるが如き全盛は見られなかつたであらう。第三は境遇に惠まれてゐた。白河樂翁といふ大きな後援者がなかつたならば、文晁でも出世するにはもつと苦勞をしなくてはならなかつたかも知れない。其の上彼は處世術にも長けてゐた。辭世の句の「ながき世を化けおほせたる古狸」云々は、單に一片の洒落ではなく、臨終に際しての彼の眞情でもあつたのであらう。

大晦日の晩に富士山の繪をかいた扇を江戸中へ撒き散らした話なども、大名の樂翁公の智惠よりも寧ろ文晁自身が考へ付きさうなことである。既に有名になつた後でも、彼は常に實名には汲々として努めた。其の手段として、或る時は俳優に引幕を贈つたりした。引幕には勿論文晁の名前を大きく書いてあるのである。又彼が芝居見物に行つてゐる時は必ず宅から人を寄越して、木戸番に「文晁先生木戸迄急用」と呼ばしめたといふことも有名な話だ。

併し、彼が勉强家で、努力家であつたことも尋常一樣ではなかつた。文晁は若い時分から體は瘠せてゐて、いはゆる清癯衣に堪へざるが如き外觀であつたが、而も精力絕倫、倦み疲れることを知らず、無病息災であつた。旅行を好み、足跡は東奥州の果から西は九州に及び、奥州など旅行する時は屢〻數日の食糧を携へて人無き山中や僻地を跋涉したのであつた。『集古十種』は斯くの如き文晁の活動力の産物であつた。

文晁は下谷二長町に生れて、終生其の居を移さなかつた。古今文人畫工の輩は父祖の舊宅を守る能はず、諸所に流寓するのが常であるが、文晁が依然として遷らなかつたのは、其の人と爲りにもよることであつた。彼は平常黎明に起き、盥漱畢れば、先づ家に祭れる天照春日八幡の三神を拜し、觴束を捧げ、太鼓を打ち、祝詞を誦することを一日も怠らなかつた。かういふ處も、豪放磊落を以て一代に鳴つた人とは思はれなかつた。だから門人達は、毎朝其の太鼓が蓼々と鳴り出したのを聞いて

「そら、先生が起きた」

と、床を蹴つて飛び起きるのが例であつた。

けれども中には、それでも眼が醒めずに寢てゐる奴もある。すると文晁はお勤めが終つたあとで門人の寢てゐる處へ行つて、猫の鳴き聲を眞似て起すのであつた。

文晁の狂歌に

文晁のすきは月夜に米のめしつとめかゝさずいつも早起き

といふのがある。ひどく俗だけれど、萬人の手本にならうとした心掛けを汲まなくてはなるまい。

抱一と一緒に吉原へ行つたことは前にも書いたが、文晁は、吉原には何處にも狎妓といふものはなかつた。必ず一夜限りであつた。抱一が餘り居つゞけをするので或る時文晁が諷して自分の色に溺れざるを詩つて

よし原に花を咲かせて早歸り

とやつた。すると抱一は

居すゑして花のあはれを聞く夜かな

と答へた。風流の點に至つては、文晁はとても抱一の足許にも及ばない。

もう一つ文晁の狂歌に

文晁の嫌ひ雨降り南風笑はぬ人に化けものぞかし

笑はぬ人を嫌ひなものゝ中に數へたところに文晁の性格の現はれがある。要するに彼は偉大なる常識的天才とでも云ふべき傑物であつたのだ。

人を操縱することも上手であつたが、後進の面倒は實によく見た。

高久靄崖が江戸へ來て窮迫の極、餓死に瀕し、將に其の妻を賣らんとまでした時、田能村竹田に勸められて初めて文晁の門を叩いた。文晁は滿座の中で其の畫を熟視して、讃嘆久しうして、「沈厚の筆、蕭散の墨、殆んど私の及ぶ處でない。此の技倆を以て私の門に籍を列するのは、釋迦が却つて迦葉の門に入るやうなものであるが、足下の名聲は未だ顯はれてゐない。名を售り技を鬻ぐが爲めに私の弟子となるので、亦佛家の所謂善巧方便であらう」と云つて、それから遇ふ人毎に口を極めて靄崖を賞讃したのも、世間の人は「文晁先生があれ程賞めるところを見ると餘程大した繪かきであらう」といふので、靄崖の陋屋へ畫の依頼者が殺到した。靄崖は餓死を免がれたのみならず、忽ち名聲を都下に喧傳されるに至つた。

似たやうな話は、水戸の林長羽といふ畫家が江戸へ來て門戸を張つたが、長羽の畫は豪放簡素で、俗眼に入らず、門前蕭條として畫の依頼はなく、殆んど糊口に窮してゐた。文晁は其の噂を聞いて長羽を救ふ方法を考へてゐると、偶々有名な金持の商人がやつて來て金屏風の揮毫を依頼した。すると文晁は「私は既に年老いて、屏風を揮毫する力がない。併し、水戸の人で林長羽といふ畫家は近來の名人で到底私も及ばない。私が紹介するから長羽先生に依頼なされては如何」と云つた。富商は文晁の言を信じて長羽に揮毫を依頼した。長羽は是に得意の墨梅を描いたが、筆法放膽、用筆頗る簡素、いはゆるざつとしたやうに見える繪だつたから金持は案に相違して、撫然としてしまつて、再び文晁の處へ來て改めて揮毫して貰ひたいと云つた。そこで文晁が金持と同道して其の家へ行つて觀ると、骨力秀勁にして見るべき畫であつた。そこで頻りに讃嘆の聲を放つて「私の老腕では到底此の上に出ることは出來ない。實に美事な出來榮えである」と口を極めて賞美したので、金持も氣持が變つて來て、

「イヤ、實は私もさう思つたのですが、先生の御鑑定如何かと、失禮乍ら試して見たのでした」

と云つて、それから反對に大いに此の屏風を愛藏するやうになつたのであつた。

文晁は一代に大流行をしたので、從つて其の生存中から贋作も世間に横行する始末であつた。彼が贋作を意に介しなかつたことは前にも書いたが、それについて面白い話がある。

遠州見附驛に鶯溪といふ田舍繪師があつて、文晁の疎畫ではあるが墨竹の非常な大幅を手に入れて自慢してゐたが、見る人が皆贋物だと云つて嘲笑した。そこで福田半香が來た時見せると、半香も矢張り眞物ではないと鑑定した。鶯溪は心平らかならず、即日旅支度して江戸へやつて來て、文晁の門を叩いて、果して眞であるか贋であるかと質した。すると文晁はその繪を見て「是は全く私の筆である。但し醉餘の戯墨である」と云つて、彼の望みにまかせて落款を入れてやつた。鶯溪は雀躍して、幾度びか叩頭して

「先生、それではとてものことに印も捺して頂き度い」と云ふと

「印なら其處にあるから勝手に捺して下さい」

鶯溪は喜んで、文晁の印箱から百餘顆の印を取り出して殘らず押捺し、全幅殆んど餘白を遺さなかつた。直ちに携へて鄕里に歸り、半香の前に展げて「これでも足下は贋物と云ふか」と云つたので、半香も一言無く、罪を陳謝したのであつた。其の印章のうち極めて大きなものが二個あつてどちらも方六寸許りあり、これは文晁秘藏の印で、材は千早城の門扉の斷片とのことで、側面に箭鏃の痕があつた。鶯溪の一幅は實に文晁の好印譜となつた。ところが、是も實際は贋作であつたが、文晁が鶯溪の意氣を愛して、彼に花を持たせて歸したのだといふことである。

次の話は全然別種の風流談だ。

文化十二年正月、備中の菅茶山が、公用で江戸へ出て來て、日本橋を通ると、市人雜閙の中から一人の醉漢が突如として現はれ、茶山の前に立ち塞がつて

「先生は備中の菅太中ではないか」と云つた。

醉眼朦朧として、酒氣を吐きつゝ、斯う問ひ掛けられて流石の茶山も驚き、且つ怪しみ「いかにもそれがしは茶山ではあるが、足下は何人であるか」と反問すると、醉漢は手を拍つて

「嗚呼、果して然うだつた。吾輩の眼識は違はなかつた。僕は鵬齋と申す酒中の老仙で厶る。先生の大名は夙に熱聞して其の高風を欣慕すること久しいものです。今日偶〻旗亭に到つて一醉を買ひ、此處まで來ると、陌上紛塵の中に於て、先生の眉宇清秀、尋常人に非ざるを知りました。老生の友人、北條子讓が曾て先生の塾に寓して、時々先生の風丰を記して寄せられましたれば、是はてつきり茶山先生ならんと推測して、唐突の無禮を顧みず、試みに尊名を尋ねた次第です。僕が夢寐の間も先生の事を忘れざる心を諒として、無禮の罪はお宥しを願ひ度い」

と慇懃に挨拶をした。茶山も喜んだ。

「これは〳〵、鵬齋先生で厶いましたか。この稠人中に於て、未だ一面識もなき田舍者をお認め下され

たとは、實に奇なり妙なり。千里も隔てゝ肝膽相照すとは正に此の事でありませう」

と互ひに手を拍つて大笑ひして、直ちに手を携へて傍らの酒樓に登つて、歡を盡して別れたのであつた。此の事は間もなく都下の文人の間に評判になり、一大奇談として喧傳された。

そこで文晁は、二星日本橋邂逅の圖を作つて茶山に贈つた。鵬齋が其の上に詩を題した。

身是關東醉學生
公是西備茶山翁
日本橋上笑省見
共指天外芙蓉峰

都下聞傳爲奇事
便入寫山畫圖中

文晁の高弟立原杏所が歿したのは、天保十一年十一月で、杏所は五十六歳であつた。文晁は慟哭して「杏所は既に歿した。我が衣鉢を傳へる者は誰ぞ」と歎きかなしんだ。數日後、杏所の未亡人は辰子と呼ぶ十四歳の娘を伴れて墓詣りに行き、其の歸途に文晁の家へ寄つた。文晁は愀然として、故人を哀惜して已まなかつたが、辰子が白扇を持つてゐるのを見て、文晁は筆を執つて、其の扇へ二つの蝶を描いて與へた。其の時は既に文晁も甚だしく老衰してゐたが、筆端神に入り、翩々として飛びさうな蝶々であつた。

其の翌年文晁も歿したので、殆んど此の蝶の畫が絶筆に近かつた。

渡邊崋山

發奮

華山の幼名は虎之助と云つた。或る日、虎之助は病氣の父のために本町 迄藥を買ひに行つた。「いわしや」といふ大きな藥種問屋である。虎之助は、いつも此家へ藥を買ひに來る度び毎に感じることだが、廣い店いつぱいにある藥といふ物が非常に尊い物であつて、自分達には到底手の屆かない寶であるかのやうな氣持になる。あの強い藥の匂ひに包まれてゐると何んとなく神々しいやうな氣持にさへなつて、漠然と藥といふ物に對して憧憬の氣持を持たせられるのであつた。

「この店にある藥を自分が欲しいだけ持つて行くことが出來たなら、どんなに嬉しいことだらう……」

母が、父に飲ませる藥を買ふ金のために苦勞をしてゐることを知つてゐるからだつた。そして其の高價な藥を絶やさず父に飲ませたならば、父の病氣も屹度速く癒るのだが……と虎之助は及びも付かない事を考へて見たりした。やがて虎之助は藥の袋を小さな風呂敷に包んで大事に持つていわしやの門口を出た。大通へ出ると大層な人通りである。花見に行くのだと見えて、酒樽を持つたり、重詰を持つたりした連中が、揃ひの着物や揃ひの手拭で威勢よく歩いてゐる。田舍漢が幾人もつながつて可笑しげな恰好をして歩いてゐる。さういふものを見ると虎之助はもう藥のことは忘れてしまつた。藥のことを忘れ

ると同時に、父の病氣のことや、我家の貧しいことや、それから起きるいろんな不幸な氣持も消えて、今日の空のやうな晴れやかな氣持になつた。風が無くて暖かで、何んとも云へない好い日和である。虎之助は浮き浮きした氣持で日本橋の方へ歩いて行つた。

と、橋近くなつてから、向う側の橋の袂に人が黒山のやうに立つてゐるのが虎之助の眼にはひつた。群衆が輪を描いてゐる其の眞ん中で、一人の男が何やら高聲に喋つてゐる。見物人がどッと笑ふ聲が聞える。「辻講釋かそれとも齒拔きかしら」と虎之助は遠くから見てゐたが、餘り面白さうに見物人が笑つてゐるので自分も側へ行つて見たくなつた。彼は人通りの多い往來を斜めに横切つてそちらへ驅け出した。處が、忽ちどんと人にぶつかつた。餘り勢よく走つて行つてぶつかつたので、虎之助はすつてんころりと其の場へ倒れた。

「無禮者ッ」

と大喝一聲頭上から浴びせられた。虎之助は漸う起き上つて見ると、美々しい行裝を備へた大名の行列が橋を渡つて來る處で、自分が今突き當つた相手は其の先拂ひだつた。「これは大變な事をした」と虎之助は思つた。

「無禮者奴が、お供先を切るとは不屆千萬、これへ直れ」

「飛んだ粗相を致しました、平にお免し下さりませ」

「罷り成らん、場所もあらうに斯樣な大道でお行列を冒すとは、定めて故意であらう」

「どう仕りまして、全く粗相で御座ります、御慈悲を以てお免し下さりませ」

袴の股立ちを取つた武士が四五名で虎之助の周りをグルリと取り卷いた。其處ら中から彌次馬がゾロゾロやつて來てまた〻くまに其の周りを取り圍んでしまつた。大名の乘物は橋の中頃で止まつてゐた。

「備前樣のお行列だよ、それをあの小僧がお供先を切つたんだ」

彌次馬がガヤ〳〵とそんなことを言つてるので虎之助は初めて其の行列の主が備前の池田侯であることを知つたのだつた。何れにしても落度は自身にあるので謝るよりほかに道は無かつた。

「此奴、乞食のやうなむさくるしい身なりを致し居るが、見れば刀を差し居るから武士の子であらう。こりややい、其方は何れの家中だ、主人の名を申せ」

「何卒、其の儀は御勘弁下さりませ、重々お詫びを仕ります」

「主人の名を云へぬと云ふのか、それとも宿無しの素浪人か。やい小僧、本來なら一刀兩斷に斬つて捨つべき奴だが、今日は殿樣御佛參の途中なれば命ばかりは助けて遣はす、行けつ」

といふが否や一人の武士は足をあげて、大地へ手を突いて頭を下げてゐる虎之助の肩の邊りを丁と蹴

つた。虎之助は横さまに倒れた。續いて肩と云はず背中と云はず散々に打ちのめされたり蹴られたりした。武士達は面白半分虎之助を打擲した後で、意氣揚々としてお供先を揃へて歩き出した。さういふ事をしたことに依つて、自分達の主君の威勢を庶民共に知らせて遣つたといふやうな顔をして……。

行列は徐々と通つた。虎之助は散々打擲されたので直ぐには起ち上れなかつた。彼は依然として地上に倒れた儘行列を見送つてゐた。が、綺羅びやかな乘物が側へ來たので、虎之助は少し頭を上げてその乘物の中を見た。備前岡山の藩主池田内藏頭は當年十二歳であつた。少年の大名は乘物の戸を明けて往來の有樣を樂しさうに眺めて行くのだつた。頭髮から衣服まで泥にまみれて倒れてゐる自分と同じ年頃の哀れな少年の姿をも、内藏頭は輿の中から見たけれども、それは路傍の雜草が踏み躪られてゐるのを見た以上には、何んとも感じてゐないやうな顔をしてゐた。

立志

虎之助は、半藏門外の三州田原藩三宅家の邸内にある我家をさして戻つて來た。家では母のお繼が、藥買ひに遣つた悴虎之助の歸りが何時になく遲いので案じてゐる處へ、虎之助は戻つて來るには來たけれど、見れば打ちしほれて、其の上髮を亂し着物は泥まみれになつてゐるので駭いて「此の兒の常にも似合はない、何處ぞで喧嘩でもして來たと見える」と思つた。

「虎之助、まあ汝のその有樣は何事ぢや」と叱り付けた。

虎之助は母の顏を見たので今迄こらへてゐた涙が一度に堰を切つて迸り出て、母の足許へ泣き伏してしまつた。

「餘所で惡戲をして來て、大切な着物を代無しにされて、家へ來てまで泣く意氣地無しがあるか、何んといふ馬鹿な兒ぢや」

「否、え母樣左樣では御座いません」

虎之助は泣く〳〵今日の一伍一什を母に物語つた。虎之助は恁んな口惜しい思ひをしたことは生れて始めてゞある。自分は小祿ながらも武士の子として生れて來た。物心が附いてから何を一番最初に教へられたかと云へば、それは武士としての誇りを失ふなといふことであつた。武士の誇り――それを忘れたことはなかつた。處が、今日はどうだつた、其の大切な武士の誇りを滅茶々々に蹂躪されてしまつたのだ。まだそればかりではない、あの大道の眞中で草や石ころと同じやうに土足で踏み躪られた自分の體には、生きてゐる人間としての値打さへ見られないのであつた。何んといふ情ない事だらう。自分は其の日の生活にも困る貧しい武士の子である。そして相手は三十一萬石の大々名だ。生れながらに身分

は天地の相違がある。併し、自分も池田侯も同じ人間だ。しかも同じ位の年頃だつた。それだのに、かうまで甚だしい侮辱を受けなければならないといふのは何故だらう…虎之助はそんな事を考へ乍ら、家へ歸ることも忘れてあちこち歩いてゐたのだつた。

お繼は我が兒をふびんに思つた。可愛い我が兒が大勢の人の爲めに手籠めにあつて打ち打擲されてゐる有樣を考へると、自分の肉體を寸斷されるやうな苦痛を感じた。落度があるとは云ひ乍ら年端もいかぬ子供を捉へて餘りと云へば酷い仕方だと、彼女は火のやうな憤りを感じた。併し相手が大名では何んと云つて見た處で仕方がない。大名といふ大木に對しては、自分達は扇の風ほどの力さへ有つてゐないのだ……。

「汝がうつけ者ぢやによつて其のやうな目に遇うたのぢや、これに懲りて此の後はたしなんだがよい」と、彼女は涙を目に浮べながら我が兒を叱つた。

「母樣、私はお願ひが御座ります」

「何んぢや」

「私は學問がしたう御座ります、どうか父樣にお願ひして、明日から學問の先生の所へ遣つて頂きたう御座います」

「學問をしたいと云ふのはよいが、何んでまた、其の樣に急に學問がしたくなつたのぢや」

「母樣、私は今日途々考へました。わたくしは備前の殿樣に負けたことが殘念でなりません。どうかして、わたくしは大人になつたら備前の殿樣よりも傑い人間になりたう御座ります。それには學問をしなければなりません。學問をして日本一の學者になつたら備前の殿樣にも負けてゐなくてもよいだらうと存じます。母樣、どうか父樣にお願ひなされて下さいませ」

と虎之助は、何時の間にやら泪の跡も消えた眼に希望の光を耀かせながら言ふのであつた。

お繼は默つて我が兒の顏を見守つてゐた。彼女の胸には強い喜びがこみ上げてゐた。お繼は我が兒の行末を賴母しく思つた。それにつけても思ひ出されるのは虎之助の幼時の事だつた。

お繼の夫は三州田原三宅家の藩士で渡邊市郎兵衞と云つた。そして彼女は攝津高槻の城主永井大和守の家臣河村彥左衞門の娘であつた。彼女が渡邊家へ嫁して最初に生んだ兒が虎之助であつた。虎之助の生れた月日は寬政五年九月十六日。處が、虎之助は生後十日以上を經過しても眼を明かなかつた。

「此の兒は生れつきの盲目なのだらう」

と人々は云つた。お繼は、人からさう云はれる度びに心が暗くなつた。或る日も彼女は添へ乳をしながら眼を明かない我が兒の顏を眺めてゐるうちに悲しくなつて泪がハラ〳〵とこぼれた。

「お前はせつかく總領に生れて來たではないか、それにまあどうして眼さへ明かないのだ」

彼女は腹立たしくなつて、抱いてゐる幼な兒の背中を握り拳で「どん」と一つ擲つた。すると、幼兒はパチリと眼を明いた。

「まあ！　此の兒が眼を明きました！」お繼は驚喜の聲を上げた。

夫や姑も急いで側へやつて來た。幼な兒は人一倍凉しい眼をみひらいて、何か見えるかのやうにニコニコと笑つてゐた。それからは蟲氣も無く大きくなつて行つた。虎之助が二歳の時だつた。其の時分市郎兵衛夫妻は巣鴨のお下屋敷の方へ行つてゐた。或る日お繼は虎之助を抱いてお屋敷の門外へ出てそゞろ歩きをしてゐた。すると向うから一人の老僧が二三名の從僧を隨へて托鉢をして來た。見るとそれは當時名僧の聞えある根津の新幡隨院の和尚であつた。其の時お繼はふと、新幡隨院の和尚樣は人相を看ることに妙を得てゐるといふ評判を思ひ出したので、布施をして、

「此の兒は痘瘡はどうで御座いませうか」

と言つて尋ねて見た。

和尚は一寸見て、

「痘瘡か、痘瘡は輕いから心配することはない」

それから和尚は虎之助の顏を熟々と見て、

「よい兒ぢやな、此の兒は後來必ず名を成すだらう。大切にお育てなされよ……併し、憾しいことには最後に至つて不慮の災禍に罹る。天命を全うすることが出來ぬかも知れない」と言つた。

お繼は喜んで其の事を夫に話した。それ以來お繼は何んとなく我が兒の將來を頼母しく感じるのだつた。其の後次男の喜平次が生れ、三男の要之助が生れ、長女のお元が生れ――さういつた具合に段々子供が澤山になつて來たけれども、お繼の虎之助に對する先入的感情はいつまでも變らなかつた。生れて十日間眼を明かなかつた兒が、彼女の一喝に依つて忽ち眼を明いた事と、新幡隨院の和尚の豫言とが、虎之助の事を考へる度びに彼女の腦裡へまつ先きに浮んで來るのだつた。さは云へ虎之助は、親の慾目ばかりでなく、幼い時から普通の子供とは餘程異つてゐた。世間の子供のやうに惡戯もしなかつた。竹馬へ乘つたり凧を上げたりすることも好きではなかつた。大勢子供達が遊んでゐる場所へ行つても、きつと一人別者になつて、遠く離れて見てゐるのだつた。泣きもしないが、何か遣つても餘り喜ばなかつた。何處となく鷹揚でボーツとしてゐるので、子供仲間では「阿呆」だとか「鈍馬」だとか常に云はれてゐた。さう云へば餘り鷹揚過ぎて阿呆に近いやうな所もあつた。六つか七つの時だつたが、虎之助は祖母に伴れられて餘所へ行つた歸り途で、荷車に衝き當つて、避けようとする拍子に過つて路傍の溝の

中へ墜ち込んだ。しかし虎之助は泣きもせず、さうかと云つて自分で這ひ出さうともせず、たゞ默つて泥の中へ仰向きに倒れた儘大きな眼を見開いて、空を眺めてゐるのだつた。祖母は漸うのことで引き上げてやつた。それでも虎之助は平氣な顏をしてゐた。

「此の兒は何んといふ兒だらう」と祖母は家へ歸つてから呆れて話した。

虎之助は八歳の時から若君の御伽役に召し出された。毎日午前十時に御殿へ出て、正午に下り、午後の二時に再び御殿へ上つて、日暮れに下つて來る、それが日課である。虎之助は一日も缺勤したことはなかつた。雨風の日には屋敷内を簑笠を着て出勤した。何故かと云ふと、彼の家は非常に貧乏で傘を買つて貰ふことが出來なかつたから。

親達は、其の子に學問を仕込むといふことをおろそかに考へてゐたわけではなかつた。が貧しい生活には何事も餘裕がなかつた。其の上、市郎兵衞は、永の煩ひで大概床の上で暮してゐる有樣だつたので、一家の者は食をつめても猶且つ藥餌の代に追はれなければならなかつた。そんな風で、虎之助に學問をさせるといふことも今日までは等閑に附して來たのだつた。併し、お繼は今日といふ今日は、どんな苦勞をしても此の兒を立派な者に仕立てなければならないと思つた。彼女は直ぐ樣病床の夫に向つて其の事を相談した。市郎兵衞も無論贊成だつた。元來市郎兵衞自身も學問好きであつた。彼の家は元

元貧乏で餘財はなかつたが、學問をしたさに十五の年に故郷田原から江戸へ出て、三宅家の儒臣鷹見星皐の門人となつた。彼は日夜精勵刻苦して學業に沒頭したが、書籍を購ふ金がないので、四書五經から史記左傳などまですべて他人の本を借りて來て謄寫した。さうした苦學の效が現はれて彼の學業は大いに進んだので、若年にして拔擢されて主君對馬守康和の側用人に擧げられた。市郎兵衞は名は定通、字は叔澤、巴州又は半軒と號した。さういふ人であるから、市郎兵衞は我が兒の健氣な發奮を妻以上に喜び、其の翌日から虎之助を自分の恩師である鷹見星皐の許へ入門させることゝなつた。鷹見星皐名は定允、通稱三郎右衞門と云つた。

しかしお繼は、我が兒が入門の束修の金を算段するために、生みの母親の形見で、之ばかりは手放すまいと思つてゐた櫛笄を質に入れなければならなかつた。

貧苦

田原の藩主三宅對馬守は、南朝の忠臣備後三郎高德の後裔であつた。それほどの名門だが、祿高は一萬二千石の小藩で、帝鑑の間詰めの小大名であつた。一萬二千石の知行では家名を維持して天下の諸侯と交はつて行くことは骨が折れた。それが爲めに三宅家は多額の借財を背負つてゐた。で近年は其の利

息に追はれるので、自然家臣の者に支給する食祿も極り通りには拂へなくなつてゐた。渡邊市郎兵衛は十五人扶持から勸め上げて、現在では側用人で八十石の知行を貰つてゐるわけにはなつてゐたが、前に云ふやうな主家の財政なので、實際は其の半分位しか支給されてゐなかつた。其の僅かな收入では到底武士の體面を維持して行くことは出來なかつた。加ふるに市郎兵衛は全然理財の念の乏しい人物、而も近年子供は殖えるばかりなので、生活は年一年と苦しくなつて來た。すると一番最後に彼が病氣に罹つてしまつたので、窮迫は九天直下どん底まで墜ち込んだ。

虎之助が十四歳になつた時には弟妹が七人あつた。老祖母もまだ存命してゐた。市郎兵衛の病氣は金が掛るばかりでいつ恢復するといふ見込みも立たなかつた。家財道具は殘らず質に入れたり賣り拂つたりしてしまつたので、今では破れた疊建具の外には何も無かつた。着物もめい〳〵が着てゐる破れ衣が一枚宛だつた。三度の食事も事を缺き、空腹を抱へて過すやうなことも珍しくなかつた。お繼の苦勞は一と通りでなかつた。彼女はいつが日にも蒲團といふ物を着て寢たことはなかつた。いつでも破れ疊の上へごろ寢をした。冬は炬燵をこしらへて臥せつてゐた。虎之助は御殿の勸めから退つて來ると、父の看病をして按摩をするのが毎日の日課だつた。小さな弟や妹のお守もした。その間には星阜先生の塾へも通學した。虎之助の熱心と其の頭腦の明敏さは師の星阜も常に驚くほどだつた。

或時もお繼は、差し當つて若干かの金がなくては凌ぎが付かないので、自身の緣者で、山伏だがわりに裕福に暮してゐる、本所一ツ目に住んでゐる某といふ者の處へ金を借りに行つた。生憎、出がけになつて雪が降り出して來たが、延ばしてはゐられないので、末の兒を背負つて雪を冒して出て行つた。歸りは夜になるのだつた。虎之助は御殿から退つて來てから、母の歸る前に洗足の湯でも沸かして置かうと思つて竈の前で火をたき乍ら、其の明りで書物を讀んでゐた。がいつしか書物の方にばかり心を奪はれてゐるうちに、あたりがキナ臭いので氣が付いて見ると、薪の飛び火が着物の袖の上に來たのを知らずにゐたので何時の間にか三寸四方もある大きな燒け穴をこしらへてしまつた。それは一帳羅の御殿勤めの紋服だつた。虎之助は途方に暮れてしまつた。母が平常から着物の事は特別やかましく言ふことを知つてゐるので、恁んな粗相をしてしまつて母が歸つて來たらどんなに叱られるだらうと考へると氣が氣ではなかつた。其處へ母は歸つて來た。

お繼は、自分が早く歸つて來なければ、病人も年寄りも子供達も此の寒空に空き腹を抱へて夜食も食べずに居るだらうと思ふので、大雪の中を本所から足にまかせて急いで來た。途々背中の兒に泣かれるのが何よりもつらかつた。借金は度々の事なので不成功。それでも先方も此の雪の中を態々やつて來たのに滿更素手で歸すのも氣の毒だと思つたと見えて、歸り際になつてから「これで子供に菓子でも買つ

てやつて呉れ」と言つて南鐐一粒紙に捻つて呉れた。餘り快くはなかつたけれど、そんな事を云つて
る場合ではないので其の金を貰つて歸つて來た。
虎之助は母に向つて、
「母様、わたくしは大變な粗相を致しました」と叱られない先きに自分から言つた。
「何の粗相をしたのぢや」
「あの、只今お洗足のお湯を沸かしてゐて、怎んなにおべゝを燒いてしまひました」
と言つて虎之助は袖の燒穴を母の前に出して見せた。するとお繼は血相を變へて怒つた。
「此の子はまあ何んたる粗忽者ぢや。他に掛け替へのないお召に其の様な燒穴をこしらへてしまうて、
明日から御前へ出るには何を着て行くのぢや」
「申し譯御座りませぬ。これから氣を付けますから、御勘辨下さりませ」
「これから氣を付けたとて其の燒穴はもう直りやせぬわいの。汝は何んといふつけ者ぢや。これ、母
様はな、此の雪の中を本所までお金の融通を賴みに行つたのぢや。けれども本所のをぢ様も、度々の御
無心ゆゑ聞いては下さらず、たつた之丈のお鳥目を拜借して來たのぢや。此の母の苦勞も思はず安閑と
してゐるによつて其の様な粗相を仕出かすのぢや」

お繼は腹立ちまぎれに南鐐を疊の上に叩き付けて泪を流して叱るのだつた。虎之助も泣き出した。終
ひに母と子は、互ひに抱き合つて何んとも云へぬ悲哀にうたれて只泣くのだつた。
其の着物は、お繼が苦心慘憺して五寸四方もあるつぎを當て、虎之助は相變らずそれを着て御前を勤
めた。
これではどうにも仕方がない。怎んなことをしてゐれば遲からず一家の者は餓死しなければならなか
つた。其處で、或人が見るに見かねて、せめて家族の口を減らすやうにと、二男と三男を他家へ出して
はどうかと云つて市郎兵衞夫婦にすゝめた。夫婦の者も其の氣になつて、其の人の世話で、二男の喜平
次を板橋のある寺へ生涯不通の約束で呉れて遣ることになり、三男の要之助はまだ七歳だけれども、と
れも芝の青松寺へ小僧奉公に遣ることになつた。
喜平次が板橋の寺へ貰はれて行く日は、虎之助は媒介者と一緒に此の弟を板橋迄送つて行つた。矢
張り寒い日で、途中まで行くと雪がチラ〳〵降り出して來た。虎之助は弟の手を引いて歩いた。先方
の寺の名も聞かずに貰はれて行く約束だつたので、板橋の札の辻といふ處で、先方から來た迎ひの者に
引き渡すといふことになつてゐた。漸う約束の場所まで行くと、寺男か何かと見える鬼のやうな荒くれ
男が其處に待つてゐて、直ぐ様喜平次を虎之助の手から奪ひ取るやうにして向うへ伴れて行つてしまつ

た。雪はやまずチラ〳〵と降つてゐた。青物の荷を附けた馬が澤山通つてゐた。十歳になつたばかりの喜平次は、寒さうな恰好をして後ろを振り向き振り向き手を引かれて行つた。虎之助は弟の姿が見えなくなるまで同じ場所に石のやうになつて立つてゐた。さうしてゐる虎之助の兩眼からは、雪もとけるかと思ふ熱い涙が迸つた。

同じ家中で、御祐筆を勤めてゐる高橋文平といふ人があつた。高橋は渡邊とは特に昵懇にしてゐて、年は若いが極く親切な人物だつたので、渡邊家の窮狀を見るに忍びずよく色々の世話をしてくれるのだつた。此の高橋が或日もやつて來ていろんな談の後で親子の者に向つて言ふことには、

「時に、虎之助さんの問題だが、誠によく學問ができて末頼母しい息子だと云つて鷹見先生も大變賞めていらつしやる。だから普通なら此儘續いて學問をさせるに越したことはないが、併し考へて見ると、學問で金を取るまでには實に容易でない。到底修業が續きますまい。其處で私の考へだが、繪を習つたらどうかと思ふ。繪の方なら學問と違つて早く金が取れる。何の道だつて出世すれば同じ事だ。それも滿更繪心のない者では仕方がないが、幸ひ虎之助さんは繪が上手で、習はなくてもあれ位に畫けるのだから、本式に師匠に就いて二三年も修業をしたら、早い咄が燈籠の繪位は畫けるやうになるだらう。さうすれば、幾らか暮しの足しにもなつてよからうと私は思ふのだが」と頻りに繪を習ふことをすゝめるのだつた。

まつたく高橋が云ふ通り、虎之助は天成不思議な畫才を有つてゐた。幼い時からよく獨りで繪を描いてゐたが、其の繪は大人が見ても駭く程うまかつた。六歳か七歳の時だつたが、恁んな事があつた。或日市郎兵衛の不在中に來客があつた。其の時取次に出た下僕の者が、主人が歸宅してから、それを報告したはいゝが、來客の名前をハタと失念してしまつた。

「名前を忘れては、どなたが見えられたのか薩張り分らんではないか」

「へえ……」

下僕が汗を出して弱つてゐると、側にゐた虎之助は何んと思つたか向うへ走つて行つたが、やがて反古の端へ人の顏を描いて來て

「父樣、今日來たお客樣はかういふ人でございました」と云つて父に見せた。

市郎兵衛は一見して驚いた。それは懇意な或る旗本の隱居の顏であつた。幼い筆つきだけれども、一見其の人であることが判るのであつた。下僕もそれを見て呆れながら「確かに此のお方に相違御座いません」と言つた。それでも念のために書面を遣つて問ひ合せて見ると、矢つ張り其の人だつた。

「此の子は繪師にしたらいゝだらう」

白川芝山

と以前からさう云つて見たことも度び度びあつた。が、市郎兵衛にしても、お繼にしてもまだ本氣にさう考へて見たことはなかつた。矢張り世間の親のやうに、子供が繪など描いてると叱る位のものだつた。併し、今高橋にかう云はれて見ると「成る程それもさうだ」といふ氣になつた。本人の虎之助は、折角今迄親しんで來た書物と別れることは辛かつたが、同時に繪を習ふといふことにも強く心を牽かれた。家内の相談がきまつて、鷹見星皐の處へ相談に行くと、星皐もそれに賛成して、虎之助の師匠として、白川芝山といふ畫家を紹介してくれた。芝山は芝に住んで、南蘋風の畫を描いて、相當に門戸を張つてゐた。

日本一の學者にならうといふ虎之助の空想は斯うして破れてしまつたが、其の代りに彼は芝山の許へ入門することが出來た。それは虎之助が十六歳の時だつた。

貧しいので束脩も人並みには納められなかつた。入門の日に虎之助は、母から紙代として十六文もらつた。

世路

其の年虎之助は元服して、藩主康友の命名で、登と改名した。同時に藩侯の近習に擧げられて少しの俸米を給されるやうになつた。が、父の病氣が十年一日の如くであるので、そんな事では窮迫は救はれなかつた。登は勤めの餘暇を利用して一生懸命繪を習つた。畫を習つてそれで大名をあげたいと考へるよりも、一日も早く繪で錢を取るやうになつて家の暮しを助けたい――さういふ氣持で繪を習つた。

師匠の芝山は餘り親切に教へて呉れなかつた。が、登は最初は、「繪の先生といふものはかういふものかも知れない」と思つてゐた。さうかと思ふと他の弟子に對しては、隨分親切に教へてゐるやうであつた。登が繪を直して貰はうと思つて持つて行つても、何時迄も玄關の側へ打つちやつて置かれて、師匠は容易に見て呉れなかつた。漸う見て呉れたと思ふと、「まあいゝだらう」くらゐで碌に直しては呉れなかつた。登が自分の方から不審の點に就いて何か質問して見ても「そんな事は獨りで解つて來る」と云つて師匠は直ぐに蒼蠅ささうな顏をした。それは師匠に對して碌々謝儀をしないので、それで師匠が氣に入らないのだといふことが虎之助にも追ひ〳〵分つて來た。登は辛かつた。併し、紙を買ふにも困つてゐる身分ではどう思つても仕方がなかつた。彼は只自分の熱心に依つて師匠の見出しに預るよりほかはないと考へた。で、彼は益々精出して繪を描いては持つて行つた。さうして一年位通つた。

年末だつた。例に依つて登が繪を持つて師匠の家へ行くと相弟子で塾頭のやうなことをしてゐる男が登を物蔭へ呼んで、氣の毒さうな顏をして、

「實は先生から僕までお話があつたので傳へるのだが、誠にお氣の毒だが、何か御都合があつて、君だけは教授を斷るといふお話だから、どうかさう思つて貰ひたい」と言ひ渡された。

登は吃驚して、自分で師匠に會つて事情を語つて嘆願して見たけれども、芝山は承け入れなかつた。芝山は何處迄も冷淡だつた。

「お前の方にも事情はあるだらうが、私も大勢弟子があつて忙しい體だ。弟子としての禮を盡さぬ者の面倒までは見て居られない」と露骨に言ひ出した。

登はスゴ〳〵師匠の前を退つて我家へ歸つた。彼は暗澹とした氣持になつてしまつた。十二の年に日本橋で恥辱を受けた時には、悲しかつたけれど、反つてそれが爲めに發憤の勇氣も出て來たのだつた。併し今日の氣持はあの時とは大分異つてゐる。最後のたつた一つの燈火が消えてしまつたやうな、前途の望みのない氣持であつた。幼少の時から貧しい家庭に育てられて貧苦の味はつぶさに嘗めて來てゐるが、今日程貧の辛さをしみ〴〵と經驗することはないのだつた。

登は悲觀し切つて我家へ歸つて來て、隱してはゐられないから、病床の父に向つて一伍一什を話した。すると市郎兵衛は案外駭かなかつた。

「さうか——已むを得ない事だ。先方の御都合とあれば仕方がない。それしきの事でしよげては駄目だぞ。君子は固より窮するのが常だ。恥でも何んでもない、只自分の不運だと斷念するよりほかはない」

折よく高橋文平が來たので其の事を話すと、文平も駭いて、憤慨したけれども仕方がなかつた。市郎兵衛は何か考へてゐたが、やがて、

「金子金陵といふ畫家がある。此の人は大森勇三郎殿の御家來だが、矢張り南蘋風の畫を描いて高名の人だ。わしもずつと以前のことだが詩會などで二三回會つたことがある。多分先方でも覺えてゐるだらうと思ふが……此の先生にわしが手紙を書いて賴んで見ることにしよう。高橋君、尊公、わしの代理に伴れて行つて下さらぬか」

「承知致しました。金子金陵を御存じとあれば好都合です。金陵先生は芝山などより遙かに大家です」

「いや、今も云ふ通り二三回の交際だから、果して承知して呉れるかどうか分らないが、其處は一つ尊公の辯舌でよく賴んで頂きたい」

市郎兵衛は直ぐに書面を認めた。高橋は登を同道して金子金陵を訪問した。金陵に會つて手紙を渡した上になほ事情を話して賴むと、金陵は一も二もなく承知して呉れた。

「巴州君の御子息に恁んな立派なのがあることは存じなかつた。いや畫の事は、吾等とても人の師たる器量はないが、多年研究して居るから御相談相手になりませう。弟子師匠の禮儀などは改まつてなさら

ずとも、自由に遊びにおいでなされ。芝山は繪を描くことが商賣でござるから、束脩や月謝を受けなければ困るであらうが、吾等は殿樣から御扶持を戴いて居るから食ふことには困らない。左樣な心配は御無用御無用」

其の日から登は金陵の處へ通ふやうになつた。金陵は心からの親切で、登を指導して呉れるのであつた。登の天賦の畫才はメキ〳〵と伸びていつた。一二年經つと彼は繪を描いて多少の收入を得るまでになつた。それは主に燈籠、團扇、紙鳶などの繪だつた。畫料の相場は百枚描いて一貫文位だつたが、それでも大きに生活の足しになつた。經學の師鷹見星皐は登の爲めに『華山』といふ號を選んで呉れた。其の星皐も華山が十九歳の時病歿した。星皐の歿後は、彼は碩儒佐藤一齋の門に入つて、益々研學の志を滿した。

文化十一年、華山は二十二歳の正月、お納戸役を命ぜられた。彼の體は非常に忙がしくなつたけれども、公務の餘暇は寸刻の時間も惜んで繪畫の研究に費した。其の頃は繪畫の友人も澤山出來てきた。其の年華山は畫友達と圖つて『繪事甲乙會』といふ物を起した。各自が作品を持ち寄つて批評し合つたり、意見の交換をしたりして、相互の進歩をうながすのが、會の目的であつた。其の會約を華山が起草した。

間もなく、華山の華を皐と改めた。

父の市郎兵衞も病氣が餘程快くなつて出仕が出來る樣になつて、文政元年の正月には家老職に擧げられ、知行も百石四人扶持に上つた。華山の名前も少しづゝ人に知られて來て畫の依賴が多少はあるやうになつたので、初めて渡邊家の暮し向きも樂になりかけたと思ふと、今度は登が大病に罹つて久しい間床についてしまつた。

文化十二年には恩師金子金陵が歿した。其の翌年には、子供の時から世話になつた恩人高橋文平の訃に遭つた。華山は一時茫然としてしまつて仕事も手につかなかつた。彼は金陵の歿後は最早師をとらずに、亡師の遺した粉本や何かを賴りにして研究を續けてゐた。

同門の友に椿椿山があつた。椿山は享和元年の生れで、華山に比べると九つ歳下だつた。椿山名は仲太と云ひ、小身の旗本の子として生れたが、七歳の時父を亡ひ、其の後母の手一つで養育せられたのだつた。仲太は一人の母に仕へて非常に孝行であつた。親孝行の故にお上から褒美を貰つたことも度び度びあつた。彼は親の云ひ付けならばいかなる事でも背かなかつた。外出する時母が「今日は降るかも知れないから雨傘を持つて行くがいゝ」と云へば、どんな上天氣になつても正直に傘を持つて歩いた。また反對に母が外出して少し歸宅が遲れでもすると非常に心配して食事も喉へ通らなかつた。椿山の

家の隣りに西村といふ酒屋があつた。其の家の主は椿山の親孝行にほと〳〵感心し、或る時椿山に向つて、

「私は明き盲であなたの繪のよしあしはわからないが、あなたの孝行には感心しましたから一つ畫いて下さい」

と言つた。椿山は感激して『名花十友圖』を作つて西村に贈つた。

椿山は、師の金陵が歿したので、いまは崋山の外には師とすべき人はないと云つて、崋山の敎へを受けた。

崋山は、納戸役の外に刀番兼務を命ぜられたので、藩主が外出する時は供頭として扈從した。彼は忠勤無類だつたので、非常に君侯の寵愛を蒙つてゐた。併し、當時の家中の風習は甚だしく頽廢してゐた。上役は賄賂を取り、藩の財政は益々亂れて、藩士は遊所へ出入したり、或は權門勢家に媚びて、書畫骨董の周旋をしたりなどして些かも恥としない有樣。遂には家中で三絃の研究會さへ起される程だつた。藩主康和は忠直な崋山等を信任してゐると同時に、一方ではさういふ軟派の家臣をも寵愛し、自身も遊藝を習つたりする始末であつた。崋山は心中不平でたまらなかつた。或年の正月元日の諸士集會の席上で崋山は、藩政刷新の必要を大いに說いたけれども、誰一人耳を傾けてくれる者はなかつた。

見よや春大地も享す地蟲さへ

それは崋山が其の頃吐いた句だ。彼の意見は少しも用ひられなかつた。崋山の不平は抑へることが出來なかつた。彼は一度は家を末弟に讓つて長崎に出奔しようと決心した程であつたが、父の諫めに逢つて詮方なく思ひ止まつた。

莫レ嗤鷦鷯翔試ニ鵬雲一　決起槍榆初見レ分
游子固知風木嘆　花鳥月夕何忘レ君

それは、崋山が出奔しようとした刹那の感懷であつた。

後年になつて崋山は宿望を遂げて長崎へ行つたやうである。但し崋山の長崎行については從來種々異說があつて確かなことは分らないが、次のやうな崋山の手紙が何處かにあるさうである。

「鹿兒島に暫時滯在、是より阿蘭と申す處へ赴き二ケ月餘りを逗留し是より長崎へ渡海し、海門崎と申す所へ行き、爰に瀨門隼人と申す名醫有り、該家に滯在中、椿山靄崖兩氏に面會し、兩工と共に爰を出發して阿久根と申す所へ行き、此處に勝浦神社と申す大社あり、神官の服部貢と申すものゝ依賴により內神天井に大井三船の圖を合作し椿山靄崖は大隅國菱刈へ渡海し直接中國筋へ出でて江戸表へ旅行——云々」

同樣の手紙が二通もあるとのことで研究家の間で疑問視されてゐるのであるが、併し斯樣な手紙を僞作するといふ譯もないから、假りに本物の寫しであるとしても、元は崋山から出たものと見るべきだ。不平の餘り長崎へ出奔したといふ譯でなく、蘭學及び洋畫に深く思ひを寄せた崋山としては一度は長崎を見ずにゐる譯はない。崋山ならずとも當時の新智識を求めた者は皆長崎へ行つたのであるから烈々たる大志に燃える崋山として此の事あるは當然としなくてはならない。只公然藩の許可を得て旅行したのでなかつたゝめに、名文家の崋山にして旅行記等を殘さなかつたのであらうと想像するより外はない。

右の手紙によると廣く九州を旅行したらしい。是もありさうなことである。長崎で椿山、靄崖兩工と邂逅したのは打ち合せてあつたことだらう。それにしても、崋、椿、靄の三名家が長崎で落ち合つた場面を想像するだに頗る壯觀である。

崋山と文晁

文政元年正月十六日、崋山は初めて文晁を訪問した。文晁は其の日も例に依つて、有名な寫山樓の畫室に客を延いて、朝から酒びたり、來客や門人を相手に虹のやうな氣を吐いてゐた。其處へ崋山が名刺を通じると、文晁は何んと思つたか、

「崋山先生が見えられた」

と左右を顧みて言つて弟子達に命じて盃盤を取り片付けさせ、威容を改めて崋山を引見した。人々は不思議に思つた。大概の人が來ても文晁は無造作に席へ通して「先づ一獻召し上れ」と持ち合せの盃を突き付けると云つた調子であるのに、かう改まつて引見する崋山といふ人は一體何者なのかしらと思つた。

崋山が初對面の挨拶をすると、文晁も禮儀正しくそれに應へて、

「御高名はかねて承はつて居ります、ようこそお訪ね下された」

と慇懃にもてなし、酒盃をあらため、

「先生、初めての御入來である。何はなくとも先づ一獻召し上つて下さい」

「いえ、私は……」と崋山が言ひ掛けると、

「兎も角もお受け下され。一代に名を成さうとする者が、酒でひけを取るやうでは駄目です」

崋山も快く盃を受けて數行を重ねた。文晁は陶然として、

「時に崋山先生、本日は畫本をお持ちではないか。お持ちならば拜見をする」

崋山は喜んで、

「誠に未熟の畫で、お目に掛けるも恐れ多いことでございますが、お言葉に甘えて恥をさらします。何卒御批評を賜りたう存じます」

彼は持つて來た自作の畫を數枚取り出して其の場へ展げた。すると文晁は熟々ながめて、

「實に佳く描けました。山水と云ひ人物と云ひ申し分のない出來です。文晁ほと〳〵感服致した。コレコレ、お前達も玆へ來て崋山先生の御作を拜見するがいゝ」

と弟子達を顧みて言つた。崋山は恐縮して、

「先生、其の樣なお言葉では反つて心苦しう御座います。私は元來貧家に育ちましたので、せめて燈籠の繪でも描いて家計を助けたいと思つて畫を習ひ始めましたのです。それが金子金陵先生の御指導に依つて今日では幾らか繪筆の持ち方をおぼえましたが、金子先生がお亡くなりになつた後は、暗夜に燈火を失つたも同然で何んの賴る物も御座いません。で、ぶしつけで誠に失禮とは存じましたが、先生の御教導に預りたいと存じまして本日は推參致した次第で御座います。何卒今日から門下の列にお加へ下さいまして、御教授を戴きたく、ひたすらお願ひ仕ります」と赤心を面に表はして言つた。

「いや〳〵、私は貴下を敎へる資格はない。併し、さういふお話であれば、折り〳〵御相談相手位にはなりませう。此の畫を拜見した處では、人物の方は十分御修業が積んでゐる。殊に意匠が優れてゐて、

其の點では私も遠く及ばない。が、山水の方はいま一段工夫の必要があらうかと考へる。――處で貴下に一つ良い師をお世話しよう」

恁う言つて、文晁は起ちあがつて、戸棚の中から一部の畫帖を取り出して來て、それを崋山の前へ出した。

「是はお聞き及びであらうが、私が、さる殿樣から拜領した珍品、淸人顧方樂の西廂圖でござる。御存じかは知らぬが、顧氏は名は愷、字は方樂、乾隆年中の人で、人物山水は仇英、唐伯虎などを則つてゐる誠に以て師とするに足りる畫人です。私も之に依つてどれ程利益を得たか知れない。是は門外不出の品ではあるが、貴下の運筆に感服致したから暫くお預けして置く。よく此の師にお尋ねなされたら、やがて大いに御發明になる處があるでせう」

文晁の家に顧方樂の西廂圖があつて、天下の珍とすべき物であるといふ事は隱れもないことだつたから、崋山も豫々其の話を聞いてゐた。然るに今初對面の自分、しかも一介の貧書生に過ぎない自分に對して文晁が此の親切を示して呉れるのである。崋山は感激しないではゐられなかつた。彼は畫帖を押し戴いて、それを借りて其の日は歸つた。

それから其の西廂圖を丹念に寫し取つて原本と摸寫と双つを携へて文晁の處へ行くと、文晁は兩方を

宮本二天

見比べ「實によく畫けました。顧方樂の原圖より貴所の摸寫の方が勝れてゐる。希くは此の摸寫の方を私が頂戴したい。原圖はお返しに及ばん」と云つた。崋山は其の意外に驚いたが、文晁の好意に心から肝肺したのであつた。彼は其の後も度び〳〵文晁の所へ畫を持つて行つて觀て貰つた。文晁は崋山に客分としての待遇を與へた。

崋山は其の年二十六歳だつた。新進畫家として、彼が多少江戸で認められて來たのも其の頃からだつた。それには文晁の後援が大いに與つて力があつたことは勿論だが、其の時分から崋山はさかんに諸派の畫を研究した。土佐や狩野をも獨學で研究した。其の時分のこと、或日麴町の骨董屋で宮本二天の畫を見て、價を尋ねると高くて到底貧乏人の手の出る品ではなかつたが、彼は欲しくて堪らぬので、百方金策に奔走して到頭それを手に入れた、など〳〵いふこともあつた。

風俗畫といふ物に就いて崋山は日頃から考へてゐた。畫家が、古への偉人の圖や歴史畫を描くことは勿論よいことであるが、同時に我々が日常見聞してゐるところの市井の風俗を描くことも肝要なことである。そして其の時代々々の風俗を後世に傳へることは寧ろ畫家の任務であると思はれる。然るに今世間では風俗畫と云へば直ぐさま市井の俗畫のやうに思つてゐる。描く者にもまたそれだけの見識が無い。是はどちらも誤つた考へである、と崋山は考へてゐた。そこで彼はほんたうの見識を以て風俗畫を描いて見ようと決心した。彼の計畫は其の年の冬上梓された『一掃百態』となつて現はれた。

文政三年の春、崋山は日本橋浮世小路百川樓で初めて書畫會を開いた。其の會へは文晁を初めとして有名な文人墨客は悉く出席して幇助してくれたので、來會者が非常に多く、近來にない盛會だといふ評判だつた。

翌文政四年六月、崋山は公用で相州に迄行つた。其の序でに江ノ島鎌倉の名所を見物して歸つた。そして彼は『使相錄』といふ紀行文を書いた。

或日崋山が窓際で机に向つて書見をしてゐると、窓の下へ七八つ位の男の兒が來て「小父さん何かおもしろいもの」と言つた。見るとボロ着物は着てゐるけれども普通の乞食の兒とも違ふやうなので、崋山は一寸不思議に思つて、

「小僧、お前は獨りか」と言ふと、

「うゝん、父が一しよなんだ」と小僧は答へた。

崋山が向うを見ると小僧の親らしい男が立つてゐた。まだ齡は働き盛りと見えるのに、病み上りか何かのやうに見るかげもなく窶れて、杖に縋つて立つてゐた。

「これ〳〵、一寸此處へ來い」と崋山が呼ぶと、男はおづ〳〵そばへ遣つて來て、ぺコ〳〵頭を下げな

から、

「これは若旦那様で御座いましたか、こんな處へ參つて申し譯は御座いません」

「何もあやまる事はない。時に、貴様は何んだか見たやうな顏だが、何處の者だ」

「へえ…私は平吉と申しまして、四谷の荒木町に住んで居ります魚屋で御座いますが、お屋敷うちへも時々商ひに參りましたので、私の方ではよく存じて居ります」

「道理で見覺えがあると思つた。して魚屋でありながら、なんでまた乞食などして歩くのだ」

「誠にお恥しい事で御座いますが、實はわたくしの女房が三年越しの永病ひの揚句に半年ばかり前に死んでしまひました。すると其のあとで今度は私が大病を致しまして、漸う此の頃全快は致しましたが、其のために商賣の元手も何もなくしてしまひ、差し當り食ふに困りまする處から、こんなざまをして人様のお情にすがつて歩きますやうなわけで御座います」

「左様か、それは氣の毒な事だ。併し、幾ら困つたと云つても乞食をしては不可んな、一寸待つて居れ」畢山は机の抽斗から貫つたばかりの畫料の包みを取り出して「是を貴様に遣す。幾許はひつてゐるかまだ改めては見ぬが、小魚を仕入れて商賣を始める位の元手はあるだらう。持つて行くがよい」

「いえ若旦那、そんな大金を戴いては濟みません」

「よいから持つて行け」

「左様で御座いますか。それではお言葉に甘えて頂戴致しますで御座います。此の御恩は生涯忘れは致しませぬ」

魚屋は涙を流して喜んで小供をつれて歸つて行つた。それから十日ばかり經つと其の魚屋が石首魚を十四ばかり持つて禮にやつて來た。

「商賣を始めたのか」

「へえ、お蔭様で、先日若旦那様から戴いたお金で、道具を調へ、魚も仕入れて、毎日商賣に出て居ります。本日は御近所迄參りましたので一寸お禮に上りました。此の石首魚は新らしいことはお引受け致しますから、どうか召し上つて戴きたう存じます」

「左様か、それはよく來てくれた、私も喜ばしい。成る程、石首魚ぢやな。是は父上が好物だから定めてお喜びになるだらう」

それから畢山は若干の錢を持つて來て、

「平吉、是は魚の代金ぢや」

「旦那様、それぢや何んにもなりませぬ。是はほんのお禮の心持で持つて參りましたので」

「それは分つてゐる、其方の心持は已れも嬉しく受けたのだ。併し、自分よりも貧しい者から物を只貰ふといふ法はないから、禮だけは受けるが、魚の代は持つて行け」

と言つて崋山は無理に平吉に錢ををさめさせた。平吉は追ひ〳〵仕出して以前通りの立派な魚屋になつた。

新知識

文政六年の春、崋山は、同藩の士和田傳の女たか子を妻に迎へた。崋山は三十一、たか子は十七歳だつた。

崋山の畫名は漸く騷がしくなつて來たけれども、家計は依然として困難だつた。其の前年田原の領分は旱魃の爲めに非常な凶作に遇つた。其の結果はたゞさへ窮乏を告げてゐる藩の財政は益々困難に陷つて、一藩の者が極度の儉約を勵行しなければならなくなつた。渡邊家では、家長の市郎兵衞が一時は病氣も快くなり、出仕をして家老職にまで擧げられたのだつたが、その時分から又もや病氣が再發して以前にも增して重態に陷つた。親孝行の崋山は、病苦に惱む父を見捨てゝ毎日出勤するのが何よりも辛かつた。餘命幾許もない父の枕邊に附き添うて朝夕看病をしたいと思つて再三致仕を願つたけれども許されなかつた。折も折、お繼の里方の父河村彥左衞門が仔細あつて主家を浪人して、多數の家族を伴れて渡邊家へ居候にやつて來た。只さへ貧乏な處へ此の有樣で益々火の車になつた。併し今では崋山の繪が賣れるのでそれだけが唯一の力綱である。崋山は、勤務と看病の餘暇の僅かの時間を利用しては一生懸命に畫作をした。彼の勉强は駭くべきものだつた。彼は日省課目を制めて毎日それを勵行した。午前四時に起きて讀書をした。彼はいつも一冊の手帖を懷ろに入れてゐて、役所へ行つても手放したことはなかつた。道を歩きながらでも、駕籠へ乘つてゐる時でも、耳目に觸れる物があれば直ぐに寫して置いた。記事も繪もごちやまぜだつた。此の習慣は晩年迄繼續して、帖面が丈の高さ程に溜まつた。學問畫事のほかに武士の表藝であるところの武術の修業は勿論おろそかにはしなかつた。清水俊藏、沼田業太夫等の當時有名の劍客とも親しく往來してゐた。其の頃崋山が親しく交際してゐた人々は、文晁、市川米庵、江川坦庵、立原杏所などをはじめとして、佐藤一齋、本多思齋、屋代臨池、北靜廬、瀧澤馬琴などが主なるものだつた。故人の中では熊澤蕃山に最も深く私淑してゐた。

文政七年藩主對馬守康和が歿して、其の年の七月、弟橘三郎が家督を相續した。三宅家では同列の諸侯を招待して、饗宴を開いた。其の折崋山は賓客達の懇望に依つて席上揮毫をして興を助け、一座諸侯の觀賞を蒙つた。

市川米庵
江川坦庵
立原杏所
佐藤一齋
本多思齋
屋代臨池
北靜廬
瀧澤馬琴

其の頃から崋山の畫風は大いに變化した。それには西洋畫の影響が最も與つて力があつた。彼は洋畫の陰陽遠近色彩の方法を觀て大いに悟る所があつて、それを自身の畫に應用して一新機軸を出した。彼は特に肖像畫を描くことに妙を得て、諸方から其の依頼を受けた。其の頃製作した物の中では佐藤一齋と市川米庵の肖像が最も優れてゐた。米庵の肖像を依頼された時、崋山は日々米庵の入谷の宅迄通つて行つて、數日丹精を凝らして描き上げた。米庵は大いに喜んで、潤筆料を贈らうとした處が崋山は固辭して受けなかつた。

「それでは困る。僕は書を揮毫して人から潤筆料を取つてゐる。貴下は畫家だから、畫を描いて畫料を取るのは不思議はないではないか」

「成る程、拙者は生活を補ふ爲めに畫を賣つて居る。併し拙者は知己の爲めに畫を描いて潤筆料を貰ふ氣はどざらん。此の儀は平にお斷り申す」

「それにしても幾日も働かせて只といふ理窟はない。ではかうして下さい。金を差し上げるのは止める代りに、僕が持つてゐる物で何でも貴下のお氣に入つた物があつたらそれを差し上げよう。どうか御遠慮なくお望み下さい」

すると崋山は暫く考へてゐたが、

「それならば改めてお願ひ申す事があります。他でもないが先生が御珍藏の鄭澹泉の畫帖、是とそ拙者が年來渇望してゐる處の物です。若し是を割愛して下さるならば、拙者に取つてこれ以上の幸福はありません」

「お安い事です。實はあの畫帖は、久しく僕の手許に留め置いても用を爲さないから、誰かに進呈しようと思つてゐた處です。あれが貴下のお益に立てば私としても滿足此の上なしです」

米庵は直ぐ樣畫帖を取り出して贈つた。崋山は喜んで持つて歸つたが、それから毎日客がある毎に其の畫帖を出しては見せて、

「米庵先生の好意で此の樣な寶物が手に入つた」と云つて喜んでゐた。

崋山の西洋畫熱は頗る强かつた。洋畫に關する物は斷冊片紙と雖も金を惜まず買ひ集めた。當時洋畫を手に入れることは非常に困難だつた。長崎通詞の幡崎鼎といふ人などを頼んで求めたのだが、多くは銅版畫の類だつた。後に石版畫が舶來したのを手に入れてから益々西洋畫に心醉して、牡丹花を描いて、其の花瓣が日光を受ける所に丹色を施し、全然洋畫の暈影法を試みたりした。彼は又油繪も描いて見た。油繪で富士山を描いたりしたこともあつたが、何分彩料や筆具が備らないので是は半途で廢めてしまつた。

佐藤信淵
高野長英
尾關三英
畠井善良
鈴木春山

洋畫の研究が動機となつて崋山は次第に蘭學に興味を持ち始めた。三宅藩に鈴木春山といふ蘭醫があつた。崋山は春山に依つて初めて蘭學の端緒を開いたのだつたが、次第に當時の蘭學者と廣く交際を始めて新知識を得たのだつた。併し崋山は原書は僅かしか讀む力がなかつたので、多くは他の蘭學者に飜譯させて、それを更に彼が解釋祖述するのが常だつた。思索と洞察の力に富んでゐる崋山は、原語には通じなくても、洋學の特徴、西洋の事情、世界の大勢等に通じてゐる點に於ては他の蘭學者達の遠く及ぶ所でなくなつた。當時の蘭學者に二つの派があつた。泰西の新知識を消化して廣く世務の上に應用しようとする者と、專ら阿蘭陀語の醫書のみを研究して他に及ばない者とがあつた。前者を山の手派と云ひ、後者を下町派と云つた。山の手派には、佐藤信淵、高野長英、尾關三英、畠井善良、鈴木春山等が居て是に崋山が加はつてゐた。下町派は、伊東玄朴、坪井信道、戸塚靜海、杉田玄卿等が巨擘だつた。崋山は親しく蘭人に就いて正則に研究したいと思つてもそれは自分の境遇が許さないので、三英、春山、長英等に、天文、地理、歴史、政事、兵術等に關する書籍を飜譯させて、それを聞いては書き、書いては聞きして祖述した。崋山の解釋が餘りに透徹明敏なので三人は常に驚嘆してゐた。後には崋山も餘程原書を讀むやうになつて、佛蘭西で出た『ポーランド滅亡史』のごときは、悉皆謄寫してしまつた。

遊魚圖　渡辺華山筆

崋山は隱然山の手派の首領と目されてゐた。彼は長英等と謀つて尙齒會といふものを設けた。紀藩の遠藤勝助、水藩の立原任太郎等の名士が續々加盟して來た。崋山が推され會長となつた。尙齒會の表面の趣旨は、泰西の地理歷史を研究することにあつたけれども、事實會合の席で重大な問題となるのは、海防の事や幕府の政治向きの事柄が多かつた。世間では此の會の事を尙齒會と云はずに、蠻社と呼んでゐた。

文政七年九月、父の市郎兵衞は病が俄に革つてつひに永眠した。崋山の悲嘆は言はう樣もなかつた。彼は自分で紙筆を執り、遺骸に對ひ、泪ながらに父の遺像を寫したのだつた。そして師佐藤一齋の著した葬祭篇に法つて、嚴に儒家の葬禮を行ひ菩提寺の小石川善雄寺へ葬つた。其の後彼は自身寫した父の像を居室の內に飾つて、粗末な淺黃木綿の喪服を着けて、用のない時は常に端座してゐた。

除服後父の遺祿を繼承して家督を相續した。父の歿後は、母に對する孝養を何よりも大切にした。若い時から永い年月苦勞をし續けて來た母に對して、せめて老後だけでも、安樂に過ごさせてやりたいといふのが崋山の唯一の願ひだつた。お繼は勝氣で怒りつぽい女だつた。崋山は日々出勤しようとする矢先きでも、母の顏色がふだんとちがつてゐるのを見ると、袴を着けたまゝ默つて坐つてゐて動かなかつた。

「登は何故お勤めには行かないのか」と母が尋ねると、

「母上の御機嫌が麗しくならぬ間は、登は外出するわけには參りません」

と崋山は答へるのだつた。そして母が笑ひ顏を見せると、初めて安心して出勤するのだつた。

文政九年、崋山は取次役を命ぜられた。其の頃藩主は一ツ橋の御門を預つてゐたので、崋山は更に番頭を命ぜられた。公務が頗る多忙だつたにも係らず、彼は其の頃から麻布の松崎慊堂の塾に出入して、頻りに儒學の研究をした。

厚木行

田原藩主三宅備後守康明には男の子がなかつた。然るに、近年重病で再び起つ見込みがなくなつたので、當然繼嗣の問題が起きて來た。康明には一人の弟があつて友信と云つた。だから無論友信を準養子として、三宅家を繼がせるのが當然の順序だつた。處が重役の間には、友信が多病であるといふ理由で、他家から繼嗣を迎へようとする意見を持つてゐる者があつた。其の事が表沙汰になつたので、崋山は默してはゐられなかつた。

「三宅氏は假令一萬二千石の小藩とは云へ、南朝の忠臣備後三郎高德の後裔である。然るに今口實を設けて、名譽ある血統を斷絶せしむるのは、臣として君に忠なる所以でない。當然鋼藏君（友信）を準養子に立てまゐらすべきである」

といふのが崋山を初め正論派の唱へる議論だつた。崋山は同志を募つて連名で一篇の意見書を老臣の手許へ差し出したが、其の裏面にはいろんな事情が纏綿してゐるので、容易に決定しなかつた。文政十年の春友信は田原へ赴いた。崋山は隨行して數十日留まつてゐた。其の間に彼は百方盡力して老臣の意見を聽へさせようと努めたが效がなかつた。最後の評定の席で、他家から養子を迎へようといふ意見を有つてゐる者が大多數を得てしまつた。併し、其の實友信を斥けることは人々の本意ではなかつた。事爰に至つた所以は、當時三宅家の財政が極度の難關に陷づて、補充の途がない處から、大藩の次男を持參金附きで養子に迎へて、一時主家の財政を彌縫しようとする窮策に過ぎなかつた。

「財政の疲弊を救ふ爲めならば、冗費を省き、儉約を守つて恢復の途を講ずるがよい。自分は未だ嘗て借金の爲めに大名の家が斷絶した話は聞いたことがない。そんな事の爲めに正統の鋼藏君を廢して、他家から繼嗣を迎へるなどゝいふことは忍びない事である」

と崋山は熱心に主張したけれども、遂に其の意見は通らなかつた。

崋山は快々として心中平かでゐられなかつた。彼は江戸へ歸つた後は全く沈默してしまつた。其の頃

から彼は朝夕酒を飲んでいつでも醉つてゐた。酒は飲んでも不平は拂へなかつた。

或日藩の家老村松六郎右衛門が、田原へ歸るに臨んで崋山を訪れて、彼の畫を需めた。六郎右衛門は養子派の頭目だつた。崋山は筆を執る氣がなかつた。と云つて斷ることも出來ないので丁度前日描いた梅の畫に、

世上群葩醉二暖風一　江頭唯見獨醒公
誰憐一樹雪霜後　貞固正兼松柏同

と書いて贈つた。

文政十年七月藩主康明が遂に逝去した。老臣達は豫ての評議通り、友信を隱居させて、姫路城主酒井忠實の次男を迎へて三宅家を繼がせた。それは土佐守康直と云つた。併し康直は至つて賢明の資だつた。彼は友信の爲めに巢鴨に別邸を築いて、其の住居に充て、老侯と尊稱して崇敬して措かなかつた。それよりも更に人々の意表に出た事は、崋山を拔擢して側用人とし、併せて友信の傅を兼ねさせたことだつた。崋山が極力養子に反對した一人であることは勿論康直も知つてゐたが、康直は却つて崋山の忠直を愛し、且つは名聲天下に普き崋山の才學を重用しようとしたのだつた。崋山は一ケ月の中六日は巢鴨へ出仕すべしといふ御沙汰を蒙つた。彼は謹んで命を受けて、忠實に勤務を果してゐた。或人が、崋山に向つて「二君に仕へるのは定めて苦勞であらう」と云つた。其の言葉には幾分嘲笑的の意味が含まれてゐた。すると崋山は言下に「一心以て百君に事ふべし。二心以て一君に事ふべからずである」と答へた。

友信もまた明敏の資であつた。彼は登の言ふことなれば何でもそむかなかつた。友信には正妻はなかつたが、侍女を三人召し使つてゐた。崋山は友信に勸めて其の中の二人に暇を出させ、一人だけを殘させた。それから彼は主人に學問を勸めた。

友信の生母は、お銀と云つて、相州厚木在早川村の百姓幾右衛門の娘であつたが、對馬守康和の侍女となつて友信を生むと間もなく大殿御死去につき御暇が出て、里方へ下つた儘爾來消息は絶えてゐた。

或時崋山は友信に向つて言つた。

「御前は御生母の事を御存じで御座いませうな」

「顏は覺えて居らぬが、人から聞いて承知して居る」

「御生母を戀しう思し召されはなされませぬか」

「折り〳〵戀しう思ふのぢや。生みの母の顏は見たいわ」

「お道理で御座います。就きましては登からお勸め申し上げますが、御生母樣を當お館へお引取り遊ば

しては如何でござります」

友信は少し躊躇して、

「それはよいが、きつう下賤な者ではないか」

「御前をお生み申した方でござります。下賤なるべき筈はござりませぬ」登の聲には力があつた。「人として親を奉ずる心なくんば、畜類と變りはありませぬ。御前の御父君に對する御孝心には御側の者皆感じ入つてござりました。それに尙ほ御生母への御孝養をお盡しにならぬでは、憚りながら人倫に缺くるかと存じられます」

友信は泪ぐんで、

「もう言ふな、予が惡かつた。そちに任せるによつて、よきに取り計らつてくれよ」

其の後華山は此の事を心に掛けてゐた。併し、公務多端でよい機會がなかつたが、秋になつてから數日の休暇を得たので、門人高木梧庵といふ者を伴れて厚木まで旅行することになつた。江戸を發つたのが九月十二日。

途中二泊して、早川村の近くの大塚といふ處へ着いて幾右衛門の事を尋ねると、幾右衛門は酒に醉つて川へはまつて死んだといふはなしだつた。其の娘はと云ふと、小蘭といふ處に住まつて、清藏といふ百姓の女房になつてゐることが分つた。

柏ケ谷といふ處を通つた。雨降り揚句で道が難儀だつた。戸數はわづかに四五軒並んでゐた。たとへば古寺の蕭々たるありさまにも似てゐた。日なたに蓆を敷いて背中をあぶりながらうづくまつてゐる翁があつた。そこでもう一遍此の老爺について幾右衛門の事を尋ねると、老爺は初めのうちはけうとい顏をして返事もしなかつたが、やがて喘息で咳き入りながら……、

――早川といふ處は此の細道から入つて行くと村家がある。又行けば川がある、それが早川だ。其の邊で幾右衛門とお尋ねになれば、名代の酒好きの老爺で知らぬ人はありませぬ。酒は好きだが川へはまつて死んだといふのは嘘でござる。齡は八十にもなりませうがまだ達者で暮してゐる。娘は四人あつて、二人は江戸へ出て居ります。姉は早くから江戸へ出て、大名奉公をして故郷へ花を飾つて歸つたが、間もなく其の母親が死んで、女ばかりの家だからといふので、姉は小蘭の清藏といふ者の處へ緣付き、清藏の弟の長右衛門といふ者を幾右衛門の子に貰つて二女とめあはせて其の家を繼ぎました。幾右衛門も清藏も誠に貧乏には暮して居るが、正直な人物で、殊に清藏は俠氣があつて他村迄も行つて人の世話をして廻るといふ性だから、暮しも思ふやうには參りますまい。併し清藏の家は村中での舊家でござる。先祖は大川勘負と申して、北條の家臣でもござりませう。其の前から此の村には兼古某といい

ふ昔は大層な武士であつた人が、世をさけて此の村へ來て住んで居た。大川はこの兼古を頼つて來て共共に此の村に住むことになつた。やがて早川村の長泉寺といふ寺を開いて、名高い豪農でござりました。小藺では草分で、紋は軍配團扇でござります――と事こまかに話して呉れた。

幾右衛門が死なゝかつた事と、娘の行方が確かになつたので、崋山も梧庵も勇み立つて、教へられた細道をはひつて行くと、誠に世を離れた山里で、木ぐさの匂ひばかりが高く、冷氣は肌に迫つた。餘程行つてから、鷄犬の聲が遙かに聞え、飯をたく煙、麥を搗く音、すべてが都と異つた光景に崋山は何となく嬉しくなつた。村落の中程に里の童が群つて遊んでゐた。子供に向つて幾右衛門と清藏の家は何處かと尋ねると、幾右衛門よりも清藏の家の方が近いと言つた。「では清藏の家を教へてくれよ」と言つて小供に錢を呉れて案内をさせた。道の傍らに地藏堂があつた。前を通りすぎて行くと、栗のいがのやうな頭をした童が驚いたやうな顔をして立つてゐた。其時案内して行く童が、栗のいがを指さして、

「これが清藏さん處の子だよ」

と言つた。崋山がよく見ると、鼻のあたりから眉毛の間がどうやらお銀の俤と似てゐる。

「これ〳〵、お前の家は何處ぢや」

と其の童に尋ねると、童は返事もせずに驅け出して行つた。二人は其の跡からついて行つた。大きな母屋で、便所と木小屋が左右に並んで、栗が一面に干してある。犬と鷄が其處を守つてゐた。緣の側で尋ねると頭に手拭を冠つた年とつた女が出て來て、

「これは〳〵、何れのお武家様でござりますか」と恐る〳〵言つた。

崋山は、此の老婆はお銀の姑だらうと思つた。が考へて見れば、お銀が屋敷から下つたのはもう二十年餘りの昔のことである。いつまでも昔の面影で居るわけはないとも思ふので、顔を打ちまもつてとみかうみすると、耳の下に疵があるのが眼についた。紛れもないお銀であつた。

「拙者は子供の時分お前様に大變可愛がつて戴いた者です。今日は其の御恩返しをしようと思つて、厚木迄行く道を遠廻りしてお尋ね致した。私の面差しを御覽になつたらお分りになるでせう」と崋山は言つた。

「滅相な事を仰しやります。此のばゞは左樣な事は身に覺えがござりませぬ。それは屹度人違ひでござりませう」

「否々人違ひではありません。ではお身樣の名は何と云はれる」

「町と申します」

「昔の名は」

「矢張り町でございます」

それでは矢張り人違ひだつたのかと崋山は思つた。が、如何にしても扨が證據である。

「若しや、お銀殿と申された事はありませんか」

すると老婆は駭いて、

「實は昔江戸で御奉公して居りました頃、さう呼ばれた事もございました。それでは貴君樣は麴町から御越しでございますか。これは飛んだ失禮を申しました。兎に角、奥へお入り下さいませ」

と奥の間へ通したが、何處も板敷で、疊はない。花筵を敷いて座を設け、さて手拭を取りすてたのを見ると、紛ふかたもない其の人である。が餘りと云へば淺間しい變り樣である。お銀も涙にむせぶばかりである。崋山は、彼女が其の昔錦衣を着て御殿勤めをしてゐた頃の子供心にも美しいものに思はれた其の面影を眼に浮べながら、人間といふものがかうまで變るものかと思へば不思議といふよりも、果敢ないやうな悲哀が胸に逼つて來るのであつた。彼もおぼえず暗涙を催した。

「さてお銀樣、拙者を誰と思し召す」

「さあ、上田壽美樣で御座いませうか」

「否々、上田殿は十五年前に亡くなられました」

「では渡邊登樣で御座いませう。まあ貴下樣は何んとした立派なお侍になりなされたことか、まるで夢のやうな心地が致します」

それから彼女は自分の子供達を其の場へ呼んで一々客に拜をさせた。二男の幸藏といふのが十九で、次が元と云つて十一の娘、榮次郎といふのが八歳でこれが例の栗のいが、其の下が三歳の留吉、彼女の夫清藏は今日は止むを得ない用事で他行してまだ戻らなかつた。其處へ長男の清吉といふ若者が厚木から馬を曳いて歸つて來た。屈寛な若者で何んとも云へず素朴だつた。

崋山はお銀に向つて、友信公の思し召しを傳へた。するとお銀はハラ〳〵と泪を流して、若君樣の御成長のお姿は、わたしも一度拜みたい。それは山々なれど、今のわたしは見る影もない賤の嫗、再び金殿玉樓の住ひは思ひも寄らぬこと、かねては、我が身一人が幸せになつては此の子供達が可哀さうでございます。若君樣の思し召しだけでもうわたしには十分過ぎた有難さ。あすが日死んでも心殘りはございません。何卒貴下樣より宜しく御傳へ下さいませ、と言つて又さめ〴〵と泣くのだつた。崋山も此の有樣を見ては其の上云ふ言葉もなかつた。そこで彼は用意の金子を取り出して、それを三つに割り、お銀、清藏、幾右衛門の三人に友信公の名を以て與へた。家内中喜ぶこと譬へやうもなかつた。幾右衛門

も來た。お銀は客にそばがきを馳走した。餘りうまくはなかつたが崋山は無理に二椀食べた。梧庵は一椀でやめた。酒も呉れたが濁酒で喉へ通らない。吸物とうで玉子を出したが、どちらも味がよくなかつた。お銀は氣の毒がつて今度は梅干を出したが、是だけは、江戸の梅干より遙かにうまかつた。すると其のあとで粟餅といふ物を勸めた。が何分腹がいつぱいで入らない。崋山は漸う一つ食べたが、梧庵は青い顏をして眺めてゐた。お銀は嬉しさの餘り、何かなと頻りに肝膽を碎くのだつた。

日が傾いてから暇を告げた。清吉が荷物を持つて厚木迄供をすることになつた。一家を擧げて村外れ迄送つて來た。村の人々はみんな檐下へ飛び出して來て眺めてゐた。かの武陵の桃源とはかういふ處でもあらうかと崋山は思つた。

厚木へ着いたのは日暮れ頃だつた。田舍ながら繁華な町だ。崋山は江戸を發つ時、或人から厚木の溝呂木宗兵衛といふ金物屋の主人へ紹介狀が貰つてあつたので、其の家を尋ねて行くと立派な店であつた。梧庵が手紙を持つて先きへ一人で飛び込んで行つたが、暫くしてブリ〳〵しながら戻つて來た。

「先生、馬鹿にして居りますよ。宗兵衛といふ奴は、手紙を讀んでも返事もしないのです。大方貧乏繪師が草鞋錢でもねだりに來たと思つてゐるらしいんです」

「あは〻〻、さうか、では他へ行かう。清吉、何んといふ宿屋がよいかな」

「萬年屋といふ家が厚木一の旅籠屋でございます」

「それでは萬年屋へ參らう」

宿へ着くと崋山は亭主を呼んで、

「拙者は三宅土佐守の家來で渡邊登と云つて、道樂に繪も描けば詩も作る妙な男ぢや。で、此の土地にわしのやうな人があつたらお招きをして、一と晩語り明かさうと思ふ。物を讀む人か、手を書く人か、歌俳諧詩などをやる人か、誰でもよいから呼んで貰ひたい。酒と肴は拙者が持つ。拙者は詩や繪は好きだが人の合力を受けて乞食の眞似をする遊歷の先生ではない。殿樣から祿を賜つて氣樂に世を送る人間だから、安心して呼んで來て貰ひたい」

と眞面目な顏をして言つた。梧庵はクス〳〵笑つてゐた。亭主は崋山の立派な風采を見たゞけで安心して方々へ觸れ廻つた。そこで、齋藤昨非といふ手習師匠、醫者の唐澤蘭齋、提燈屋の內田屋佐吉と云つて長唄の上手、目藥屋常藏これは三味線ひき、なんどの人々が集まつて來た。酒が始まつた。其處へ小薗の清藏が喘ぎ〳〵驅けつけて來た。宿の小者が菓子を堆く盆に盛つて「是は小薗の清藏といふお人からお客樣へ差し上げてくれと申されました」と言ふ後から、清藏は人々の間へ來て畏まつて、膝頭を丸出しにしたまゝ敬〻しく禮拜した。清藏は、今日荻村といふ處の叔母が大病なので行つて居たのだ

が、登が訪ねて來た事を歸るとお銀が話したので、草鞋も解かず其の儘走り出すと、道で悴の清吉に逢つた。

「お客樣は厚木に御座らつしやるかや」と父が尋ねると、

「と〻樣、早く走つて行かつしやれ。おらは今迄お酒を戴いて、これこの通り足がきまらぬ程たべ醉つて歸る處ぢや、早く〳〵」

と悴にせき立てられて、夢中で驅けて參りました、と喘ぎ〳〵話すのだが、其の聲は鐘のやうに大きかつた。四角な赫黑い顏、鰐口で、眉は魚尾、鬚は栗毛、起ち居は蝦蟆に似てゐる、儼然たる村丈夫である。崋山は一見して清藏が好きになつてしまつた。

「それはよく來て呉れた。兎に角皆さんと一緒に飲んでお呉れ。わしは大層醉つてゐるから、話は今夜寢てからにしよう」

と崋山が言ふと清藏は大喜びで、みんなの後ろの方へうづくまつてガブ〳〵酒を飲んだ。目藥屋常藏と、醫者蘭齋の娘で十二歲になるのが三味線を彈いて、佐吉が長唄をうたつた。梧庵と蘭齋が踊つた。崋山も扇舞ひをやつた。人々は笑つた。しまひに崋山は醉ひ潰れて其の場へ寢てしまつた。三日ばかり厚木に逗留した。其の間に崋山は附近の風景を尋ねたり、人に會つたりした。お銀の問題はそれきりになつた。彼女は決して不幸ではなく寧ろ幸福な境涯であることが分つて崋山は安心した。彼は「厚木八景」を描いて清藏の家へ贈つた。

誠忠

新藩主土佐守康直が崋山を信任することは頗る厚かつた。崋山の獻言で容れられないといふ事はなかつた。康直は一男一女をまうけた。巢鴨の友信にも男の子が一人出來た。それを但太郎君と言つた。康直の意中では、女子は他家へ嫁せしめ、男子を以て世繼にしようと考へてゐた。で或時内々で重役に其の事を下問した。併し一人として可否を言ふ者はなかつた。崋山は其の事を聞くと直ぐさま伺侯して、世子には巢鴨の但太郎君を引き取つて養ひ、それへ當家の姫君を配するのが道であると言つて憚る所なく獻言した。

「巢鴨の御隱居樣は、先殿の御舍弟でいらせられ、當然御家督をお繼ぎになるべきおん方でございます。それにも拘らず御病氣の爲め空しく退隱閑散の身とおなり遊ばしました。されば當家の正統といふべきは此の君を措いて他にはございません。恐れ乍ら我君は他姓より入られて跡を襲がせられたおん方、今若し若君を御世繼に立て〻他家の姫君を迎へさせられましたならば、南朝の遺臣たる當家の血統

も遂に斷絶するに至るで御座りませう。祖宗の血統を大切と思し召さば、何卒伯太郎君を御引き取りの上、姫君をば御配せ下さりまする樣、左樣になされますならば、遠くは御先祖の靈魂を慰め、近くは一家中の人心を歸嚮せしめる事もできるでござりませう。此の儀切に御許しが願はしう存じまする。もし登の申し上げた事が、御意に叶ひませぬならば、此の首を刎ねられて、御成敗をなされても些かも御恨みには存じませぬ」

康直は賢明だつた。

「登、よくぞ予を諫めて呉れた。其方の申す通り、伯太郎を引き取つて世繼にするから安心致せ」と康直は機嫌よく言つた。

崋山は平伏してたゞ有難涙にむせぶのみであつた。

文政十二年八月、崋山は藩主から、三宅家の家譜を撰集すべき内命を受けた。翌天保元年には其の材料蒐集の爲め、三宅家の上祖康貞時代の舊領地である武州幡羅郡熊尻に赴いて、地勢、風俗、舊跡、口碑、傳說等を調査し、三卷の著述をして、『訪熊錄』と題して康直に獻じた。

天保二年十月には休暇を得たので、其の期間を利用して毛武地方に旅行した。それは、妹のお元が、桐生の絹商人岩本茂兵衛といふ者の許へ嫁してゐるので、久々で其の妹に逢はうといふのが主なる目的だつた。昔は澤山あつた弟妹も今は誠に乏しくなつてしまつた。板橋の寺へ貰はれて行つた次男は僧となつて定意と云つたが二十五で死んでしまつた。芝の青松寺へ小僧に遣られた三男の喜平次は、其の後堀田某といふ旗本の養子となつたが是も早世した。五男と季女も幼少で死んでしまつた。現在では殘つてゐる同胞と云つては、四男助右衛門と長女のお元だけだつた。崋山は、若死をした弟妹達の事を思ひ出す度びに悲痛な氣持がした。其の弟妹達は、一人の總領の自分を生かす爲めにみんな犧牲になつて死んだやうに思はれた。あの長かつた極度の貧困時代に、弟妹達が食べるものも着るものもなく捨てられた雛鳥のやうに固まり合つて慄へてゐた頃の姿を思ひ出すと、彼の眼には知らず知らず泪が湧いて來た。

茂兵衛夫婦は喜んで、心を盡して崋山を款待した。崋山は數日此の地方を見物した。歸つて、彼は『毛武遊記』といふ一篇の紀行文を書いた。

天保三年五月崋山は家老末席に列せられ、食祿百石別に役料二十石を賜つた。同時に幕府の海防事務官に補せられた。崋山は四十歳だつた。翌年春彼は作譜の用件を帶びて田原へ赴き、領内の各所を巡視して岡崎の城下へ出ると、其處で江戸表からの急使に接し一旦田原へ引き返した上、馬に鞭つて江戸へ歸つた。

彼の留守中江戸では大事件が起きてゐたのだつた。一體田原藩といふ土地は、三州渥美半島で、外は遠州灘に面し、内に入海をかゝへて、領民の大半が漁業に依つて生活してゐる土地である。處が、此の海邊の領民の間には久しい間悪い習慣があつた。それは有名な遠州灘で難船した諸國の商船の貨物が漂着する毎に隠匿してしまふのだつた。大阪、尾州、紀州邊りの商人が年々それが爲めに蒙る損害は尠くなかつた。すると、今度或者が自家の利益の爲めに其の不正の事實を暴いて、先方の商人を煽動して事を釀し、遂に紀州家の後援を得て幕府へ訴へ出たゝめに田原藩の漁民の主立つた者數名が召し捕られて江戸表へ差立てられた。事態は容易ならぬ形勢となつた。三宅藩の重役は周章爲す處を知らず、評議の結果、崋山を呼び寄せて事件を穏便に解決せしめるやうに盡力させることになつたのだつた。崋山は一身に替へて此の事件を引き受けることになつた。併し、曲は飽く迄も我にあつた。だから正々堂々と爭ふ餘地はなかつた。殘されてゐる手段は裏面の運動のみである。そこで彼は平常書畫の道に依つて交りのある權門勢家を訪うてひたすら憐察を乞ひ、或は知友の間を奔走したりして、約三ケ月の間寢食を忘れて此の事にのみ盡力したので、到頭其の效が現はれ、さしも喧しかつた事件も結局僅かの内濟金で事濟みになり、漁民共は釋放された。一家中の者は漸く愁眉を開いた。漁民達は喜びの餘り村役人の手で醵金して金八十兩の金を持つて崋山の所へ禮に來た。崋山は勿論それを受けなかつた。

「自分は君命を奉じて職分を盡したばかりだ。領民から謝禮を受ける道理はない」

併し漁民達は、一同の志だから是非納めてくれと言つた。それでは已むを得ないと言つて一旦受納した後、崋山は、是を積み置いて、後年不漁の時取り出して賑恤の用にするやうにと言つて、其の儘大庄屋の手へ預けてしまつた。

崋山が、田原藩の家老として爲し遂げた功績は此の他にも少くなかつた。天保四年九月、幕府は三州渥美郡田原の沿岸に新田を開拓すべき旨を以て、勘定所の役人が實地見聞の爲め出張した。そも〳〵此の入海に沿うてゐる今田村はじめ五ケ村の民は、漁業、製鹽、採藻などすべて海産物に依つて生活をしてゐる者共で、藩としては彼等から雜税を徴收するといふ利益があつた。殊に其の海岸は田原藩の重要なる要害地で何れから見ても新田開墾の事業は、藩内の者にとつて容易ならざる損害となるのだつた。そこで是に對して不平を唱へない者はない有樣だつたが、誰も幕府の威勢を畏れて、敢て爭はうとするものはなかつた。此の時も崋山は敢然として一藩の主張を貫くべく、翌年三月田原侯から幕府へ差出すべき開墾廢止の願書を起草して、老中及び勘定奉行等へ差出した。處が、九月になつて右の願書を取戻されると共に、開墾の事は評議已みになつた旨が達せられた。

天保四年といふ年は、春から夏へかけて天候頗る不順で、晴雨定め難く、寒冷が非常に早く襲つて來

た。果して其の年は米穀不作で、殊に奥羽地方は大飢饉となつて、米價は非常に騰貴し、一石金二兩、やゝもすれば二兩二分に上つた。そこで米商は逸早く買ひ占めをして米を賣らなくなつた爲め、益々騰貴する一方で遂に一兩に四斗一二升の相場を現はした。國々では五穀が盡きて草の根を食ひ、家畜を屠り、餓死するものが到る處にあつた。田原藩内は幸ひさしたる被害はなかつたが、崋山は前途を憂慮して、藩民を戒める布令を起草して、藩主の名を以てこれを領内に布告した。彼は其の年、或豪商に諭して米數百俵を購入させて萬一に備へた。天保六年に至つて、彼は更に藩主に請うて、庶民萬一の救濟に應ぜんが爲めに米穀を貯藏しておく「お救ひ倉」を造ることを唱道した。一藩の人々は崋山の赤誠と藩主の仁慈とに感激して、百姓、町人、神官、僧侶、山伏に至るまで集つて來て、材木を獻ずるものもあれば、土石を運ぶ者もあり、鉋、鋸を用ひ、鋤鍬を執り、各々分に應じて力を盡したので、日ならずして倉廩は落成した。藩主はみづから筆を執つて扁額に「報民倉」の三字を書いた。そこで崋山は率先して、繪畫の潤筆料を以て購入した處の米數十俵を納めたので、四民爭つて獻納し、倉廩は忽ちにして充滿された。

天保七年は春から霖雨頻りに降り續いて少しも晴天を見なかつた。夏になつても冷氣勝ちで、炎暑が更に進まなかつた。八月になると、暴風雨が續け樣に襲來した。あらゆる人々が皆暗い氣持になつた。

凶作は目前に迫つてゐた。幕府では屢々布令を發して米價を定めたが、之には從ふ者はなかつたので、米價は奔騰して一兩に三斗六升となつた。果して日本全國未曾有の飢饉に襲はれた。翌天保八年の春になると、菜色野に滿ち、餓莩道に横はり、老幼飢ゑに叫び、見るも無殘の光景を現出した。其の年田原藩主は丁度在國だつた。彼は此の慘狀に沈んでゐる領民を救ふには到底崋山を措いて外にはないと思つたので、急に登を召し寄せて救荒の策を講じさせようとした。使者が江戸に立つた。處が折悪しく崋山は重病の床についてゐた。彼は自身の信用してゐるところの用人眞木重郎兵衞を代理として田原へ急行させた。彼の病氣は危篤の狀態だつた。其の中で彼は書を上つて救荒の計策を述べようとしたが、手が顫へて筆が運べなかつた。病氣が少し怠つて來ると、彼は友人の農政學者である佐藤信淵や、紀州藩の遠藤白鶴等と謀つて、救荒に肝要な書物を借り入れ、人に之を寫させて、藩の救荒に從事する者に送つて參考に供させたり、或ひは自身で筆を執つて凶荒心得書を起草したりした。藩主康直もまたよく臣下の謀を容れて、役人を督勵して日々領分を巡檢し、窮を訪ね、疾病を施療し、倉廩を開いて焚き出しをするなど、心を盡して救荒の政治を行つたので、天下到る處秋風吹きすさみ、慘話悲報を一日として聞かない日はない中に、田原領内では一人として餓死した者はなかつた。此の年の秋康直は江戸へ參覲すべき處であつたが、荒凶善後策の爲め在國を請うて留つてゐた。翌天保九年八月三宅土佐守は、救荒

の手當の宜しかつた事に依つて特に幕府から褒詞を賜つて頗る面目を施した。

崋山は一藩の尊敬の的となつた。又天下有志の輿望も崋山に歸せんとする有樣だつた。天保八年には世子侶太郎の師範役を命ぜられ、讀書と習字を敎へた。かうして彼の聲望は隆々として登つて行つたけれども、其の年の七月彼の家庭は大きな不幸に遭遇した。それは崋山の末弟五郎の病死だつた。五郎は如山と號し、幼より書畫をよくして、殆ど崋山の衣鉢を傳へるものがあつた。崋山は心中私かに、五郎を準養子にして家督を讓り、自身は田原の藩籍を脫して一浪人となり、四十年來蘊蓄せる抱負を天下に試みようと考へてゐたのだつたが、五郎の死に遭つた爲めに彼の希望は挫折せざるを得なかつた。

風貌

崋山は偉大な體格を有つてゐた。顏も長く、肉附がふつくりしてゐた。鼻は高く、眼は細長く切れて、威嚴と慈愛の光に滿ちてゐた。常に長刀を帶び、短袴を着して、市中を濶步した。其の風采武骨稜稜として、誰が見ても一個の劍客としか見えなかつた。

彼は平常溫良恭謙の人だつたけれど、而も非常な威嚴を具へてゐた。誰でも、崋山と對談してゐると大盤石で頭を壓へられるやうな氣持がすると云つた。彼はどんな場合でも悠然としてゐて、少しも慌てるといふことはなかつた。或年の夏、彼は藩主の客筵に侍してゐた。時しも俄に大雷暴雨が到つて、轟々として耳を貫き家を倒さんばかり。其の光景が凄じかつたので、一座の人々は恐慌度を失つてしまつた。其の中で崋山は獨り泰然として、懷中から例の小冊子を取り出して、其の場の有樣を面白く寫生して後で衆客に示して興を添へた。

相州厚木に彥八といふ俠客があつた。性質素朴小兒の如くで、不義を惡むこと蛇蝎の如く、よく人の世話をするので厚木へ行くものは誰でも此の彥八を訪ねて行つた。初對面の時、相手が少し自慢口をきくと忽ち大聲を發して罵倒するのが彼の手段だつた。崋山が其の土地へ遊んだ時、彥八の方から訪ねて來た。さしも驕傲な彥八も崋山の前では叩頭するばかりで少しも氣勢が揚らなかつた。座談中に崋山は彥八に向つて、

「厚木といふ所は饒なよい土地だが、足下は何か不足に思ふ事があるか」

と尋ねた。彥八は俠客だけれども村長を勸めてゐた。崋山がかう尋ねたのは、政治向きの可否を聞いて見ようと思つたからだつた。すると彥八は

「今日は今日の事をして、明日になれば明日の事を致しますばかり、私は別に思ふ事もありませんが、併し、今二萬兩の金を無利息十年賦で厚木に貸して呉れる人があれば、土地に一人の貧乏人もなく、厚

木の町の富も大した物になると思ひます。だがこれは私の夢で、今の殿様は仁慈の心が少しもなく、何の彼のと云つて取り立てばかり嚴しいのですから、所詮殿様でも取り替へなければ駄目で御座います」と言つた。

崋山は駭き色をなして言つた。

「成る程百姓が田を作つて居れば、領主が誰であらうと構はぬやうなものだが、足下の言葉の如きは、狗にも劣つて居ると云ふことができる。昔ある百姓が飼つてゐる狗が地頭に吠えついた。地頭が大いに怒つて百姓を責めた。すると百姓が頭を搔いて詫びて云ふことには、私の飼ひ狗は私ばかりを主人と存じ、お地頭様は私の御主人と申す事は存じませぬゆゑ、吠えたのでございませう。何卒お免し下さりませと言つたので、地頭も感心して、蒯通が齊あることを知つて、天下あることを知らずと云つたのと同じであると云つて、褒美の金を與へて立ち去つたといふ話がある。どうでござる。厚木の民は此の畜類にも劣つてゐるのだらうか」

彥八は默然として答へる言葉がなかつた。

崋山は物事にあたつて非常に熱心である。或時大橋訥庵と二人で或人を訪ねて、はじめて西洋の地球圖を閲覽した。崋山は殆ど感に入つてしまつた。午前から午後迄地圖と睨めくらをしてゐて、飯も食はねば茶も飲まなかつた。訥庵は退屈して弱つてしまつた。

「先生、もうそろ〳〵引き上げませう」

「いや、もう少々――」

到頭日が暮れてしまつて、其の家の人が燭を運んで來たのではじめて崋山は止めた。崋山は和漢洋の學に通じてゐるほか、非常に多藝多趣味だつた。武道は就中彼が重んじてゐるものだつたが、當時諸藩の子弟で武術を習ふ者が、專ら直心流と云つて所謂型劍術の修業をするに止まつて、實用に適しない觀があつた。彼は之を憂ひて其の改革を圖つて、神道無念流の劍客杉山大助、一刀流の齋藤彌九郎の兩人をして田原藩の子弟に指南をさせた。それがために一時兩派の間に軋轢があつたけれども、忽ちにして藩の武風を一變することが出來た。藩中の者が武器を買ひ求めたり修繕をしたりする場合にも、多くは外觀を飾つて實用に適せぬ惡弊があつた。彼はどうかしてそれを矯正したいと考へてゐたが、よい機會がなかつた。すると或時市中を通行してゐて、とある骨董店の店に、非常に古くて血痕をとゞめてゐる甲冑が飾つてあるのを發見し、由緒を尋ねると、關ケ原の遺物だと骨董屋が答へた。崋山は喜んで直ぐ樣買ひ取つて、常に座敷の床へ飾つて置き、藩の子弟が來る毎に必ず其の製造が實用に適してゐることを丁寧に說明して聞かせるのだつた。

彼の學才はあらゆる方面に應用された。或時藩の用人某が崋山を訪ねて、藩の財政の事に就いて質問した。

「我が田原藩は、勝手元不如意の處へ、借金が夥しく、利息は年毎に嵩み、其の上外では公用の費途が多く、内には家中の扶助から國元雜用、江戸屋敷諸入費、道中參覲の入用などで、收納では迚も十分の一にも足りません。そこで年々借金ばかり繰り廻してゐるから、富國など〻申すは愚かなこと、可成りの程度の御勝手にさへなることは、百年の後でも覺束ないと考へます。之に就いて先生の御意見は如何であるか、承りたい」

「私にも別に意見と申してはありません」

と崋山は答へた。すると某は失望の體で、

「それでは迚も可成りにもなる見込みはありませんのですか」

「いや、決してさういふわけではない。しようと思へば、可成りは勿論、富國にもなれないことはありますまい」

「左樣ならば、先生に於て御意見なしとは申されますまい。是非承りたう存じます」

そこで崋山は徐ろに口を開いて、

「さればです。意見といふ程のことでもありませんが、假りに今、四斗樽をもつて水桶にする時には、四斗の水で足りるでせう。然るに此の桶に穴が澤山あつて、洩れ水が多い時には、幾ら水を入れても、穴を塞がぬ間は、入れた甲斐がない事は誰でも分つた事であります。其の誰しも分つて居る事をするのが富國の基本であらうと私は考へる。處が、其の誰でも分つてゐる事をしないで、たゞ水を入れることばかりに骨を折つて居ると、益々穴は大きくなるばかりで、いつ迄も水が桶に滿ちるといふ時はないでせう。だから、目下の處穴を塞ぐ事ばかりを仕事にして、他の小才覺は一切止めてしまつて、無用の骨折はなさらないことが肝要である」と言つた。天保九年三月、崋山は自己の所藏に係る書籍五百五十餘部、書畫二十餘軸、畫冊法帖若干を藩主に獻納した。其の爲めに夥しい藏書や書畫を調査してゐる處へ、或る人が遣つて來て、崋山に向つて、

「折角先生が積年の御苦心に依つて蒐集された書畫であるから、少しは家にも殘して子孫にお傳へになつては如何ですか」と言ふと、崋山は、

「否、此の書畫は、いづれも僕が燈前の困苦の餘りに出たものではあるが、それも皆主君の恩澤であるから、私の物で、私の物でない。聊か報恩の心持で今度獻上しようと思ふのです。もしも私の子孫に讀書の志のある者があれば、私の苦學に倣つて、自分の力で蒐めて讀めばよい。子孫の前途といふ事も